見てゐる間に『わしは耳が遠うてな』といふ。裏庭は結構、秀吉の馬繋松といふのがある。木は若い。これに馬を繋いだ秀吉なら秀吉大正十四年お歳廿五歳位の勘定だ。S君、そこに居た三人兄弟の可憐な子供に『君はあの婆さんの子か肖とるぜ』と訊くと恥かしがつて第一の兄が學生帽をぐいと深く冠り顔をかくす。第二が眞似る第三同じく。因にいふ女客はおばあさんに蜜柑の籠をお土產に持つて來て居た、七八十錢ぐらゐのものだから、この返禮に天下茶屋のおばあさん、今度この女客の家を訪ねる時は一圓ぐらゐの菓子折を持參する事が必要ならん。天下茶屋のおばあさんの爲めに氣をつけて置いてあげる。

大大阪君似顔の圖〔二〕

四月一日大阪が大大阪になつた日今橋の宿で花火の音に目覺める。寢坊の男が目が覺めるくらゐだからやすい花火ではあるまい。と申して一日あげづめにする花火だから高價のものばかりでも續くまい。耳を澄まして花火の音の價踏みをする大體、一發十四五圓ぐらゐの花火の音だ。けれどもパンと彈ぢけて煙の中から風船が一つ。薄曇りの彌生の空にゆら〳〵と浮き出る仕掛けがあるからもう少し高からう。二十圓々々。記念日の花火の相場二十圓ときまつた。

◎

着物を着換へて外へ出る。道筋に北濱の株式取引所ある。午前の取引が了つたと見えどや〳〵仲買人が出て來る。大阪の町中で洋服に帽子を冠らず目を見据ゑ靴の踵を地につけずぴよん〳〵歩いてゐる人間を見たら仲買人と思つて差支へない。出て來たその一人に訊ねてみた『大大阪になつたお祝ひの相場でもありませんでしたか』するとその男は面倒くさそうに答へた『相場は頭を下げよつたンや』『ハア、祝意を表しておぢぎをしましたか』『阿呆いはんとはよう行け』

◎

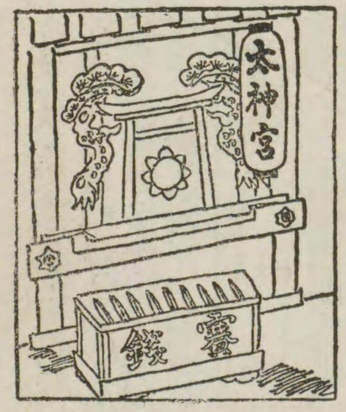
街頭に出ると花電車、花自動車。——普選團までが普選實施と一しよに大大阪を祝ふ張幕をした自動車を驅けらしてゐる。S君がゐたら『お祝ひやから、ふせん（風船）を飛ばすのや』と洒落るだらう。代りに洒落て置く。かくて社についた。編輯局の机に紙を展べ、さあらば大大阪の顔の輪廓の續きを述べよう。

（い）大大阪の顔の輪廓

——顎の部——

◎『穴から太神宮』の事

紀州街道をなほも車をはしらせて行つた。道の土が追々濱砂まじりになつて行く。やがて住吉へついた。繪馬堂の額をみると大方船の繪だ、一枚の畫にして右帆の船もあれば左帆の船もある。超越の神の御前には風も自然を超越して吹く繪の額を奉る。太鼓橋を年寄りは信仰の爲め骨を折つて渡り、血氣の青年は失敬して樂な方を渡つてゐる。緣結びの神のおもと社がある



『このお社が二上りの文句のおもとやしろや穴から太神宮さんを伏拜みといふのの、そのおもと社でつせ』とS君二上りを引

用して説明する。『穴から太神宮』といふのは圖の如き設備の遙拜所があつてこの中央の穴から拜遙すれば伊勢へ參詣したと同じのださうな。時と金の無い民衆の爲めに有難い事である。信心がエーテルでも傳はつて行くのだらうから、現代式に名を更へれば無線遙拜所とか無線參詣所とかいふべきである。

取りも直さず二百萬の大阪市民は神社の氏子になつた譯であるんである。故に諸君もいよ〳〵神職たる責任を重んじ――』云々。

●廣告札肩を押し合ふ事

住吉の大通りを通る。名物いもをふかす匂ひがする北側の細道の角にこんなに廣告立札が肩を押し合つてる。廣告主は大概料理屋かお茶屋だ。住吉新區のこの種の成長力の象徴だ。札にはみな指差しした手が描いてある。その手の根元には一寸洋服のカフスが描いてある。サラリーマン、洋服人種を多く招き寄せる積りか。これ等の浮いた稼業の廣告札に並んで『雜具貸物、自宅告別式具』の廣告が貼つてある。人生の春、秋共に合せて掲げ出した廣告！買ひ占めて置いたが案外價が出ないので嫌氣がさし、その儘にしてほつたらかして置いてある地形だけ出來てる土地が澤山目につく。

●大和川の柳の事

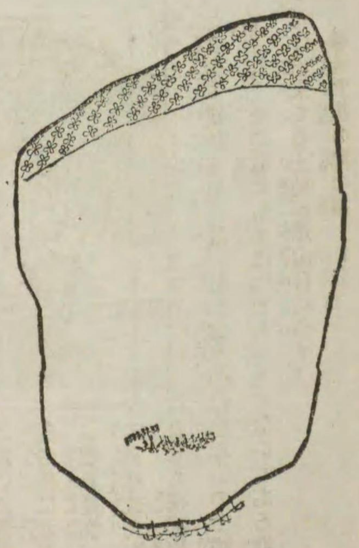
高燈籠に上る。S君南の方、蕪野の黄褐色の中に一筋銀色の絲の引かれたるを指し『あれが大和川でつせあこから手前までが今度大阪になるのや』といふ。大阪の顔のはづれの顎の線が大和川になる譯だ。大和川の河べりには既に柳が線を抽いてる、然らば柳が顎の髯に當る譯だ。よつて顔の圖に描き込む。（圖を參照せられたし）それから住吉一體風物の特色は、砂地に松林に燒木杭の柵だ。これを唇の下のひげになぞらへまた描き込む。

大大阪君似顔の圖〔三〕

（い）大大阪の顔の輪廓

●燒餅屋元祖二つある事

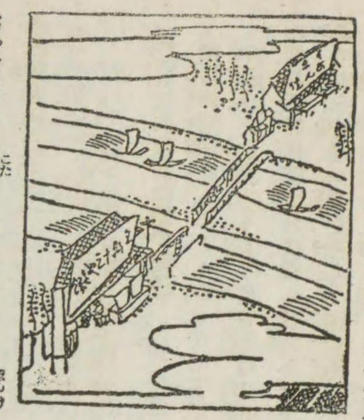
大大阪の北部即ち顔にして頭の方面には何があるだらう？さあS君出かけやう。賑かな淨正橋通りを右に見て北へ向け街道を行く。鐵道線路の踏切が四つもある。行き當る度びに待たされる『汽車が來たら街道の人間を待たすべし』といふ規則を誰が作つたのだ。若しその作者にこのうるさい街道を一遍でも通らせたら『街道の人間が來たら汽車を待たすべし』と早速改正するだらう。



街道盡き廣い川が見える。新淀川。長い橋がある。十三橋。その橋のこつちの橋詰と渡つた向ふに同じやうな燒餅屋がある。そして看板に一は本家、一は元祖と書いてある。家元が二軒ある譯だ。この不審晴らさねばならぬ。先づ雙方の燒餅を喰つてみた。二錢銅貨大の餡入りの扁たい餅を盆に十載せて出す、五つはよ

ぎの餅皮で五つは白い餅皮だ。うまさもまづさも兩家全く同じだ。價段も兩家同じく一つ一錢づつだ。商品の成績では裁きはつかぬ。そこで橋手前の大黑屋へ戻りおやぢさんに訊いてみた『一體どつちが本家なのだい』と。するとおやぢさんは答へた『どつちやも本家や。たゞ名前が違ふ。こつちやはあん燒き、向ふはやき餅』今度は橋向ふの今里屋久兵衞さんへ行つてきいてみた『一體どつちが本家なのだい』今里屋さんではおかみさんが出て答へた『どつちやでつかな。たゞ十三の本家はこゝや。向ふは橋向ふの本家やらう』と。そこでS君こうもあらうかと筆者の味めるざれ歌

十三のはしをはさめる燒餅や



やきもちをせずやき餅を賣る（十三は土地の名）

S君聞いて『狂歌どころやない。買うたこのぎようさんな燒餅どないしよう』『いくつある』『七十六ある』『それで本家の店をもう一軒開こう』

◉神崎川にポプラの事

『S君。この土地の燒餅はいくら喰べても胸がやけぬそうな』『なぜや』『それ土地の名がじゆそう（重賣）だらう』『あまり貴重藥やない酒落や』かく無駄をいふうちにも自動車は能勢街道を進み早くも三國の宿へつく。日はとつぷり暮れる。この間、人家の並べるところは燈火相應に賑はしけれども、家盡くる間は道の左右夕闇の大根畑廣く續き、遙かなる墨の山根まで見通せる程なり。白衣の人三々五々、顧みて自動車を珍らしがるはみな朝鮮人なり。大阪市東淀川區は大根畑にして區民に同胞朝鮮人多しと當分のうちは地理書に書かねばなるまい。大阪君の似顏の頭も大根畑を描込む事にする。三國は酒酌ます印の提灯つりし小料理多き宿。宿外れに川あり神崎川といふこゝまでが大大阪の由。川にかゝる神崎橋の欄干に頰杖つき闇を透せば、にぶ色の銀の流れの小岸にポプラすく〳〵天に立つ、獨逸畫派の理想的な單色版をみるよう。

◉『不勉强』の看板に申譯がある事

車を返す。十三に戻る頃、道の左側に小店で『不勉强の親玉』と書いた看板を出した家がある。不審晴らさねばならぬ。店へ入るとエハガキや畫額を賣つてる。家へ持歸つても使へるよう着物かけの木釘を買ひ乍ら訊いた『不勉强で今日商賣が成立ちますか』店にはおばあさんと小さい娘と中年のおかみさんがゐた。おかみさん笑ひながら『そこの處をな。何とか解釋して頂きます』わが店のモットーを客に任すとは異な事である。考へてゐるとおかみさんしきりに眼を上にやるで、その方を見るとなげしに横額がかゝつてゐてそれには『買ふ氣になつ品を賣る』と書いてある。この料簡なら今日の商賣は成立ち過ぎる位だ。表の看版は客を呼ぶまでのトリック店の實は横額の方で盡すとみえたり。

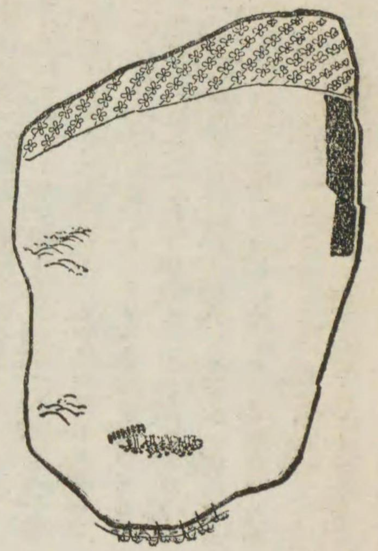
大大阪君似顏の圖〔四〕

（い）大大阪の顏の輪廓

――掻上げの部――

◉文化は案外單純な事

『こゝが天六というて大阪の北では一番賑やかい處ぢや』S君自動車の窓より敎へる。その天ぷらやの名前



みたような處を通つてそれから細い道を困難してしばらく行くと見晴らしの廣い河岸へ急に出る。毛馬の閘門といふ處ださうな。向ふに幅の廣い川が流れてゐる夫に丁字形に稍幅の狹い川が取付いてゐる。其取付きの角に饅頭形の小島があつて洋館が立つてる。竣功碑も立つてる。淀川の水を大阪市街へ程好く流すよう調節するところださうな。成程煉瓦作りの『せき』があつて『せき』の股の間より水を數多い小瀑にして流し落してゐる『これぢや舟も通るまい』といふS君『こつちやへ來い』というて即席の閘門水務技師のような顏をして小島の裏へ引つぱつて行つた。そこに細い別の流れが通じ夫を灣に受て漕ぎ入る舟と注ぎ入る水と溜つた頃、灣の水門を開いてあんじよ具合よう本流へ流し出す仕掛けになつてる。『はあ、ないしよで通してやるんだね』『ないしよといふ事あるもんか』眺めてゐるうちこんな考へが浮ぶ。文化の施設といふものはその思ひ付きは案外單純なものだ。

飛行機にしたつて無線電話にしたつて、空を飛び度い、遠方の人と話したいといふ思ひつきは原始人や子供のもつとも早く考へつくところのものだ、それを複雜な設備で成就したのが文明の利器だ。

この閘門にしたつて大阪の子供

が道ばたで砂あそびする考へと考へに於てはあまり違ひはない。ただ設備が偉大なのだ。

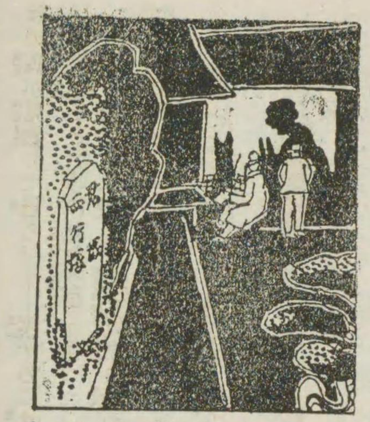
だから將來も之等人間は童心の慾を捨てゝはいけぬたとへそれがどんな架空な想ひであり馬鹿馬鹿しく見える企てゞあらうとも捨てない以上必ず成就する時機が來べきことは空飛ぶ飛行機、空走るラヂオ、そしてこの閘門が證人だ。童心の慾であれ！分別の大人になるといふ事はあきらめを多く持つといふ事だ。あきらめては文化は發達しない。童心の慾の點に於てはS君も筆者も人後に落ちぬ。毎日考へる事は『うまいものを喰はう』『面白いものを見よう』たゞこれ切りだ。そして決してあきらめぬ。なんとわれ等は文化の先驅者ぢやないかとS君に語つた。S君聞きも果てず『そやく』と彼の偉大なる齒を剝む出した。彼のロイド眼鏡は文化の象徴でこの齒は未開人の象徴だ。彼の顏は未開と文明の過渡期たる現代にもつとも相應はしい顏だ。予はその意味でこの顏をこよなく愛する。

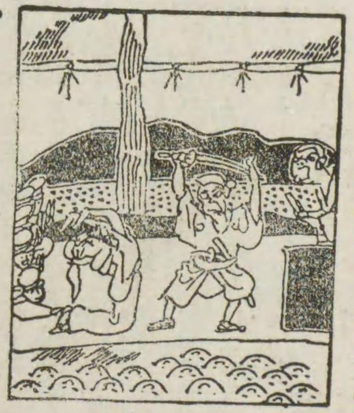
岸で巡査と人民とが流れの釣舟の竿を見て魚を釣つたかゴミを釣つたかと論じて居る。

(蔵)老尼の影法師と語る事

長柄の橋の人柱の話を聞きながらその長い橋を渡つて淀川堤にさしかゝる。大阪の子供等よ。君達は遊びにメリーゴーラウンドに行くに及ばぬ。この堤へ來て自動車に乘せて貰へ。丁度搖り動く木馬に乘つたと同じ面白さだ。それ程この堤は凸凹だ。乘客は毬のように跳ね上げられ、腹は急に減り帽子はまたゝく間につぶれる。夏にもなり市長が眞新らしい夏帽子を冠る頃を見はからひ、彼を自動車に乘せこの堤をはしらせ度い。その帽子のめちや〳〵になつた時の顏が見たいものである。淀川堤、一名腹減り堤、一名帽子地獄の堤。堤を左へ下り田圃に出る。この田圃がまた腹減りたんぼ、帽子地獄たんぼだ。歩いて江口の里を訪ねる日暮れ人家ない畦道へひよつこりショールをかけた女が現れる。S君『けつねやないか。お尼つねらにや』わが尻をぱた〳〵と叩く。漸く江口の君堂を尋ねあてる庫裡の障子に坊主頭と猫の耳の影法師がうつつてる。

S君『ちよと伺ひますがなァ――』それから江口の君の由緒を尋ねた。影法師の主は老尼らしい、障子越しにけんもほろゝの挨拶。『郡役所が來ても警部はんが來ても電氣がついたらもう戸はあけまへんのや。新聞社の人かて嘘やほんまや判らへん』といふ。二人强盜の嫌疑をかけたらしい。宥めあやまつて漸くきく。老尼江口の君は賣女にあらぬ事。重盛の娘なる事。むかしゑゝとこの娘はんは手持不沙汰に遊んで居やはつたから遊女と申す事、いんまのおやまはんと遊女は遊女でも遊女が違ふ事。江口の君は普賢菩薩の再來で舊三月十四日白象に上つて天に上らはつた事。確信をもつて語つた。江口の君と西行との歌問答の歌はすら〳〵と節をつけて誦し出した。その二人の記念塚は鐘樓の傍の木の茂みの前にある。われ等辭すると老尼急いで戸をがら〳〵と繰り閉した。



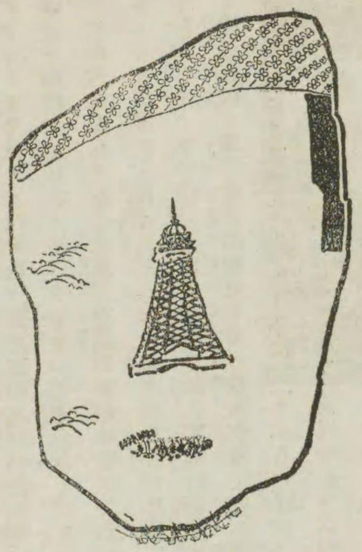


◉大阪市に村芝居がある事

歸り道の大道村の田圃の中に村芝居を見つけた。中村幸次郎一座といふ。女俠客の靈驗仇打をやつてる。舞臺の道具の瀧が愉快だ背景の遠山を見透して中天からよごれたふんどしのようなものが下つてる。之が瀧だ相な。チヨボは浪花節、節につれて役者はキクリシヤクリやる、舞臺にも見物の子供が並んで居て役者のよごれた踵をちよいちよい親しみを持つていたづらにひつぱる。滿場物賣りの野菜の油揚げの匂ひに充ちてる。さつきのショ！

ルの狐が見物して居る。――案ずるに大大阪の顏の揉上げに當るところに此村芝居があつた。故にこの節劇の太夫の揉上げを借りて大大阪君の顏の揉上げとする顏の右頰は海だから浪の皺。

大大阪君の似顏の圖〔五〕



エレヴエーターめうとの別れの事

S君の外にA君同行。A君を憐みてよめる歌。

妻の前へ見せられぬ繪に
ゑがかれるを

大大阪君の似顏圖〔五〕

知らでや君のついて來るらん

これは腹の中で詠んだ。口へ出して詠んだらA君歸つてしまふだらう。

休日とて新世界は一ぱいの人エッフエル塔へ登らんとてエレヴエーターの前で押し合ふ。それを二列に整理して端から順々にます目で量るやうにエレヴエーターへ收容する。手の甲に蛙となめくじと蛇との刺青がしなびて居るエレヴエーター番のおやぢは裁判官の冷靜と嚴格とをもちて人一人でも多くは入れない。夫婦連れで來て妻だけ收容され鎖戸をおろされた田舍出身の夫がある。あはて〳〵『めうとぢやく〳〵』と怒鳴つてる間に妻は天津乙女。やがてその身代りにペンキで紅白だんだらに染

めた昇降機のおもりがギーと降りて來た。頂上の一室は四方針金で籠のやうに張つてある。展望すると北は曇つて居てこれといふものは見えない。

東は綠の茶臼山、天王寺五重塔。南は眼の下に國技館より、區畫正しき住宅町、西は工場地帶の煙の薄れより大阪灣の水天はうふつ。以上の外之が若し晴れた日であつたならS君の大阪通の造詣を傾けられて筆者はノートに精力を消盡してしまうところを曇つてゐて幸ひだつた。S君筆者を欄干の側へ連れて行き首を思ひ切り伸ばさせ下の平地を見下させ油斷を見すまし筆者の膝のうしろ側を掌で上下に撫て「こそばゆいやらう〳〵』といつた。S君一體君の歳はいくつなのだ。

高い處より平地に歩いてゐる人間を平面圖に見下すと、げつちよりする（この大阪言葉も覺えてからこゝ等で早く使つてしまはぬと持ち腐れになる）土瓶の蓋のやうに見える胴體より前後へ短い手足を蟲の觸角のやうに伸縮させ動いて行く人間。中にも威張つてある

く紳士と氣取つて歩く女ほどおかしい。人間を笑ひ度くなつたらエッフェル塔に上るべし。

針金の網に船臺のやうなものをぶら下げ空中を往復させるケーブルカー。これには『壯快なる飛行船』と廣告してある。さつきの田舍夫婦これに乘らんとして今度は念の爲『一しよに乘れまつか』と係に聞合してゐる。

朝鮮人の一家族が遊覽に上つてゐる。夫は日本服、妻は朝鮮服、手をひいてる女の子は洋服、その服裝の如く三つの樣式の長所を彼等の素質にも着用し行かんの事を祈つてやまぬ。降りんとして前の如く肩を押し合つて並んだ群集達の中で日本服を着てるものも言葉を聽けば朝鮮人の同胞が多かつた。

（二）酒豪の墓が團子型の事

塔の前の角のカフェのゴミ箱をぼろの人が三人漁つて居る。その後を藝妓の披露の一隊が通る。男衆は一力の由良之助のやうな紋つきの着物を着て料理屋へ入つて行つて『何とか何とか』と、節をつけてい

ふが東京人には判らぬ。大方『こいつに客だまさせてたんと金絞んなはれや――』といつてるのだらう。男衆がさういふあとから當の藝妓も附添の女も一同に聲をそろへ『どうぞよろしうおたのみ申します』といつてる。これだけは判つた。

電車道を歩いて一心寺といふ寺の中へ入つた酒豪とされて居る後藤又兵衛の墓が今は禁酒の守神とされてる。その墓は團子型だ。納額堂に額が一ぱい重なつて掲げられてる。妻が夫の禁酒を祈つたのが多い。廿七歳の女よりとして『酒類一切但ビールもその内』と書いたのがある、ビールもその内が女らしい。正宗のびんの形に額を刻みそれに左の文句が書いてあるのがある。

大大阪君の似顔圖（六）

私は酒さいのまなかつたらきつと立身する自信があります。どうかお願です。キット酒をのみませんから。めつたにのみません、廿七歳K――八郎君、酒さいのまなかつたら大に自信があるね。なほこの寺には十萬以上の人間の齒骨で練り固めた佛像が三體ある。のぞくと鉛色の死の膚の佛體が生命を蘇す根本力の慈容威光を放つて居る。生を死に死を生に弘通圓融さす不思議のあるもの。彫刻にまれ何にまれこれを完全に象徴し得たら、藝術家の能事畢れり。その能事をはらぬ間は、ハテどうするね。大に大阪の似顔でも描いてるかね。

寺でしようを吹く音が聞える『寺でしようを吹くものだらうか』といふとA君『しよういふ事になつて居る』と小さい聲で洒落て洒落た後からカラ咳をしたり周圍を見廻したりするのはまだ洒落にづう〳〵しくならぬ證據。

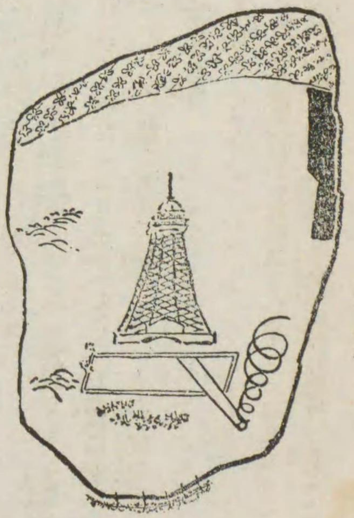
（三）古錢屋店ぐるみ價踏みの事

天王寺着、參詣道傍に小判大判に現價の札をはり古

錢屋が店を張つてる『ナンデモ、賣買シマス』と書いてあるから『この店ぐるみ全部いくらだ』と訊いて見る。古錢を磨いてゐたおやぢ驚かず『この箱の中とこの額の錢とをのけて三千八百圓なら賣りまつさあんた方一晩お遊びやつたらそれ位の金ぢき飛んでしまふわ』と相手によつては賣り兼ねまじき氣色なり。一言なし。五重の塔は晩で閉つて居た。かういふ時の始末は運命論者になるのが一番早い。五重の塔緣なしエッフェル塔緣ありとして大阪の鼻にはエッフェル塔を採る。

大大阪君の似顔の圖〔六〕

（は）　大阪の顔の口



大阪市の口といへば直に大阪灣の築港を思ひ當てる事、これは誰しも異論がないところだらう。折柄天氣もよし今日は港の春を見物しようか。

（一）乘客ボートの客引喧嘩せぬ事

大阪には珍らしい幅の廣い眞つ直ぐな道路が可成り長く續いて居る。築港の大通りだ相な。大阪の道筋としいへば兩側の軒の庇がくつゝいて居て太陽の光線はノミでこぢあけてやつとお通りなさる。東家の男猫が西家の女猫へ通ふにも道筋は戀の關所にはならぬ。少し後足へ力を入れてびこんと跳ねればナポレオンがアルプスを越へるより容易だ。一つ便利な事がある。通行人が若し物が買ひ度ければ店へ入るに及ばぬ。道の中央に立ちはだかりむづと兩手を左右に延べれば兩側の店の品物が一度に買へる。

まさかこれ程でもないが、まあま、話せばざつとこういふ鹽梅。ところでこの大道路は全く趣が違ふ大阪離れがして居る。S君『ではこの道は何處の感じや』と訊くから『さうさ後藤新平さんがそろばん考へず引つぱつた殖民地の道路の感じだ』『褒めとるのかくさしとるのかい』『兎に角道路だけは誇大妄想狂的にひつぱつたのがよい』

自動車を下りると見晴らす春の海。棧橋の入口の左右に長閑さを破つてガア〳〵怒喝つてる男がある。『最新式モーターボート、いよいよ乘り込んで外國船、軍艦の見物、すつかり見せますぜ。さあ一人前二十錢ぢや』どんな最新式かと岸の下を見ると和船に發動機を据ゑつけたもの。この左右の客引きは違つた船の客引達にて雙方『早いのはこちら安全なのはこちら』と怒鳴り爭ひ一人の客が通つても左右から袖を摑む程に白兵戰をやつてるから今に喧嘩するだらうと見て居た。どうしても喧嘩しない。流石は商業市の船頭だ。

（二）情死ものちよい〳〵來る事

附　大大阪に籠がある事

棧橋に繫船が案外少い。三つしか居ない。大阪君港では神戸に讓つて居るのか。歩いて棧橋の突端へ出る港務所の監視所がある。中へ入る。青年の所員が職務上の本を開いて居る。彼の話『はあ、情死ものですか、ちよい〳〵來ますよ。こゝへ來るのは夏が多う厶いますね』どうせ死ぬのだから冷くてもよささうなものだが多はあんまり來ないとは人間は死ぬ際まで好みといふ

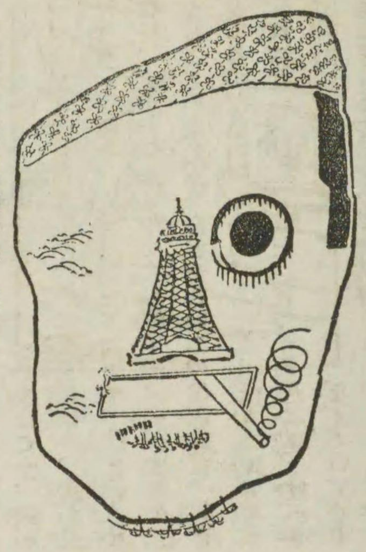
事に支配される證據だ。『救けて呉れ、といふ信號はどういふのですか』訊くと青年は一册の本を持出して來て『これにすつかり出てます。Cといふ旗とNといふ旗をあげるのです』それからその信號の本を借りて繰つてみる。いろいろのがある。『チョコレート』が『IPN』で『息子』が『WJV』切つめた必要だけしか相圖せまいと思はるゝ信號約束に開文字の『歌』といふ字までである。それは『WJX』だ。海の言葉も思ひの外餘裕がある。窓にカーテン代りに垂らしてある旗をこの字引で繰つて見るとそれはRの旗であつた『夏は蚊が來なくていゝです

ね』『ふだんは來ませんが青島肉がつくとやつて來ます』港は今や落日の光景。築港突堤の嘴と嘴の間に落ちてまぶしい。それを強ひて我慢して眺めて居ると寫眞の乾板色の沖に淡路島影が認められて來る、港はなぎ。水賣船の船頭は後甲板に風呂を立てて入つてる。

歸りに廻り廻つて御靈さん參拜。御靈さんの神主さん當分酒屋に用は無い。何故なれば四斗樽の菰冠りが十も奉納されて居るから。社殿の下に小さな昔の籠が置いてある。『大大阪に今でもこんな籠へ乘る人があるのか』S君考へて居たが『なんぢやい。これは人形芝居の籠が邪魔やからこゝへ出しとるのや。すぐそこが文樂や』

S君淀屋橋といふ處で別れるといふ。予はあはてゝ手帖の紙を裂き『NR』と書き高く揭げた。S君『あほらしい。そらなんぢやい。』予『我ハ助ケヲ要ス我ガ傍ニ止マラレタシの信號だ。』S君『また宿へ歸る電車判らんのか、しようもない男や。ほたらもちつと居てあぎよ。』

大大阪君の似顔の圖〔七〕



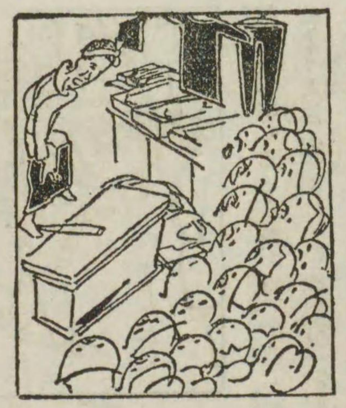
（に）　大阪の顔の眼（上）

前日の圖よりして大大阪君の似顔は口に卷煙草をくわへて居るであらう。それは何か？　市の發電所の大煙突！　二本ある。もし細卷の卷煙草にしたくば工場地帶に行き給へ何百本もある。

（一）　なしくずしに園遊模擬店の事

今日は進んで大阪君の片眼を入れる日だ。『S君今日は民衆デーとして道頓堀へ行き、われ等の眼にも保養をさしてやらう』S君『おい〳〵、君、先きへいて、乘る電車判るか』『判るよ。道頓堀へなら一人でも行けるよ』『田舍ものやなあ』

『今日は民衆デーだから、一般の市民通りごく康く遊べる標準に從ひ度い。だから食べるものも高いものは食べない、その積りで案内して呉れ』『ほたらこゝや、こゝがたこ安といふ店や』『早いなア。もう入るのか。おでんやだね』



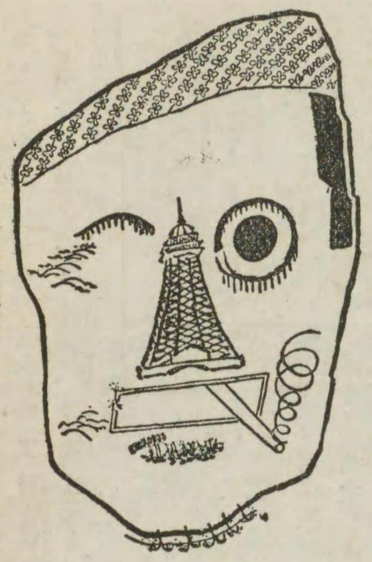
『こつちやでは關東だきといふのんや。なに喰ふ』『なに喰つていゝか判らない』『ほたら、これくてみい。うまいやらう』『むにやゝゝゝゝ、何かの脂肪だね』『鯨のあぶらや。ころといふのんや。章魚喰て見い。こゝの名物や』『むにやゝゝゝ女が入つて平氣で喰べ

てるね』『大阪は女が喰物屋へ入るのは平氣や』『もう判つた、出よう。今氣がついたのだが、この道頓堀を曲つた角から一町内の店並、食物屋と裝身用品店許りのようだぜ、君端からさういつて呉れ僕書きとめるから』

『よしや。ゑゑか、角が菓子屋だぜ、次が關東だき屋次がかまぼこ屋、次が饅頭屋、次が半襟屋、次が眼鏡屋、次が鮨屋、次が辨天座芝居や、次がネルや、次が洋傘肩掛や、次が袋物や、次が半襟や、次がしるこや次が洋傘肩掛や、次が袋物や、次がかまぼこや、次が帶や、次がもすりん友染や、次が東京袋物や、次が呉服や、次が半襟や。次が毛布メリヤスや、次が婦人小間物や、次が和洋雜貨や、次が帽子や、次がすしや、あゝしんどい』『あゝしんどやといふのは何處だ、何を賣ってるのだい』『阿呆かい。あゝしんどいといふのは疲勞れたといふ大阪言葉だ。店ぢやあらへん。わての事や』『わての事か。は、は、は、は、は。處でこう書き止めてみると、やつぱり食物やと裝身用品店許りだ芝居が一つと眼鏡やだけ挾まつてるのが、さうでない許りだ』『惜しいなア、一寸のとこやがなア、芝居との眼鏡屋除けたいなア』『大きな聲をするなよ聞えたら向ふで怒るぞ。こつちの統計を揃へる爲めに、商賣を片付けられてたまるか』『そりやそや、ほしたら芝居やはんも眼鏡やはんも愈〻盛大にやんなはれ』『道頓堀のこの軒並の現はす傾向から考へると人間が最卒直に最普通に充たさせようと思ふ欲望は喰ひ度い着たいの二つだね。それでお芝居と眼鏡やさんがあるから、その次ぎが見度い慾望と、かういふ事になる。これ道頓堀の人生哲學だ。おや、S君どこかへ行つてしまつた。やあ、君、どこへ行つてたのだ。そしてその手に持つてるのは團子ぢやないか』『これやろ、買うて來た』『變だね。どういふ譯だ』『いや、今日はなア、廉いもの許り喰ふといへば、先づ關東だき、これはさき喰た。またこれから先きもすし、しるこ、うどん、まるで園遊會の模擬店の出來損ねや。模擬店早うしまはにや、うまいもの喰へへんそやよつて早う喰はしてしまうのや。團子の試食は一本だけにせえ』『ぢやまあ喰はう。むにや〳〵〳〵〳〵』

（繪二の説明次回）

大大阪君の似顔の圖〔八〕



（に）大阪の顔の目（下）

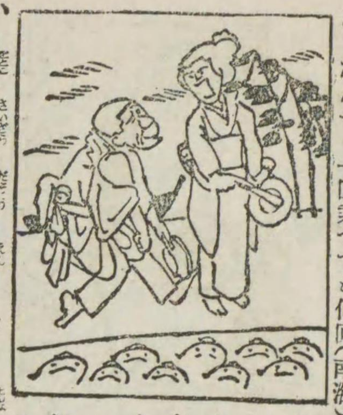
大大阪君の似顔圖〔八〕

大阪の目は一つは商業に夢中になつてる市民のはたし目。一つは遊樂地で遊んでゐるうれしさうな市民の目。

（三）仁輪賀に萬歳代る事

『この横町が千日前筋や』『賑かだね』『これが樂天地だ』『入らう』『よつしや』『アッ氣味惡い。燈籠から凄い女が首を出してる』『これは今こゝでやつてる芝居の客呼びや』『造花の櫻が滿開だ。その下に圓い大きな板がぐる〳〵廻つてる上へ、子供も大人も一ぱいぢやないか』『廻つとる板から外へ轉がり下りては子供が遊んどる』『大供が坐てゐる子供の頭を跨いで鬼事をしてる。今に蹴つまづくぞ』『そりや蹴つまづいた』『安來節、活動、芝居、何んでもあるね。さア出よう』『よつしや』『前には大阪仁輪賀が有名だつたが、今見るとなささうだね。萬歳といふ看板が澤山見えるぢやないか。こゝには高級萬歳競演會と書いてある。入らう』『よつしや』『男と女の掛け合ひだね。まゝあゝざゝあいらうあくうにええて何とか〳〵と唄ひ出したがべらぼうに訛

つて、節が尻上りでよく判らない』『客に洒落で問答せいといつとるぜ、一つやつたろ、全身乘るのに半身(阪神)電車とはこれ如何に！太夫考へとるぜ、返事しよる。なんや、一回乘つても何回(南海)電車といふが如し。こりやうまい』『熟海の海岸お宮、貫一の別れの茶番を始めた。あはゝあはゝ』『貫一が中風になりよつた。



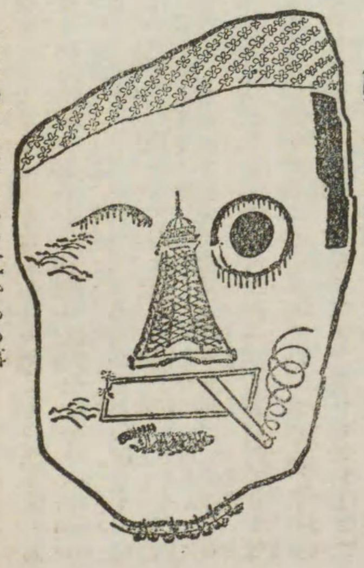
これはえげつない』『男の才藏が道化を演ずる度びに女の太夫にピシヤリ〳〵頭を叩かれるのは見物に變態性慾的の痛快があるのだらう』『出ようや』『今度はこつちがよつしやといふ番だね』『ぎやうさん店に人が立つとる。せり賣や』『店の名は何だ、まけんやか、こいつだ、こいつがせり賣の天才なのさ。僕は二三年前に來て感心して見たのだが子僧めまだやつてる。板を叩いて喋つてるぜ、何だ、これは股引の兄貴でばつちの弟、猿股一名ゐて股です、といつてるぜ、田舍もンはこないにはくがといつて逆に穿いて人を笑はせて置いてそれから、何だ、インターナショナルオリンピックにテニスのチヤンピヨン熊谷はん、清水はんが試合に穿いて出た、記念のゐて股といつてるぜ。こいつはこの口上をいふ爲めに可成り氣をつけて雜識を貯へてなければこんなにいへない。それに一生懸命恥も外聞もなくせり賣に身を賭けてるところが感動させる。立派な藝術家だ。』君は何んでも藝術家にしたがる癖があるぜ、小僧め、わいせつな事をいつて客を釣るのはひけふや』『そうだな』『いのう〳〵、やあ子僧めビツクリしていんではあかん、買ふとけやと伸びて見とる』『逃げやう〳〵』『こゝへ入らう。これ喰つて見い』『むしや〳〵〳〵。こりや何だ』『おこうこの海苔巻や。模擬店の續きや』『これは珍らしい東京に無い。東京でまぐろの海苔巻をてつか巻といふがこれは新澤庵のてつか巻だね』

(四)銀行が踊りの待合室の事

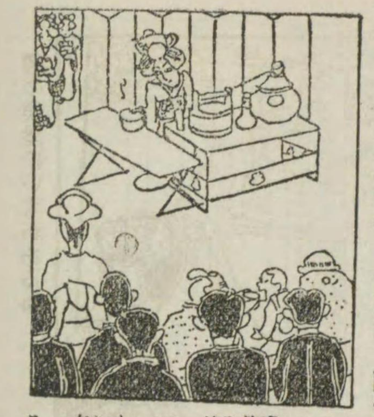
『この筋がえべす(戎)橋の筋や、やつぱり賑かい』『いろ〳〵のものを賣つてるね。昆布をこんなにいろいろの料理品にして賣つてる專門店のあるのは大阪だけだ』『食料品やにぎやうさん干ものの類を賣つとるやろ。これは近頃の傾向や、郊外住宅が增へて家に貯へといて喰ふ食ものゝ入用が多うなつたんやそれでこない干もの類の需要が多うなつたんや。干もの類というたとて味醂でつけたりケシをふつたり贅澤な干ものや』『明觀察だ』『ちよとこゝの窓見い。便所の紙入れ作つて賣つとる』『便所の紙入れ臺は謠ひの臺と似てるね』『どつちも前に置いていぎむものやから形も似とる』『きたないね』『こゝが蘆邊踊の演舞場や』『成程、大阪市民は經濟觀念が發達してる』『何を見て感心しとるのやい』『いやね。この演舞場へ踊りを見に來て入らうとする人の中で其三分の一はね、入口で思ひ返し入場料を向ふの鴻池銀行へ預けに入つて行くぢやないか、だからさ』『そりやちがふ。あの銀行は踊りのうちだけ、特等客の待合に貸しとるのゝや』『金利のおどるのを嫌ふ銀行がをどりに貸すとはこれ如何に』『すかたらいはんとおけ』『腹が減つた』『民衆デーだから、飯は出雲やのまむし丼や』『この鉢のものは何だ』『う卷や、玉子燒の中に鰻が入つとる』『隣の客もこれをとつてるね。そして中の鰻でおやぢが酒をのんで、外側の玉子で子供に飯食はしてる。民衆はいじらしいね』『あれ見るとこつちやもあんまり贅澤は出來んなア』

大大阪君の似顔の圖〔九〕

(ほ) 大阪の顔の眉(上)



『華やかだね。ずつと提燈がついてる』S君『こゝ踊や』『あしべ踊か』『こいつは阿はうやな。あしべ踊の提燈見せといたら、みな踊はあしべ踊やと思うてくさるこゝは新地の浪花踊やがな。提燈にへうたんがついとるやらう、新地一名へうたん街や。まだこの外に大阪に踊はぎやうさんある。そないな事いふと人に笑はれまつせ』『こういふ事は笑はれる方を希望する』『まあ、入つて見い。參考や』入る。茶席に芝居に出るやうな女が腰かけて茶を立てゝ居る。セヽション式に肩ひぢ張つて茶道具を取扱ひ見て居ても面倒臭い。これが茶の湯の何流とかいふ式ださうな漸く茶が立つと其茶わんをもつて、身體の向きを變へ傍の横卓の上に置く。その時今まで人

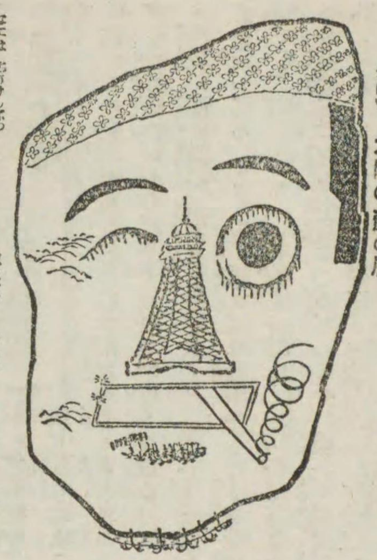


形のやうにすまして居た顏にこびを作りぢろりと客をながし目で見る。『男をながし目で見る茶の湯の式があるのかね』『藝子庵手くだ宗匠の新式やらう』その女の立てた茶わんを皆に持つて來るのかと思へばさうではない。屏風の裏からどんな婆あが搔き廻したとも判らぬ茶を澤山少女が運んで來る『羊茶を揭げて狗茶を賣るとはどうだ』『そらなんやい』『羊頭を揭げて狗肉を賣るをもぢつたのだ』『ちつともぢれてえへん』客も腰かけて二列三列に列んで待つてる。藝子はんの立てた茶を貰はうと思つて家樂をなげ捨てて並んでると思へば淺間しい。客の中に婆さんが混つて茶を孫に分けて飲ませてるこれぢや藝子宗匠の方でも不本意だらう。茶を飲み乍ら茶やのおかみにつかまつてくど〳〵勸定の催促をされてる客がある。

茶を運ぶ女が美しく化粧して居る。たゞ首筋に三本、耳の前に一本、細長い三角の形にお白粉をぬり殘して居る。其地はだの色が赤黑く見える『藝子いふものは案外正直なものだね』『何故や』『だつて自分を賣も

のだと思へばこそ化粧したところと正味のきぢとを兩方見せ掛けねのないところを買つて貰はうとする鎗形に塗り殘したところはきぢの見本だらう』『あれは頸足を長く見せやうとする化粧法や』『やつぱり手くだか』廊下を通る。こゝは造花の櫻の滿開、田舍茶屋がしつらへあり、桑津だんごを賣つてる。こゝの茶汲女には豆のやうな少女を使つてる。藝子にもし幼年學校があればこれ等はみなそこの生徒だ。女の小粒はこのだん子やに使ひ中粒は茶室の茶運びに使ひ手足の關節の自由なものは舞臺上に咽喉に空氣の通りよいものは歌ひ手にとても外形では賣り切れぬ藝子の樞密顧問官には三本の絲をひつぱつたさをを搖がせて彈かせる女に廢りのないといふ諺はまことなるかな。其廢りのないやう巧に採配を振るこの社會の大統領みたやうなおやぢに紹介された。紋附に袴をはいてる。案内して樂屋を見せて呉れるさうな眞面目顏になつて男が錢勘定してる帳場の火鉢に孔雀の羽根を半分背負つた踊り女が蓮葉に卷煙草を吸つて何かからかつてゐる。そのこつちでは大入袋に小錢を入れてる。化粧室の大廣間には一側に横長い鏡が並び一同に女が化粧してる。女が扨見る人が居ないと安心して化け始めようとする時の露骨さを見よその次の部屋の仕上つた女が休息する部屋のテーブルに『さつまいも』が載つてる。ゆげが立つてる。『ふむ、踊り子がいもを食うわい』『こりや、おしろいの鉛毒にかゝらぬ食物やさうな』『惡かつた、ぢやいひ直さう、踊り子は鉛毒にかゝらぬといふ理由の下にいもを食ふわい』化粧中の女には若いものもあるが三十以上のも澤山ある。それをよく見覺えて置いてさて、舞臺へはどんなに化けて出るか。その結果を見に客席へつく。

大大阪君の似顔の圖〔十〕



（ほ）大阪の顔の眉

（浪花踊見物のつゞき）場内を見渡すと西洋建築に程よく日本式の造作をあしらひ賑さも丁度よし、演舞場として成功してる。踊は今『大大阪』八段返し名所づくしの第二段まで進んでる。舞臺一面桑津櫓堤の景、上手棧敷側にしつらへある、三味と唄ひ手の老妓、下手側の笛太鼓、鉦の雛妓の長唄の合奏につれ、その左右から踊りの隊が出て來た。みんな白足袋のはだしだ。

舞臺程よきところへ出て持出た紺のちりめんの手拭を一人乃至二人三人で綾に弄び乍ら踊つて入る。一體踊りといふものに出て來る踊り手の意味や性格が少しもわれ等書生には判らぬ。桑津の土手にこんな立派なお姫様が揃つてかけ落でもするやうな足袋はだしで出て來る事があるかしらん。地震の逃げ出しかと思へば呑氣に踊つて居る。判らぬ〳〵といふを聞いて居たS君。『踊は象徴やぜ。寫實に見てはあかん』『だつて背景は十分寫實だぜ、本ものに見せやうとして出來てるぜ、それで居て踊り手だけを詩に見ろといふのは右の眼と左の眼を一！』うるさいなあ、それ幕が變りかけてるやないか』ヤア、桑津の土手がきれぎれに分列式をやつて引つ込んで行くあとから、あゝら不思議や、國つ神、八百よろづ

の神と力を合せ國引きし給ふか、いつの間にか木津川の千本松の景に變つた。日本の地變といへば天地開びやくの大業は申すもかしこし、次が瀬戸内海の陥没、次が琵琶湖が出來て富士が噴き出した。次が寶永山の噴火、次がこの間の關東の震災、次がこの演舞場の桑津土手退却、木津川千本松出現だらう。成程しんとして音するものは長唄の冴えのみだ。この場面では踊り子が出ないね。ややや、その代り月が雲間を破つて出て來た。そうらみんな手を拍いたぞ。この月の出の喝采が今までより一番盛んだ、してみるとこの月が新町一番の名踊り子と見える。この踊り子なら僕は馴染をつけたいから君一つ世話をして呉れ『少々遣ひものが要る』何だ『すゝきの穂と餅を十五錢三寶さんへ載せて行くのや』いとやすい事。して〳〵、君さまとの逢瀬は幾夜』曇つた夜は逢へんぜ、その上舊のみそかは休業や。てんごういうとるうち、それ月が水にうつつてきれいや』見物が又喝采だ、だがよく見て見給へこの月と水にうつる月影と筋がちがつてる。月は勝手に照し、水は勝手に方角の違つた方で働いてる。月と水は昨夜夫婦喧嘩したか』狸の月か、やぶ脱みの月や』

（四）鈴蟲振り廻される事

第四段住吉の景に美しい田植女の踊、この女達の一皮脱いだ職分からいへば彼女等は田植女でなうて田賣らせ女といふ方がいゝ。第五段帝塚山の秋、美女の一隊手に手に鈴蟲の籠を大事に持つて山を下つて來る。始めは大事に持つて居たものが踊りに夢中になると鈴蟲の籠を上下左右逆さ大文字に振り廻す。幕切れの頃には籠の中で鈴蟲が眼を廻して屏死してるだらう。だから傍に用意の鈴蟲塚といふのが建つてる。第六深江の里がすみ第七呼ものゝ太郎冠者作鏡の舞だ。舞臺正面大きな古鏡の形が切り抜けて居る、それを貫いて見物席がうしろの背景に描いてあるので本當の鏡にこちらがうつれるや

うに見ゆる。

その上鏡形の前に一人の仕人が舞ふと鏡形の向ふで同じ姿の仕人がうしろ向きに舞ふ。手振り足振り揃ふた時は眞に鏡にうつれる如く見ゆ。亞米利加のボードビル式のトリックに二十五座の二つ面より胚胎したらしい、ちと小手先の興味、太郎冠者式の臭味はあれど單に興味を主眼とすれば策は當つて居る。第八櫻の宮の場で暖かに打出し。S君『どうや、さつき樂屋で見た年寄りの女の化けたのを舞臺で見付けたかいな』判らない。みんな十五六に見える。うまく化けたね。けれども樂屋で彼等がいもを喰つたり、腰卷を散らかしたりしてるのを見て置くと化かされ方が大分調節される藝子にもろい見物には先づ樂屋を見て置くのをおすゝめする。すつぽん料理は樂屋覗くべからず浪花踊は樂屋見るべし』『そら何の事や』『いや、この間京都の大一のね、すつぽん料理をね喰ひに行つたのさ。處が料理場ですつぽんが甲羅を剝がされる修羅場を見て來たら後で座敷へ行つても喰へなかつたよ』

以上見分し終り大阪君に約束通り踊りの舞妓の眉を眉として描いて進ぜる。

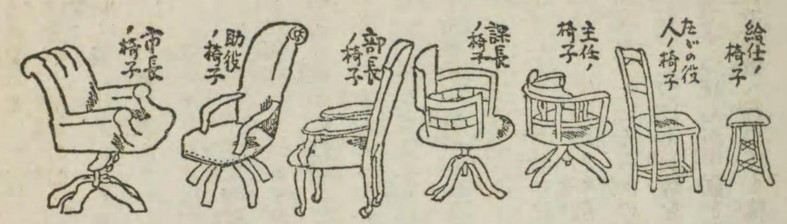
二〇〇

大大阪君の似顔の圖〔十一〕

（へ）大阪の顔の齒

『S君、いろ〳〵お世話になつた、僕はそつと大阪を逃げ出すからあとはよろしく賴む』『待て〳〵、藪から棒にどないしたンや。誰ぞと喧嘩でもしたのンか』『さうぢやないよ。顔の道具の次ぎの思ひ付きが浮ばなくなつたのだ。で失敬する』『あかんぞ〳〵。顔を描き上げんうち失敬しては君の責任をどないするのや』『さうかなあ』『さなかうアて、三つ子みたいな物言ひをするやつちや。君を逃がしてはわてかて責任がある逃がす事ならん』こゝに居たて大阪の顔の髭だの齒だのゝ思ひつきが出來なけりや、徒に煩悶して暮す許りれ』『煩悶した儘で、ちよつと歩いて見い。また何かと拾ひものがあるやろ。人の一生は思ひつきが無くて大阪の顔を描くが如しと、三百年前家康さんが君の爲めに遺訓さへしてある』『さうか。服膺すべき言だ。ぢや煩悶しながらぶらぶらまた出かけやう』

（一）市廳の椅子拜謁の事



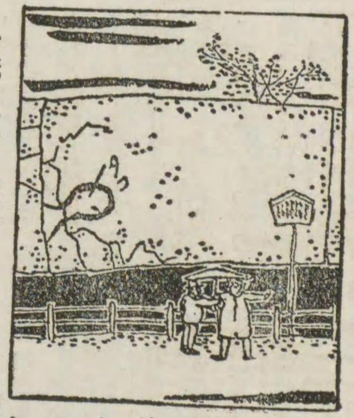
『こゝが市廳や』『立派だね。市廳は墨入りの大理石の腰卷をしてるね流石腰卷好きの大阪人の市廳だ』『市廳で誰に逢ひたい』『僕は市廳の椅子に拜謁したい』『どういふ譯や』『役所の人間は永くて三十年、短くて二三年どし〳〵變るが、椅子だけは變らない。その位置の椅子といふものは永世不窮だ。だから人はいふだらう。誰々さんは何の椅子についた、名譽の事だと。何々の椅子は誰々さんによつてつかはれた名譽の事だといはない。高橋の達磨が農相の椅子について農相の椅子がやゝ重きをなしたのが近頃の除外例なくらゐのものだ大阪市廳に來て、大阪の機鑵の代表すべきものに敬意を表さうと思つたら役人さんより椅子の方がその目的に適つてる』『へんくつもんやな。どないなとせえ。ほたら、これが市長の椅子や』『高等理髮店の椅子のやうに立派だね。高等理髮店へ行つて頭を刈る時間だけ、われ〳〵も市長の椅子の坐り心持を味へるわけだ』『助役室に有田高級助役さんが居られる。どないする、助役さんと話してみるか。椅子にしてうか』『御面倒でも

ちよつとどいて貰つて椅子だけみせて貰はうこの人が榮轉でもして、二十四時以内に高級助役で無くならぬとも限らぬから。S君この在田といふ紳士はしつかりして手腕があつてそして、磊落なところもあるだらう』

『さうや。どないして判る』『永年似顔を描きつけて居ると、隱し文字で顔に書いてあるのが讀める』『さよか』

『それから、この紳士は無邪氣に酒に醉つて來ると、誰人と嫌はず傍の人の膝を枕にして寢てしまふ癖があるだらう』『ほんまにさうや。どないしてわかる』『永年似顔を描いてると、頭の形で判る』『おとろしいもんや市會議長の泉さんが入つて來た。この人はどうや』『この人は手腕の人よりも人物が圓滑で、擔ぎ上げられるといふ側の人らしい』『さうや』『それから、この紳士は干物問屋が本業だらう』『おとろしいもんや、矢つ張り顔で判るか』『判る。それからこの紳士は平民的で煙草はエアーシップを吸ふだらう』『おとろしいもんや。矢つ張り顔で判るか』『いゝえ匂ひで判る』『なんぢやい君は畫描きの癖に鼻も使ふのか』『あ、は、は、は、は、

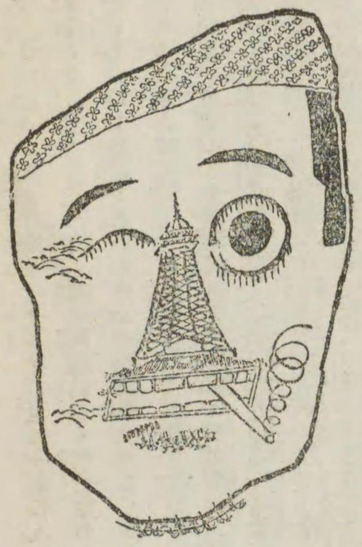
實は僕は手早く見てしまつたんだ。さあ次の椅子に拜謁しよう』『これが部長級の椅子』『成程少し格が落ちるね』『これが課長級の椅子』『これが主任級の椅子』『課長と主任との階級の差別をつけるのに用度係りは大部考へたね。椅子の脊中のもたれる板で僅か許り加減したね』『これがたゞの役人の椅子』『成程これはわれ等お馴染の椅子だ。なつかしや。オーマイ、フエーロウ。ハウ、ドウ、ユードウ！』『これが給仕の椅子』『へー以上拜謁し終つて比べて見ると、市長になる人は尻が大きな人で、給仕になる人は尻の無い人間と見える』



（二）春の雨に名石潤ふ事

『市長だけには逢つて見い、自宅へ行かう』『よからう』『道の序だから大阪城も見て見い』『よからう』『これが名代の振袖石、高サ四メートル半、横十三メートル半』『成程大きな振袖の形だ』『これが、蛸石、高サ八メール餘、横十一メートル、石の端に蛸の頭の石のしみが出とるやろ』『サア、思ひついた。この大阪城の名石が大阪の顔の齒だ』『それでわてもやうやく安心。

大大阪君の似顔の圖〔十二〕



大大阪君の似顔圖〔十二〕

（と）大阪君の顔の髭

筆者とS君とは市長宅を訪問の道すがら春雨を傘に凌ぎつゝなほも大阪城内の見物を續ける。大阪君の顔の髭を何にしたらいゝのか屈託を互に心に抱きつゝ。

（一）兵隊さん律義な事

大阪城即興

蛸石が振袖石の袖ひいて
共に濡れよぞお城の雨に

『さゝの無駄はこの位にして少し見物に精出さう』『こゝが千疊敷、むかし秀吉の本陣を構へたところ今は師團司令部になつと

る』『日本建築の師團司令部も奥床しいものだね』『これが黄金井、深さ三十三米、水の腐らぬやう秀吉が黄金を沈めたので黄金井といふのンや』『黄金は今でもあるだらうか』『わてが知つとる位ならわてが取り出してしまひまつさ』『こりや理窟だおや、お城の彼岸櫻がもう咲いてる』『この上が天守閣。こつちやが大阪の水道の水を汲み上げて貯水池につかつたところや。もう歸らう』『兵隊炭取りを提げて列を作つて來る。士官が來たら炭取りを提げたまま、歩調を取つてかしら右をした律義なものだね』『兵隊は律義な程見よいな』

(二)關市長メンタルテストの事

『こゝが市長の家や』『導かれて木石豐な廣い庭に面する應接間へ通る。日本間に椅子テーブル、床に宗演和尚賛畫の大達磨）挨拶ありて後筆者『今度大大阪になりましたが、あれをどういふ風に充實させて行くお積りですか、若し市の中樞機關から積極的に彼等に向つて設備を敷行つて行かうとしたらかなり金がかゝりませう。其金の負擔が舊市區の住民に重く新市區の住民に薄いといふ事になりはしませんか』『それはですね。だから成るべく新市區の地主達の自主的の發達改善を歡迎したいのです。つまり地主達が組合でも作つて耕地整理と同じやうな區劃整理を行へば始めは一度に金はかゝるものゝ交通は良くなり土地も便利になり從つて地價が昂つて來る。かけた金は頓てぢき取戻せるといふものです。さうなつた處へ市では水道電氣等を送り發達を補助して行かうといふ先づ方針です』『都市の膨脹はどういふ風に行はれるものですか』『今迄は平押しに餅のふくれるやうにふくれる事になつて居ましたが近頃西洋の學説ではそれはいけない。處々にかたまつて繁榮した町を作り町と町との間には矢張り空地を置く方がよいとなつて來ました。專門的の言葉で之を衛星都市といふんですがね』『大大阪市民に告ぐ、諸君の都市は將來鹿の子まだらに發達さるべきものと知られよ』『僕は新大阪區を少し歩いて見ましたがあなたのあれに對する御所感はいかがです』『あ、は、は、は、內務省の局長が來て一望千里といつたがまだ全くさうですよ』『お目にかゝつて感じたのはあなたがイエス、ノーを割合にはつきりいはれるつまり學者肌の拔けぬ性格の方らしい事ですが、其性格で市政を執られる結果はどうです』『持前でしてね、損のところもあるやうです。前の市長の圓滑を學び度いと思つてはゐるんですが。然し一體大阪人といふものは話がきまるまでは中々紆餘曲折するがもう是よりいかんといふ事になると根が打算に明かな素質ですから案外その方面よりすれば話は早く纏るやうです』『あなたの市民に對する氣受けはどうです』『まあ、出した豫算も大概受けてくれるし別に悪いとも思ひません』『あなたの一番愉快な事、一番嫌な事は』『暇の無い事が一番困るんです。どうも愉快といふ方はまあ無いね』『府知事と市會とどつちが怖いんです。府知事の監督は形式的なものぢやないですか』『そんな事はありません。何の事務でも內務省へは知事を通つて行きますから、これで知事には中々頭を下げてゐるつもりです。知事君は何と思つてるか知らんがあは、は、はは』『市會は？』『市長は市會が選擧するものですから……』『市長の年俸二萬圓に交際費五千圓であなたのお家の經濟はつきますか』『どうにかなつて行くんでせうあまりこまかい勘定もしてみんが』『一週に宴會の度數はどの位です』『宴會には向かん人間だから成るべく避けてゐます』『夫でも一週に三晩ぐらゐありますか』『まあそんな處でせう』『あなたの道樂は』『道樂のない男でしてね』『酒はお好ださうですね』『たゞ飲みたいだけで

す。遊びの酒といふ方ではありません』辭す。關氏玄關まで送つて來て座にこゞみ客に手をつかへ別辭を述ぶ。心がけ感に堪へたり。自動車に乘つてからS君『關市長の感じはどうや』『僕はあの顏から推斷したのだが大大阪は將來北東部の方と南方住吉區の方へ發展するね』『ナゼや』『だつて市長の顏は頭の左上部が特別に張つてゐる、それから顎が長いから。オット髭だ。あの市長の髭の傾向を大阪君の顏に移殖しようではないか』『そらでけた』

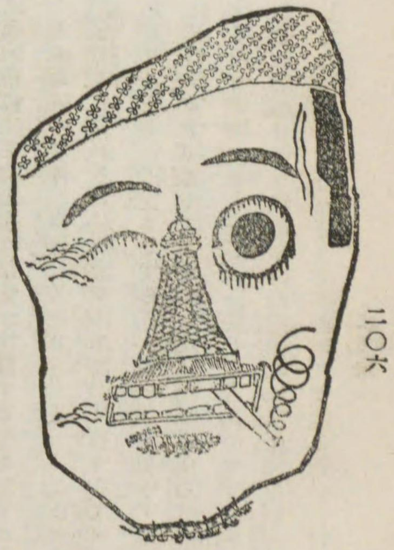
大大阪君の似顏の圖〔十三〕

(ち) 大阪の顏の脈管

大大阪の脈管、川！ 大江橋たもとよりモーター・ボートに乘る。そして過ぐる橋の名前だけ並べても大阪の詩になるであらう。試にやつて見る。

川と橋の詩

大江橋のたもとより船出、



欄干に人が大勢立つて見る。

中の一人『阿呆ヨ、船賃拂へ！』『御に好意を謝す』

右側、中の島運動場、男の子、女の子、小さい女の子、

中の島終り、櫻少し咲いてる。

八軒や。踏みつぶしたやうな川蒸汽、

左、てんまの青物市場、

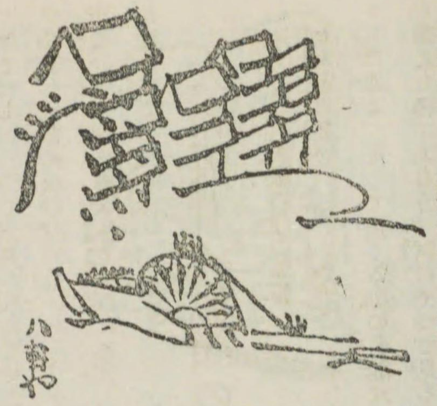
天滿橋浩幣局、通りぬけの櫻、

右、坊さん錢もろて紙屋治兵衞の墓をもつてのいた

あとに出來た藤川邸。

淀川橋、潜ると左右工場地帶、

コンクリートの河岸の上に調革のまんぢうが並んでる。



都島ばしの下に、乞食さんのバラックが澤山ある。仇討ち許り住んでさうなバラック。

毛馬橋、わが船よ廻れ右前へ！。

再び河岸のトロッコ、起重機、

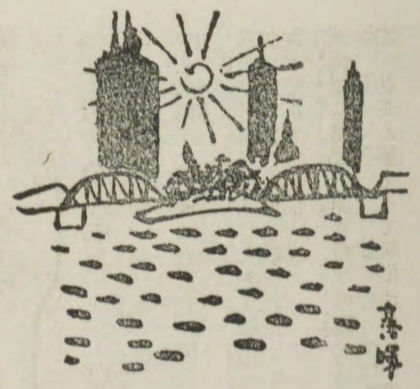
中の島に左右よりかけ渡したる鐵橋。落暉。

難波橋ビルデング、野村ビルデングが古塔のやう。

晩鐘がきゝ度い。細川へ入る。

よしやばしと今ばしとは夫婦か、

大大阪君の似顏圖〔十三〕



並んでる。

高麗ばし。

平野ばし。

大手ばし、みな兄弟か親類。

線が近しい。

元町奉行跡の商品陳列所。

本町橋。

農人橋邊でさらした手拭を干す高い干物臺。

墨の家に柳、柳

藍の水に手拭をさらす船の男の竿、先に布は環のやうに廻る。

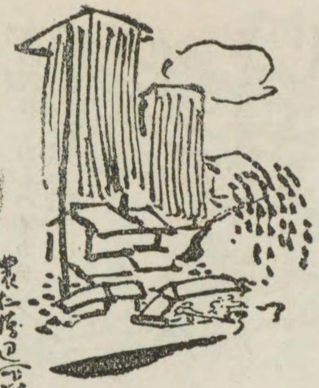
砥石やの家の窓より子供豆柿のような顏を出して

『バンザイ』

こつちも

『バンザイ』

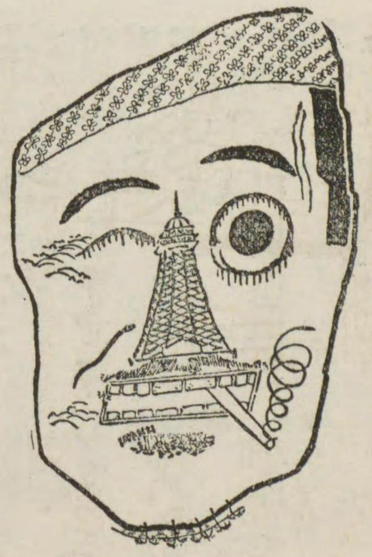
木を挽く機械の音『ヒュ〳〵ーン』
水に浸つた材木が多い。
あんどう寺ばし
折しも引潮、かき船あらはれた河底の上においどまで出して坐つてる。
末吉ばし
鍍金、硫酸の臭ひ。



くのすげばし
炭屋が多い。
瓦屋が多いと思つたら、瓦や橋といふのがある。
上大和橋より西へ曲る。

空罎を積んだ船。
（で兎も角も淀川を顔の脈管として大阪君の左の額に入れる）

大大阪君の似顔の圖〔十四〕

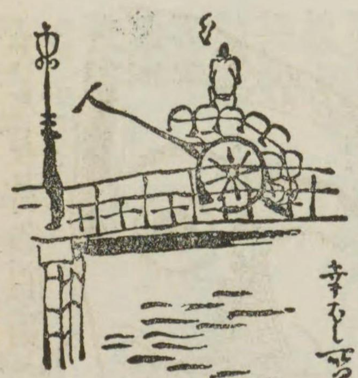


川と橋の詩（つゞき）
下大和橋を過ぎて、道頓堀の泥川、宿やの裏の二階から長松の育つたやうな田舎の團體中の子供が見下ろしてる。
こつちで萬歳しても都慣れないか、萬歳しない。
日本橋
相生橋、右宗右衛門町、左道頓堀、
食物のにほひ、

太左衛門橋。
カフエのウラ、文明がチラ〳〵河面をのぞく。
ちよいと見えて消えた芝居の樽、
流れて來るもの罐詰の空罐、西洋人參の葉。
水の流れもののもハイカラ
戎ばし工事中、假ばし
新戎ばし
大黒ばし
深里ばし、倉庫地帶。
積んだ荷物は綿俵、船べりも沈んでせつなさう——！
肥つた中年のおかみさんのやう。
住吉橋。
モーター・ボートのみよしに藁ごみがつき出す。
幸橋の上で手曳車をとめてその上へ乘つて曳手が煙草のんでる。
汐見橋
板や、材木や、
船が多い、やゝこしいぞ

大大阪君の似顔圖〔十四〕

日吉橋
他人の船べりで生活してるいかだ師。
何故なれば彼は他人の船べりへ竿鈎を打込んでいかだを進行させるから。
第三福壽丸、八幡丸の間に挾まつて
わがボート、立往生。
左、設計師が情死のロマンスを遺した大正橋。橋脚なしの橋だ。橋脚なしと精死と何か關係があるか。
木津川を見通す。
『船八百艘、帆柱八百本、あるく〳〵』

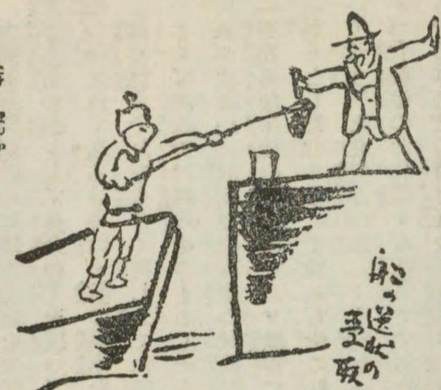


北へ向つて行く。
廣い川の交叉點。
瓦斯會社の怪物。起重機。
『ペラにごみがかゝつた』

『ペラとは何だ』
『ボートの推進機のこつちや』
しばらく浮草のボート
傍を『ざうく、ざうく、ざうく、ざうく』
蒸汽が通つて
あふりを臭れるのは有難くない。』
『ペラが少し直つた。ゴー、ヘー』
岩崎橋。
右岸錨や、西洋錨、鎖さまゞ。
モーターまたパンク
『後から船來たぜ、當るぜ、ソラ當つた。』
珍らしい蝙蝠一疋、もつとも岸の柳はもう綠をかなり準備してる。
千代崎ばし。
いろは肉やの時計臺のイルミネーション。
『堀江へはいかれやへんぞ』『やめとこ』
ボートまた、パンク、再三曳船蒸汽の脅威。
荷上げの錆びた鐵板の色と荷夫の肩肉の色。

送り狀を舟から舟に渡すにそれ用の手綱が出來てるのを見付ける。
北へ曲る、夕陽を背
洲崎橋
玉造橋
左側、並んだ柳、はしる電車、
鰹座ばし
白髮ばし
橋上の子供唾吐きかけんとし睨んだらよした。
問やばし。材木河岸。
富田屋橋、宇和島ばし、
橋詰に廣告看板の集中。
船のかみさん子供に向ひ
『陸行きな、危い。やめ〳〵』といつてる。
陸では『川へ行きな、危いやめ〳〵』といふのにね。
電車の橋
四つ橋
北へ曲る。泥川、臭い

かんな屑の浮島
助右衛門ばし、黃昏は迫る。河岸でごみをやく火、心にしみる。溝より流れ出る硫酸の青い水の臭ひ、メランコリーの神經に痛い。



棺桶に繩がかゝつたような箱が流れて來る。
薄暮よ。哀愁よ。
たうとう〳〵ボートがペラッちやつた。
河岸の乞食さんに
『その竹一本貸しておくんなはれ』といふと返事
『返さんでもいゝ。やるワ』
乞食さんに頂いた古竿で文明のボートを漕いだがはかは行かぬ。

大大阪君の似顏圖〔十五〕

とう〳〵舳の繩をS君他の船を傳はつてひき出して
『これではまつたら貧乏籤や』
荷船の船頭『ハ……』
進退谷まつたところが
笹橋
で大阪君の顏の鼻と唇をつなぐ線即ち鼻唇線の溝を道頓堀の泥川にする。

大大阪君の似顏の圖〔十五〕

（ぬ）大阪君の顔の耳

新興都市の新らしき耳は何か？　ラヂオ！然り、ラヂオであらねばならぬ。

（一）化粧品の古箱無線電話器に再生する事

大阪朝日新聞社の無線電話室をT氏に案内して貰ふ魚形水雷の形をして黄金の光を放つて居る蓄電管。機械の鏤まれて居るさま恰も蟹の胴中を長方形に切斷せし如く然もそれを大きく押し立てた三つの發信機。嚴めしくて複雜で、科學そのものゝやうで、説明を聽く勇氣が出ない。面倒な物理學の試驗問題に出會した時の不勉强な生徒のやうに、たゞ默つてお辭儀をして引退かうとした、するとT氏『ぢやこれなら見ても面白いでせう』と化粧品が並んでる盆を一つ差出す『ラヂオの女技手のお化粧する道具ですか』と訊くと『さうぢやありません。これは化粧品の古箱を利用して少女が拵へた無線受話機です。よくご覽なさい』T氏はかくいひて盆上の箱の蓋を一々取つてみせた。クリームと練白粉を繼いだ箱の蓋を取ると、中から受話の聲を大きくする仕掛けの眞空管の電球が顔を出す。はき白粉の蓋をとると、電波を調べる同調器が顔を出す。蓄電機がクリームの空壜、電波のもつれを整へる機械がおしろい下の容器の中、その上懷中鏡まで立つてる。『どうもいゝ匂ひのする無電機械だ。そしてこの機械は本當に使へますか』

T氏『さうですね。市内ぐらゐは役に立ちます』

これはいけない、おうい大大阪の男共！　氣をつけろ！　諸君の戀人の室の中に化粧品が並んでたら一々蓋をとつてみろ化粧する振りをしていつ知らぬ間に仇し男と電波を同調させて居るか判らんぞ世の中は文明になる程、氣の採める事だ。

檢分し終りて、大阪の顔に受話機の耳を描込む。

（二）金八錢お汁のわかれの事

『S君、大大阪の似顔も曲りなりに出來た。この顔はまだ目鼻だちも揃はず、顔の道具も新舊、完不完、がタビシしてる。けれども落膽する事はない。大大阪は前途を持つてる。成長する素質を持つてる。僕は市中を歩いて、氣配でさう靈感した。で、その感じをこの描上げた顔に向つて餞けに送り度い。君、聽いて置いて大阪の逢ふ人毎に傳へてお呉れよ』よつしやいうてみい』

思ふまゝに顔をかしげるなり、
曲りくねらせろ、
さあ　お前は欺き了す事は出來まいよ、私はお前の
完全にして損はれない豐かさを
屹度見る。

『これはホキットマンの顔といふ詩の中の詩句を勝手に拾つたものだ』そないな事をしてホキットマン怒りやせんかいな』成長を祝福する事に使ふなら、おやぢ詩を逆に並べられても怒らぬだらう。扨似顔は描上つた。任務は濟んだ、S君いろ〳〵有難う。で、何かうまいものを喰つて清く訣れよう』何がえゝ！』何がといつたつて、汽車賃をひくとあと一圓二十錢しか殘らない』よつしや。大阪といふ處はな、どない廉うてもうまいもゝの食へる處や。引受けた』かくて二人は夜の心齋橋通りを行く、『ゆふべは大阪倶樂部と清交社倶樂部とで過して大に紳士的だつたね』ない思ふた』大阪倶樂部の椅子と電氣立てが氣取つてたね。ウエストミンスター寺院のカンタベリー大僧正が坐りさうだつた清交社の方はあれで搖れゝば六千噸位の歐洲通ひの船中の感じだ』ほう來たぜこれがおしるやや、入らう』町角の狹い路の下

を油障子で二方圍つたいとも小さい店、店内暗い床几に客は膝を喧嘩させ乍ら無言汁の音許りツウイ〳〵。『やあ白味噌のお汁の中に章魚の足が入つてら、ツウイ〳〵ムチヤ〳〵』『こゝのうちはおしる許り飲みに入るうちや』『いくらだい』『一杯八錢や、廉いやろ』『それで安心した。』かくて表へ出て額の汗を拭いてS君と握手し乍ら『馬鹿野郎、東京へも遊びに來い』『阿呆よ、近いうち又來い』大阪の馬鹿野郎は東京の阿呆を一圓タクシーといふ踏み潰したやうな自動車に乘せて曳れた。何處までも一圓だとは廉い。けれども一寸とめさせて煙草を買ひに降りたら、降りたらその先はまた一圓だといふのでもう錢ない梅田まで歩く。(完)

〳〵筆者曰く、投書をもつていろいろ申越された方に謝す、中にも齒科醫の森岡氏より大阪君の齒並びについての專門的注意、丸K氏より阿倍野火葬場への案内申込みは特に叩頭す。

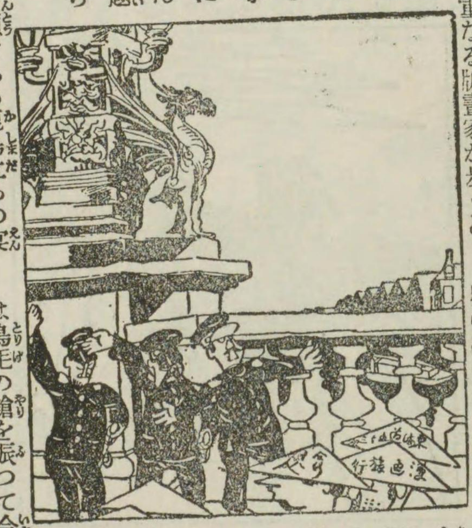
紀行漫畫漫文集

今の東海道五十三次

一、日本橋――勞働祭の警戒

□同じ東海道でも天保の頃に廣重なる版畫家が歩くとあの見事な錦繪が出來る。同じ東海道を享和文化の時代に十返舍一九なる戯作者が歩るくとあの頓狂な膝栗毛が出來る。然らば同じ街道を大正の今日われ等如き漫畫家が歩るいたら其處に何が產れるか？大正の彌次さんは少々理窟つぽい。こんな問題を自ら胸に提起し偖徐に待ち設けた自動車に乘る。

□其處は檜物町魚がし料理の店頭である鹿島立ちの宴をこゝに開いた。初鰹のサシの動いてる奴を箸を揃へて食つた。鳴雪、止水兩先輩より旅に送る言葉の數々を謹んで承つて居ると少々心細くなるが自動車が門出を促すブー〳〵といふ喇叭の音は親の金を竊み出し奥の殖半へでも驅けつけるやうで一向旅らしくない、中途半端な氣持ち。



□一行、對岳坊（萬朝）、千帆（讀賣）、純一（毎日）、鈎（國民）、凹天（中央）、左行（やまと）、收二（都）稠、直造（時事）、立頃（報知）、浩一路、青起、永治、爾保布、治平と、みのる、亮英、予と十八人である。十八人の彌次喜太には東海道も驚くだらう。

□日本橋を渡る。廣重の日本橋は鳥毛の鎗を振つて今大名行列が橋を渡らんとする圖だ。今の日本橋は獅子と麒麟のついた電燈の欄干の下に今日勞働祭を警戒の巡査隊が柵を作つて居る。少し立ち止まつて眺めやうとすると、『立つちやいかん、立

つちやいかん。』

□橋の兩頭に建つてる商館は限られた地面に多く間取る必要があるので、羊羹の切屑のやうに三角や不正四角に上へ上へと延びてる。

二、品川——洋食のにほひ

川崎——八丁畷欅の新緑

神奈川——海は屋根瓦に

□廣重が得意の紺青を流して深さ廣さを示した品川の海は引汐に干潟になり貝掘る人の腰卷の赤は遥か安房上總のまゆずみ色の上へ密接に貼りついてる。汽車の煙の爲め蒼色に燻し上げられた鐵橋を渡る。右の角が京濱電車の起點停車場、花時も過ぎたので乘り降りの客も緩慢な下駄の音が長閑に石壘に響いて居る。隣のバアから肉を揚げる臭ひがする。フライかな、カツレツかな。左側に料理屋が並んでて行人の食慾をそゝるやうに湯煮た蟹や蝦蛤が並ばせられてる。竹の樋の噴水を受ける生洲の中に黑鯛やあなごが游がせられてる。

□大森海岸の松浅で見送る人へ袂別の盃を擧げる。一つの丼にはサイダーを注ぎ、一つの丼にはビールを注ぎ下戸上戸と左右に分れて飲み廻はす。水盃が進化するとこうなる。旅人である筈の一人が中庭のブランコへ乘りいつまでも面白がつてる、まだ旅心地にならぬ。大森在住の川端龍子が親子三人で待設けてゝ名物鰒提灯を一本づゝ呉れる。道に迷はず歸れとの親切かの

□蒲田を過ぎて行つたところはお祭であつた。いたいけの少女に緋の袴を穿かせお巫子姿に仕立て親共が自慢そうに擔いで歩るいてる。

□六郷の橋を渡つて川崎町、自動車は疾風の如く驅け拔ける。出たところが八丁畷欅の並木の新綠が素晴らしい。

□鶴見川に土工らしい男が岸の仲間へ對し自慢さうに川へ入つて游いでる。上ると褌の痕だけ腰に白い男。

□神奈川の見晴しの臺。廣重の繪では臺の直ぐ下に海が來て居る。今其處に高島嘉右衛門さんが埋立てゝ蔓が並んでる。蔓の果に横濱船渠の鐵の工作橋が望まれる。道の右側の「見晴しの松」は人の家の構内になつてる。

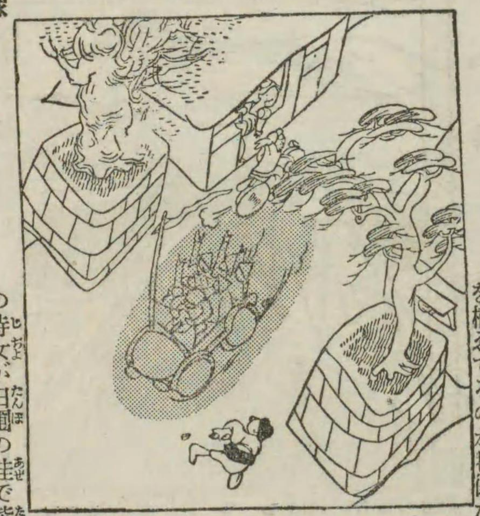
三、程ケ谷——成程咲いてる

屋根のあやめ

戸塚——セピア一と色

平塚——松と欅の一里塚

□自動車を澤山ならべて馳るのだから後の自動車に乘つた奴は堪らぬ。埃だらけだ。靑起が鼻ピイの顏をこの埃まみれにして名所々々では何故先の自動車は停まつて說明して呉れぬのだと怒りに來た時などは友達にこんな化ものは居なかつた筈と思ふ。



□程ケ谷は松並木の下に並んでる家々の屋根にあやめを植ゑてるのが特徴だ。其處のかみさんにそれを褒めるとかみさん始めて氣が付いたやうに仰いで見て『成程咲いていますね』は薩張りしてる。

□鬱蒼として林に覆はれた丘が畑を距てゝ右手に控へてる。通ずる路の上り下りが燒餅坂に權太坂とてそのかみ海道筋で名代の難所さうな。

□横濱からでも遊びに來たのか瑠璃色の洋服を着た女の子とその侍女が田圃の畦で紫雲英を採つてる。千社札貼りが糊刷毛の着た長い竿を擧げてこつちへ向ひ萬歳をする

□戸塚の町の中頃に右鎌倉道約三里と書いた道しるべがある處で自動車を停め、低徊する。セピア一と色掃

いた燻んで細長い家並、その單調を破つてるのは料理屋の張り替へた障子と枝を下ろした截口から白綠色を吹く靑桐の若葉とだけだ。

□むかしの道中案內の分間圖によく見うける一里塚の遺つてるのが平塚のはづれにあつた。道の兩側に四角い石で圍み一方には松、一方には欅が若芽を吹いてる。オートバイの競走でもあつたか砂煙りを立てゝ幾輛もびゆつと來てびゆつと去つて行く。手を擧げて萬歲を云つてやると、一町過ぎた頃後で答禮してる。下手な奴はハンドルから手が離せないから猫バ、をきめ込み過ぎ去る。

四、藤澤——野球歸りの中學生

平塚——生臭くねえ魚籠

□桑の若葉がいゝ、桑の若葉が。廣い桑畑になると地の果まで新綠の蔽が敷かれてる。蔽ではない綠の焰だ今や落ちんとする丹塗の太陽は最後の生命を空には金砂子として撒き地には白金の雨として注ぐ。それを享けて桑の新芽はよく看ると一つ〳〵燃えて居る。音も無く野一ぱいが空へ向けて燃えて居る吾等は胸を張つて强く深く息をした。

□自動車を停め埃除けの目鏡を外づし乍ら遊行寺の境內へ入つて見る。こゝは時宗の總本山、開宗一遍上人より四代の僧呑海上人が開かれた淨域である。藤澤道場とも申す。銀杏の大木の陰に柳と電氣燈が立つてる。蓮の葉の形の手水鉢に淸水が湛えてる。お堂の廊のお賓頭盧さまを撫で擦り拜んでる賽人が遠景に小さく見ゆる。

『イツロングエ、ツ、チペラーリツロングエ、……』

ユニフォームを着た仕合歸りの中學生がバットを振り廻し鼻唄うたひ乍ら石段を町の方へ下りて行く。急に繁華に拓けたらしい町の樣子、軒に一疊敷もある大凧を立てかけ賣つてる雜貨店もある。

□東海道らしき松並木、日はいよ〳〵暮れ街道の砂地が紫色に見ゆる。其處へ沸いて出たやうに子供が澤山出て『旗臭んねえ〳〵』土地を調べるとこゝは茅ヶ崎。仲間に說明をなすものあり『空氣がよくて、土地の名產の芋に因むからこんなに澤山子供が出來るのだらう。』

□馬入の橋をガタピシ渡る。醉つて戻る鐵道工夫あり、行き違ひさま釣人の背中の魚籠に鼻を押しつけて見て『や、ちつとも生臭くねえぞ。ハ、、、大將！　釣れわえな、酒の肴の一びき位釣つて歸らねえとな、それ山の神に申譯ねえぞ』

五、大磯——東京の夕刊を見る

小田原——外科先生の飛行機踊り

□平塚の町には灯が入つて居た。現代の平塚には支那料理屋が出來シウマイ、ワンタンなどといふ看板を掲げて居る。光來寺山がどしどし近くなつて來る。眺めて『小つぽけな山な癖に雲を吐いてやがるぜ』といふものあり。

□大磯まで町並つゞく、鐵の橋がかゝつてる鳴立澤の角の旅館の塀に料理番らしき男が梯子をかけ電燈を直してる。

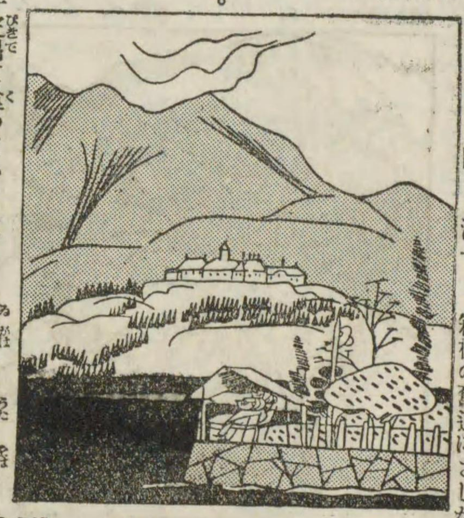
朝日の通信員の方が自動車を呼び止め朝日の夕刊を拋り込んで下さる。ひる江戸を出てその夕方大磯で天下の形勢を手に取る如く看得るとは文明開化の世の中ぢやなア。彌次さんも廣重さんも一寸どんなものです。

□酒匂川を過ぎ勢込んで小田原に入る。花菱旅館に

泊る。湯に入る間に大廣間にはお客が集まり招待會の宴會。一行の事務總長霜山が挨拶をする。演說する處は甚だ事理明白だが、何故言葉中のけれども尻にしを附けてけれどもしくしといふのだらう、聞くと浩一路があれは伊豆の訛りだと說明して呉れた。町長さんの謝辭があり外科の病院長さんで頗る多鬚な方があり三味線を單葉飛行機になぞらへブルブルといつて踊り廻られた。

□東京を出る時魚河岸料理の床の間に虎の懸ものがかゝつてた松淺でもかゝつてた、妙だと思つてたらとうくお客の中から醉つた本ものゝ虎が一疋出て喰つてかゝる。釣か『お前は孟子を知らんから』と叱られる。靑起が『お前等に天下の事は判らん』と叱られた。

□仲間の代田、在田及ひ宮尾がこゝから歸る。無理に送らせて來た中外の大谷、自發的に送つて來た横濱の平尾氏もこゝから歸る。翌朝九時湯本まで早川に沿うて自動車。こゝから駕を十挺雇ひ集め牛數交代で乘り箱根の舊道にさしかゝる。



六、箱根八里——數多き舊蹟

□箱根舊道の石疊は今でも敷並べられたものが遺つてる。凸凹した石疊の左右の叢にはしやがの花が今盛りだ。鶯の聲を聞く。二タ子山には陽が當つてゐる。

□『箱根八里はなアーエー』と先頭の駕かきが唄ふと後の連中も『なアーエー』と合唱する。『——馬でも越すが、越すに越されぬ大井川』と唄ひ終ると急に元氣附いてヘッチャくくと一氣に擔ぎ登る。唄を唄ふ處は多く難場の坂の昇り口にて肩變りをする序に一ト息入れる時だ。

□早雲寺の境内で一ト休み、櫻が咲いてる。

□筧の清水が庭に導いてある寺に「五郎の鎗つき石」といふのに竹の圍いがしてある。

□雜木の茶屋を出て少し行く右手に谷を距てゝ「初花忍の瀧」といふのが見える。

□つくも村といふ山の中の村らしい家並がある。小さい流れを挾んでゐる。ぢいさんが今採つて來たての香高い山葵の根を洗つてる。

□樫木坂の茶屋に力餅あり。笈平のあまざけ茶屋に神崎與五郎に詫證文を取つた馬喰、「丑五郎の馬繫ぎの杭」といふのがちやんと雨除けがして保存してあるを切らす。

□けれども唄だけはまだ二つ三つ昔の儘を覺えてる。『こゝは箱根の樫の木坂よ下に見えるは畑の茶屋』など唄ふ。そして互に激勵し合ふ言葉には、『ヅデー名ある坂だ』『苦しきや何故來たゞ、あわを喰はずに米を喰へ』なぞこれも昔ながらの趣がある。『おい、ちつと酒手でも强請つて見ないか』こんな事言つてやると俄に薄笑ひし乍ら『旦那飲ましてご覽なさい脛に羽が生へますぜ』どうしても凄味が足りぬ。

□湖水が見えて元箱根につく。舊關所跡の石垣が一寸遺つてる傍にペンキ板の案内地圖が建つてる。舊本陣であかはらの煮付けで晝ご飯。昔の關所の手形を見せて貰ふ、左の如し。

七、箱根八里——その二——ちつと强請つて見ろ

□今の駕籠昇きに一人として刺靑を彫つてる奴が無いのは文明ではあるが趣がない。普段他の仕事をして居て呼び集められて急に駕籠を擔ぐのだからすぐに息

差上申一札の事

一、此者十一人奥州信夫郡山口村より伊勢參宮に罷越候間御關所無相違被遊御通可被下爲後日一札奉差上候仍如件

江戸宿馬喰町二丁目

山形屋庄兵衛

箱根御關所役人中様

□こゝから徒歩。例の石疊の上を行く。木にからんだ蔦の青葉が見事な接待茶屋を過ぎ沼津の海を見下ろしつゝ山中村に入る薪を背負つた娘を浩一路が寫眞に撮らうとしたが『いやだよ』と背中を向ける。浩一路一策を案じ路傍の馬を撮る振りをしてレンズの口だけ娘へ向け娘が氣を許すところをカチヤリ。

八、三　島——外苑のマラソン奉納

□あいよが痛くなり坐つて仕舞ひ度く思つた頃、五色の旗を振り翳し三島、沼津の新聞記者諸君、有志諸氏が出迎へに來て呉れた。折角の畫伯がいぢかり股で歩いてはみつともない。痩我慢を張る。

□迎への自動車に拾はれ三島神社に詣でる。官幣大社頼朝是に祈請し戰勝を得たといふので武家の尊崇するお宮だ。然らばわれ等も男性的な催しを奉納しやうじやないか。外苑の池の周圍で旅裝のまゝマラソン競走をやる健脚の亮英が周章てゝ袋道の中の島へ驅け込み引き返へす暇に弱者が勝つて仕舞ふ。

□三島の有志が境内に休憩所を設けていたわつて呉れる。山越しをして來た餓鬼共はサイダーを飲んでお菓子を食つてそれから握飯を頬張つてそれから蜜柑を食つて——傍の見る目もいぢらしからう。

□沼津へ向ふと段々歡迎者が增えて氣まりが悪いくらゐ。押し揉まれて臨水館に入る。

□二階の大廣間は招待しといた客が入り切らぬのでT字形に襖を外づし擴げる。郡長さんの言外に意味を籠めた簡單な挨拶、所望に從ひ永治の創作に係る飛行機踊りを皮切に少々漫畫會の國寶の拜觀を許す。飛行機踊りは『あの宙返り——』といふ節のところで疊の上で首の痛いのを我慢して横轉逆轉するところが藝の山だ。警察署長さんを笑はせる。

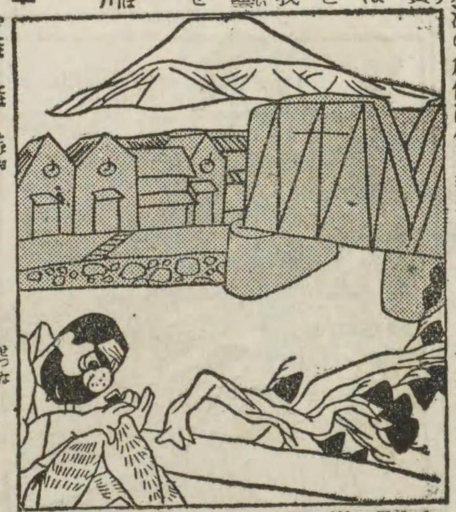
□按摩を取つて寢てると狩野川の艫の音が聞える。

九、沼津——揮毫强請軍

□眼が覺める。素つ裸になつて矢庭に庭へ飛下りる。庭は砂地だ。川下に千本松原の名所があるのは道理この一寸した堤にも見事な松が生えてる。堤からすぐ川へ下りるやうになつてる。

□向ふ岸の貸船屋を呼んでボートを借り乘廻すもの。脳に自信のあるものは宿屋を一と廻りのマラソン競走を始めた。轉がつて霜山とみのるが擦り剝いた。みのるが武藏野ヶ原のやうな脳の毛を分けて漸く傷の在所を突止め、膏藥を貼つてるのを前景にして狩野川に架けた鐵橋、河岸の藏、沼津の町の甍その上へ朝日を受けて薔薇色の富士がぽつかり浮ぶ。繪だ。野球狂は便所の脇で氣取つた姿勢をして拙い球を遣り取りしてる。

□御飯を喰べてると揮毫强請軍が攻め寄せて來た。要領の好いものは色紙扇子をつきつけられさうになる刹那にすーつと體をかはし荷物の始末かなんかをする振りをする。就中要領のいゝのは治平だ。人の好いものは四方八方から摑まへられ然も一人の客で五枚も八枚も描かす人があると知り乍ら、斷り切れず不機



嫌な顔をして筆を揮つてる。

□直造が夜汽車で來てこゝから一行に加はる。野球狂だから暇があれば『抛らう抛らう』といつて五月蠅さからう。

□自動車で出發、郡役所へ寄り郡長さん以下の歓待を受ける。役所で鹿爪らしくバナナや林檎を頂戴するのは正直のところ少し肩が張る。敬意を表してこつちも手をゞめてシヤン〳〵〳〵

□東海道を疾走し始める。

十、原——松蔭寺　鈴川——寂しきよかよか飴や、左富士

□景色が段々よくなつて來る。陽が當つてるが雲の多い日だ。あの邊に富士があるんだらうと思ふばかり。

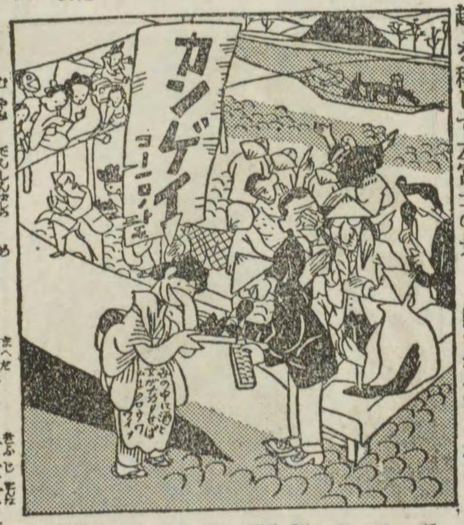
□原の宿。これがあの偉大な白隱の寺かと驚くやうな松蔭寺、寺の簡素に引きかへ門の側に高雅な脊の高い松の木がある、梢の切口にすり鉢が載つてる。

□白隱のところへ備前侯が訪ねたことがある。何か欲しいものはないかと尋ねた。今丁度庫裏で、すり鉢をわつて困つてる所だ。すり鉢を一つお呉れ。そこで備前侯がすり鉢を贈つた。そのすり鉢を勿體ないからか或は松の切口の腐れを防ぐ爲めか兎に角梢に載せた。傳説のこの邊は寺の坊さんに聞いても里人に聞いてもまちまちであつた。

□脇堂に禪師の木像がある。體格のがつしりした、水晶を嵌めて眼光炯々たる趣を寫して居る。信州飯山に辛辣なる正受老人と取り組み合ひまでして遂に桶底を脱した逸話を有する鴛林老漢の面目躍如として居る。

□風に梢のむせび泣く松並木の間に點在する鈴川の宿飴をうば車に曳いて商ふ小娘のよか〳〵飴屋が點景人物としてふさはしい。

□兩側の田甫には一面紫雲英が咲いてる。街道を行くと右に松の間に聳えてた富士が道筋の屈曲に從ひ急に左の方に移るのがある。この趣を稱して左富士の景である。



鐵道馬車がビーポー〳〵とだるさうな音を立ててるうち、自動車に追越される。

十一、吉原——富士川の「エモ」

□自動車は鐵道馬車の線路に沿ふて吉原の町へ入つて行く。鐵材で作つたハイカラな火の見櫓や洋館なぞもある開けかけてる町の樣子。廣い見晴らしの景から町へ入つて行くと、無暗に電信柱が目につく。それから人間が目につく。

□潤川の橋が橋普請ゆゑ乘手を下ろし試に渡して見たがあと二三分のところが渡れぬ。十八人口々に『いま〳〵しい』といつたからいまいましいが十八出た譯だ大迂廻をやつて富士川の岸へ出る。

□柳の蔭にて馬を流に漬け舟の舳にぶら下げた桶から飼料を食ましてるのがある。夏近くらしい。渡しを渡る。水が淺いところは土俵で流れをせき水深を作り舟を通す岸と岸とに太い針金を張り舟は傳はつて行く。急流だ。中の洲を歩き又渡船がある渡つて向ふが岩淵の町だ

□遠くよりどうも河岸にあんまり人が多過ぎると思つて行くとそれがみな歓迎の衆であつた。絶景を前の河原に休憩所を設けたは結構蓆旗を立て、ふざけた文句を書いた前垂れを給仕女に締めさせたりしてる。岩淵は一行中の浩一路の修學地ゆゑ、土地の人々はみなわれ等をも昔馴染のやうに勞はつて呉れる。河岸の家々には女子供が席を爭ひわれ等を見物する。かうと知つたら今

少し縹緻よく生れて來べき筈。

□里芋の親みたやうな黒い芋が素的にうまい。栃木生れの左行、あたり憚らず『このエモ〳〵』と發音して浩一路の顔を演す。

□きなこをつけた栗の子餅も旅人への馳走には相應しきものであつた。

十二、蒲原——母の愛　破れ洋傘の由比——男は網を女は櫻海老を

□一行の似顔畫を絹へ求められる。これが町のお宮へ奉納の額になるのだとは罰當り共だ、首が曲らねばよいが。

□國旗を交叉したガタ馬車に乘る。麥の穗が抽いて居る。とひようもない高い空に一寸富士が光線の加減で黑い頂を見せた。

□見渡すかぎり麥畑の、黃が陽に映つてる。野の黃と空の青と境ひをする、地平線のところに松林が何の苦もなき輕い運筆で描き出されてる。松林の間にいくつもの建物が光つてる。建ものには曲つた煙出しが立つてる。陶燒く製場だ。こんなに平和で健康で平凡な景色が又とあらうか。息を深くして野の光明を肺に深く吸ひ込んで置かう。われ等が藝術の肥しになるだらう。

□麥の間に柳行李の蓋に子供を入れて捨てゝある。變だと思ふと向ふの實のなつた菜種の中から母親の思深い眼が二つ光つてるのを發見する。思はず微笑した。心から子と母の幸福を祈らざるを得ない。子供の上に破れた洋傘で日を覆ふてあるのも母の愛が催ほす智惠だ。この邊は蒲原。

□橋を渡つて櫻海老を軒ごとに干す驛へ入る。こゝは由比。驛の屋並の背景として薩埵峠の切れ目のある蒼い山が見ゆる。

□由比驛の近くの由比館でお晝。二階から碧い光つた海が見ゆる。麥畑と海との間の砂地に男は網を干してる、女は櫻海老を干す。

十三、興津——月並大賛成の濟見寺　江尻——居眠つて過る

□ガタ馬車に乘つてると嫌でも應でも馬の尻が續々馬糞を生み出す奇蹟に向き過はねばならぬ旅へ出て便秘に苦しむ浩一路つくづくいふ『馬は通じがよくて浦山敷しい』

□靜岡から迎ひに來た自動車に移る。薩埵峠も海岸の新道を行けば峠とも思はずするゝと越す。又田圃中を行く路。先の自動車がおまはりさんに止められて乘

手がびよこ〳〵お辭儀してる。熊ア見ろ。そばへ行つてみると違つた。警察署長さんの出迎へであつた。興津では靜岡から歡迎の有志諸君、記者團諸君が自動刀へ字を書いた大旗を越中ふんどしのやうに締めて來るのに出會ふ『やア〳〵』挨拶を交し乍ら濟見寺の石段を上る。

□境内五百羅漢の石像がある。頭の長い中西立頃も、でこぼこの對岳坊も、仲間の連中の肖像は探せばちやんとみなある。然らばわれ等も解脫の道に遠きものに非ず、要は精進の如何に在ると知るべしか。

□黑裝束の鐘樓の傍から垣に頰杖つき海を見る。櫻の若葉の上を越して遠く右手に久能山の黛色、それから海面に細く風に從つて流れる油煙のやうに三保の松原が尾を曳く。清水灣には西洋型の船が箱庭のやうに無邪氣に置かれてる。月並であらう

月並でも何でも兎に角絶景だ。

□清見寺の前にレールが敷かれてるので絶景に見惚れてる鼻の穴を時々汽車が來て燻して行く。

十四、府中——大井川の邊、茶摘み

音頭

□たそがれの頃靜岡に入る茶業組合の樓上で一行の爲め新製の新茶をよばれる。埃まみれの身體へもつて行き一條の香氣は鼻入して行く鼻の穴が閉がらないで居たのは幸である。仲間同志小さい聲で『一斤いくらする茶だらう』鈴木副會頭の挨拶。不景氣で茶も一倍の奮闘を要する時ださうな。

□大東館へ落付き、浮月の招待會に臨む。小杉榮花君所藏の大井川の蓮臺を陳べて見せて呉れる。隨分古さうに燻ぼつてる。むかし大名が大井川を渡るには六千人以上の人足賃を費した相だ。無論胡麻化しがあつてそれ丈けの實頭を揃へたのではない。昔も今もその邊の要領は同じだ。

□床の間に中田市會議長の筆で『上る東海道は五十と三次』の軸をかけてある。われ等への心遣ひが讀める。

□來客には伴野市長、辛島警察部長、水野助役等盛んだ。中田議長の謝辭、その後に予が演說して『六法全書を讀ませないで漫畫の筆を執られたし』と囑望した程、不思議に漫畫を理解して居た。一言斷つて置く。予も必要に迫られて少しづゝ演說をするンである。

□青の手甲に青の脚絆、絣の揃ひに籠を持つて少女が

出た。茶摘音頭といふのを踊る。唄の春雨は替唄『——とつ國の註文受けて皆人のよろこび勇む氣は一つ私しやまるより主しや天下一——』まるよりも天下一も茶の名稱である。

□Y社の通信員の方で『蟲の油』の廣目賣りの物眞似を眞に迫つてやる方があつた。刀で紙をこまかく切つて吹き、『春は三月吹雪の櫻、アレ〳〵〳〵』なゞいふ處、實はこの方が本職、通信は片手間ではないかね。

十五、丸子——電燈と除蟲液

岡部——裸の茶師

藤枝——ふんどし町

島田——大井川で横綱

□靜岡のわさび漬屋の一丈もある山葵の看板は篦棒でいゝ。

今の東海道五十三次

□阿部川餅は、餡ときなことあつて一盃五錢、阿部川の橋の袂の柳の綠が柔かだ。

□一軒申譯ばかり障子に名物とろゝ汁と書いた家が殘つてる、丸子の宿。朝の名殘の電氣がまだついてる下に挿した、やしほの花が赤い。店の前に紺碧の色をした蜜柑の樹の除蟲液と噴霧器が置いてある。

□山も平地も綠色の饅頭を並べた茶畑ならぬはない。

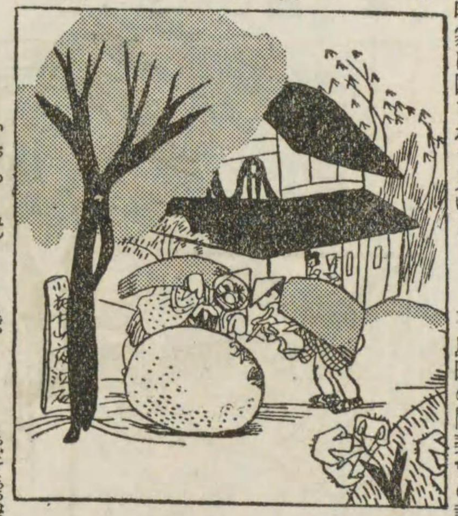
□よく人殺しの場面に使はれる宇津の谷峠、一寸自動車には難所だトンネルもある。

□見送りの靜岡衆と別れ藤枝衆に出迎へられる。岡部の町を疾走して行くと茶よる女が急いで窓を開け茶師は裸の儘で飛出して來る。

□藤枝はふんどし町と綽名される程あつて成程長い、二八會衆の歡迎により一寸休憩。公園に上ると熊谷直實の蓮生坊が念佛を抵當に錢を借りた長者の邸跡は田になつてる。蓮生寺の屋根も町家に圍まれて見ゆる。

□材木が山のやうに積んである木材工場の多い島田町。

□大井川の河原の砂が痛くなささうだから相撲取つた。蕎麥粉で苦學したといふ筋ばかり多い肉體の亮英に負けるのだから予の强さや推して知るべしだ。その代り土俵入りの横綱を張つてやつた。政治社會、實業社會、藝術社會、その他の社會に於て横綱でも張らうとすれば意地惡る連が直ぐ叩き落しにかゝる。大井川で自然を相手に横綱を張つてるとその憂ひは全然無い。自己滿足を得たい衆は大井川へ來るべしだ。



□治平を救いて蓮臺渡しの眞似をして河中で一寸强請つた。治平が靴を濡らすまいとてこの態を見よ。

十六、金谷——小夜中山夜泣石

□島田の關契會の諸君が河原に休憩所を設け待つて呉れた。一トロに五つ六つ頬張れる可愛らしい名物小饅頭を喰べ乍ら説明を聽く。

□今來た島田の方の堤に群を離れて立つてる二本の松があれが朝顔眼あきの松。開いた眼で朝顔があの翠松を仰いだ時如何に彼女は天地に感謝したらう。なほ島田には吉三の墓もある相だ。その寫眞を見せられる。吉三はお七の菩提を弔はんとて廻國中寶永七年この地にて病歿したといふ

□渡しを渡つて彼方の岸についた時顧れば手に手に小旗を振り翳し島田小學校の生徒達が見送りに來て呉れた。川一つ距てゝ仕舞ひ、小さい手と握手が出來ぬ

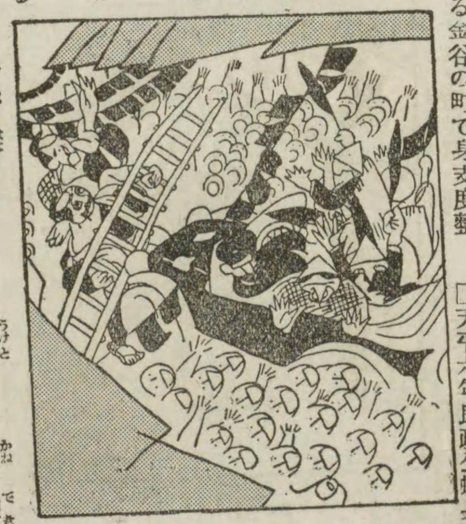
恨めしさ、仕方ない。有難う〳〵といふ心持ちを手足で踊つて見せやう。通じたか可憐な聲を振り絞り萬歳々々といつて呉れる。

□太刀の魚が魚屋に澤山光つてる金谷の町で身支度整へ小夜の中山にかゝつた。一ト越し越えると麥の穗に埋まつてる里がある。歌や物語りに名の出る菊川の里。又一ト奮發登る。

□新道の路傍の葉櫻の陰に四斗樽大の卵形の石が抛り出してある。所謂小夜の中山夜啼石だ。凹んだ南無の文字は弘法大師が指で書いたものだと傳へてる。石の名の深い仔細は舊道にある久延寺に詣でると説明して呉れる。次回で話さう。

十七、日坂——青い汁の蕨餅

□久延寺へ行くと、和尚が庭へ廻れといふ。化猫でも出さうな陰氣な奥座敷、色變りした赤毛布の上に蛇身



鳥の牙と稱するもの、孕女を斬つたと稱する刀、權現樣の遺つたと稱する椀なぞが並べられてる、稚拙な木版刷の繪ビラを鞭で指し乍ら節をつけて説明する。

□天平六年良政公蛇身鳥を退治んとてこの中山に下り小夜姫を得た謂れは略す。文平年中、この中山に二人の姉妹があつた姉をお玉、妹をお石と申す。姉のお玉は今の飯盛女郎、某といふ美男に惚れた。某さん一しよになつてはくれまいか。某はお玉のおぞい女であるのを知つてるから難題を持ちかけた。幾日いくかの夜に金を持つて來い。無間の鐘の處で受取らう。金が出來ずばそなたの代りに鐘と結婚しやう。姉の苦勞を見兼ね妹のお石も共に奔走致した。ある夕、中山の石の傍を通つた。轟業右衞門なる惡黨があつた。理不盡をいひかけ遂にお石を殺した。お

石の孕める腹の切口から子供が出て夜もすがら啼いてた。里人は石が啼くと思ひ誤つた即ち夜啼石。

□この音八なる子供を觀音様が飴の餅を三文づゝ買つて育て上げ遂に仇を討たす。飴は峠の處に今でも二三軒賣つてる。『入歯をお氣を付けなさいよ』と箸に卷いて差出す

□日坂で晝飯と共に青いきなこの汁につけた半透明な蕨餅を食ふ。虎の軸もかけてないのに霜山の弟のけいちやんが半分虎になる。

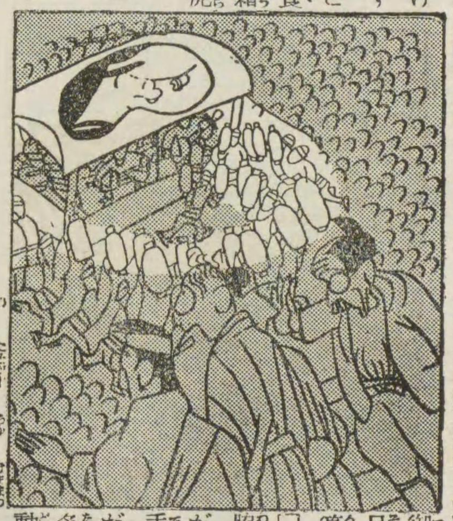
十八、掛川——秋葉參詣の燈籠

袋井——問口の狹い家

見附——町の毒仕の彌次喜太

中泉——活動看板擦過

濱松——凧の引揚彌子



□秋葉參詣の道しるべやら燈籠の多い掛川町。濱松の新聞記者衆が丁髷のボテ鬘や凧揚げの勇みの服裝で自動車に乘り込みこゝまで迎へに來られた。

□袋井の町は問口の狹い割合に奥行の深い家並が續く御維新前は間口の間數によつて人足や税を割宛てた爲めこういふ球算盤づくの建て方になつたといふ

□みかの坂を上下し松林を通ると脇腹を擘くやうな大きな音で花火が揚つた。見附の町へ入ると蛛蛛手に萬國旗を釣り下げ人が一ぱいだ。處へもつて來て彌次郎兵衛喜多八に扮した兩人が梯をもつて自動車の前へ立ちはだかり、通さぬ日も黄昏に近く濱松で招待しといた客もあるものを、でもたうたう降車させられる。

□見附のこの歡迎振りには深い仔細がある。鐵道開通以來見附は間の宿になり町の發展も鈍くなつた。今度の漫畫行の筆により町の特色を天下に紹介して貰はばや。これが催しの衷情である。彌次や喜多に扮した方も町への獻身的な奉仕である。

□町の代表者が『見附られたが不運と諦め！』などゝローカル、カラーを帶びた地口入りの演説あり。

□中泉、活動寫眞の看板が眼前を擦過す。闇の天龍川の橋を命を投げ出して渡る。急いで濱松に入ると凧の引揚げの彌子で祭の騷ぎ。大米屋の二階で渡邊市長、檢事正、首席判事、高柳代議士等に着席を乞ひ宴會、表二階には凧揚げの幹部が陣取り指揮の下に、市中の四十有餘の凧を屋根に載せた彌子屋臺が敬意を表しに來て下される。若者連が環に走り提灯の渦卷を作つて見せる。

十九、舞坂——濱名湖はカゴの中を舟で

今の東海道五十三次

□濱松を代表する俗謡がある。『遠州濱松廣いやうで狹い。横に車が二挺たゝぬ』といふのだ。この意味には二樣の解釋があるとて高柳代議士が犬養木堂の複製のやうな容貌には不似合ひの碎けた説明振り。

□第一のは字義通り濱松は狹い道路は横に車が二挺並べて置けぬといふ解釋。第二のは車は廓の誤りであつて大火で廓が燒けた事がある。長らく再築出來ずに居るのを諷して今に廓が二度建たぬなのである。

□然し兩説とも疑問を容るゝ餘地が未だある相だ。意味が判らずにどし〳〵人口に膾炙して行く處にこの俗謡の魅力があるのかも知れぬ。

□俳人十寸穂君が趣向を凝したお神籤を贈られる『各宿々にて女難の恐れあり特に濱松は注意せらるべし』といふ條項だけは當らぬやうだ。坪井靜岡新報子が越

中褌を人員の數だけ水引をかけて贈與される。

□翌朝快晴、舞坂まで自動車。辨天島の干潟で三角ベースをすると蟹や小魚がわが事と逃げ出す。船の艤はるゝを待つ。濱名湖の外海と通ずる處は洲に打ちつくる浪白馬鬣を打振はしてる。今切といふて元は陸が續いてた。湖内は遠淺で蠣の養殖をやつたり、海苔の粗朶を立てたりしてる。干潮で通れねばカゴの中と稱する湖中更に川ある趣の昔の通路を漕いで行く。左は鐵道の築堤右は松の振り面白く生へてる小島。

二十、新居——御關所のバナ、

二川——岩屋觀音　豐橋——女の自轉車

□かくて新居につく。舊御關所の館を其儘使つてる町役場にて休憩。昔の役人が坐り込み嘸威張つて通行人を吟味したらうと思はれる位置に長卓を据ゑ異國の香高きバナ、やネーブルスをギヤマンの鉢に盛り町の人々は戴待せらるゝのである。是非共、時の變遷を思はせらるゝ。封建時代の薄暗い奥の間の空氣は天井を拔いた硝子窓で雲散霧消した。

□新道開鑿の土の赤い崖へもつて行つて松の綠は頗る配色のよい汐見峠。海の浪の皺の如くよるのが遠望される。なつかしき初蟬の聲を聞く。

□見上ぐる許りなる見事なる老松の並木の根がたへ藁家を撒き散らしたやうな驛の二川。松並木の外づれると若木の多い松山の頂に觀世音菩薩たゝづみまします。稱へて岩屋の觀音。小雨來る。迷ひ出た鷄がわれ等の自動車に轢き殺された合掌して南無阿彌！飼主のかみさん無雜作に頸を握り上げ鷄の生命を顧慮せずに自動車の行くを珍らしがり目惚れる。

□豐橋は繁昌な町。晝ご飯喰べる。お膳が出ても室内でボールの拋り競べを始めたのをやめない。アウト、カーブが、おさしみの上に落ちたりしては困る。

□鐵橋の豐橋を渡る。女が自轉車へ乘つて歩るくのが澤山目につく。

女學生の一隊が來たのは目覺しい。子供を背負つたかみさんの乘つたのは危なつかしい。お年寄りの乘つたのは可笑しい。

二十一、御油——東海道で

一番長い繩手
赤阪——松並木竹藪
藤川——砧の槌、豆の花
岡崎——頭に屆く藤花

□自動車を見て驚いた荷馬車の馬がひつくらかへつて仕舞つた。棍棒を除けて貰ふのを待ち跳ね起きれば起きられるのに焦つて身體を痛める。時を待たずして獨立運動と蹤ぎ壽命を短かくする國あり。この馬に等し。

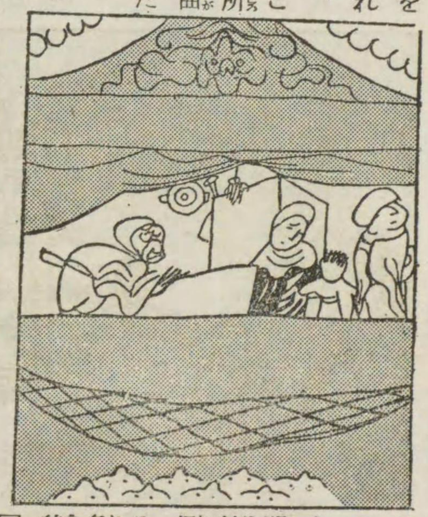
□御油繩手は東海道で一番長い繩手だと東海道通なる爾保布の說明。尤もこの通は云云々と說明して置き、言葉の後に『確かそうだつたと思ふが』といふ口癖あり。

□赤阪、松並木の間に竹藪あり。十返舍一九が膝栗毛に於て彌次、喜太を狐に魅させた構想はこのシーンにして始めて自然である。足袋屋の店頭に天氣豫報の信號の說明がしてある。して仰げば火見櫓の上に信號旗が重くなつてる。說明と照合して見るのに正しく雨だ。落膽する。

□駄菓子屋の店に駄菓子を並べ砧の槌を賣つてた藤川の驛。家と家の間の空地の豆の花、大根の花を見る。

□岡崎で歓迎受ける。琴平神社境内の藤を見せられる房の長い藤だ。帽子を冠つてないと房の先で頭の毛を撫られ痒くなる。土地の城主の本多忠勝の珠數を肩から斜にかけた石像の周圍に牡丹が咲いてる。案内されて岡崎公園を見物。城跡の壕を見下ろして頗る雄壯。案内されて三龍社の機業を見せられる。頗る文明的、又案内されてどこかを見せられる筈で追分道の所まで行つたが先導の自動車が曲つたのにこつちは曲らず失敬だが逃げ出した。

二十二、池鯉鮒——境橋の異裝人物



□藤吉郎で有名な矢矧の橋は木橋の欄干の外に鐵橋の欄干の頭が少し覗いてる。和洋協調の橋。

□池鯉鮒邊から家の屋根が伊勢作りとやらになつてるの趣向であつた。老人は中京狂言畫の名人伊勢門水氏少女は旭豐とかいふ琵琶師、少女は二錢銅貨大の花環を贈る。

□漫畫家の程度を各種各様に解しその歡迎振りにも上本を半開いて伏せた形を屋根に擬へる。關東では表紙の方を道に向けて建つてるこの邊からは表紙を横にして建つてる。如何にも都離れがして自然と、やあとこせ、よいやなといふ氣持ちになる。

□雨がしよぼ降る中を三河と尾張の境なる境橋の袂まで來た。後の自動車がパンクしたので待合せる。すると橋の向ふにもパンクした自動車が居る。扉を開けて中から古風な大小霰の羽織袴にシルクハットを冠り靴といふ異裝の老人が鎌倉扇を斜に構へそろり〳〵と橋へ差しかゝる。紫色の素袍を着た少女が三寶を捧げ後へついて來る。これは何だらう

□これは名古屋より出迎への連中

下深淺の別がある。それを拜見するのもわれ等には寫生旅行以上の修業だ。批評は扨措く。茲では老畫伯、琵琶少女の勞を深く謝さう。再會の新愛知の大澤君電通の鈴木君等同乘、パンクの修繕も出來て出發。

□枝を卸ろして葉が點を打つたやうに見ゆる松がこの邊の特色

二十三、鳴海——金のかゝつた家造り

宮——傘寺の開帳の灯

□やがて左手に槽狹間の古戰場が來る。丘の上に松に隱れて寺の頭が見ゆる。その寺には今川義元の墓があるといふ。他は田圃や松の生えた小丘。多奇なし。

□鳴海へ來る。暮れんとする雨の間から覗くと金のかゝつた洒落れた家造りの家が並んでる。みなさんは鳴海絞りでたんとお儲けしやしたね。

□雨がざー〳〵降つて來た。絲經では防ぎ切れぬ。しまひには頭の毛髮から垂れた雫が胸では細流となり腹では瀧津瀬となり猿股の隧道を越して脛へ大川となつて流れる。車臺の中は勿論、海。川の一代記を身體の上に始められては堪らぬ。

□一行の自動車は違つた二つの會社から雇つたのだが會社は双方反目し合つてる奴で運轉手がこれを機會に速力の競爭を始めた。速力計は四十五哩といふ處を上下してる。傘寺の開帳の灯は人魂かなんぞのやうに後へケシ飛んだ。熱田明神の鳥居も飛ぶ。町の灯が水溜りに映ずる名古屋市中へ疾走して入ると光りの急流に遡る狂へる魚のやう。でも命だけ取り止め名古屋ホテルで着物を一枚々々剝がして脫ぐ。

□宴會場、河文から矢の如き電話の催促にわれ等は休

息を許されぬ。仕方ない、元氣出せ。

□警察部長、商品陳列所長等が着席欠伸を噛み殺してる。新聞記者諸君も來られて待ち飽きてる。失敬した。新浦島の長唄あり。踊があり。先頃の少女琵琶師の『兎と龜』の一曲がある。琵琶の節に導かれて行くと急に節が變り『モシ〳〵龜よ』の唱歌に浮いて行く。

二十四、桑名——城跡の石垣

四日市——時雨煮の説明

□翌日雨。悲觀してた、づぶ濡れのゆうべの外套洋服が今朝新調のやうになつてる。感心と茶代の事が一しよに頭に來る。

□縣の商品陳列所を見物。所長さんの説明によるとこの土地は特殊の産物といふものがない。さりながら何でも他所より取り入れて出來ないものもない、故に産物の種類が非常に多い相な。これがこの頃南洋へ大變出ますとて經木眞田の西洋婦人帽を示された。浩一路手に取揚げ別に製造法なぞ研究する樣子も無い。一寸冠つて見て『サンキュウ！』

□とう〳〵自動車で越せない川が出來て名古屋より桑名まで汽車に乘つた。雨の雫に曇る窓硝子を掌で撫でると其處へ盆大の自然がご機嫌を伺つては行く。簑笠の漁師が網を打つてる木曾川も過ぎる。菜種の花が既に實になつた畑も走過する。たまには汽車も惡るくない。

□桑名着。又自動車に乘る。揖斐川口で車をとゞめ眺める。こゝまで熱田より『間遠の渡し』とて昔は七里の船路を越した。右に見える石垣は桑名の城跡、廣重の繪にはその上に失くなつた白壁が巍々として聳えてる。

□三瀧川の長橋を渡つて四日市に入る。晝飯にする。

桑名の燒蛤が喰へぬ腹癒せに蛤の時雨煮を喰つた

永治曰く『これは蛤一升に醤油一升で煮るんだぜ』『どうして知つてる？』永治『百科辭典に出てる』

二十五、石藥師——交通安全宣傳

庄野——豆腐の看板

□日永の永餅といふのを喰べる中に餡の入てる粘り氣の多い長方形扁平の餅。口で挾んで指で引つ張ると何處までも伸びて絲を牽く。成程日永の永餅だ。日永村といふのは四日市の少し先にある。チョイ〳〵と家並があつて又途絶へ又チョイ〳〵と家並があるから日永だ相な。

□出發。追分に來る。鳥居がありひなびた燈籠があり呑氣な字で『左いせ參宮道』と彫つた道しるべが建つてるやーとこせ、よいやなとこの儘左へ曲りお伊勢詣りを致し度くなる。

□『徒歩ならば杖突き坂を落馬かな』と芭蕉が馬から落ちて一句吐いた杖突き坂を自動車の尻を押して上る。泥濘。

□運轉手と助手が上方言葉で車の操縦の合圖をし合つてるのはどうしても文明の利器を扱つてるやうに聞えぬ。一寸こんな具合だ。

『オイ、一寸々々バックや〳〵。そこでお尻を一寸振つてお呉れんか、カーブ來とるんや、おいどうんと切つてそこでや、オーライまつすぐ、もう忘ゝ』

□石藥師着。古風な山門の掲示板に遺教經をひいて交通安全の宣傳がしてある。釋迦も宣傳のお手傳ひ。寺は悉皆新綠に包まれてる。本尊石佛の藥師。堂内暗くて見

えぬ。廊に石で彫つた弘法大師が澤山奉納してある。

□庄野の出口に見附の跡の石垣が殘つてる。豆腐屋に四角い豆腐なりの看板がぶら下つてるのもひなびて居る。

二十六、龜山——三本松、俥や、鹽や、料理屋關——伊勢詣りの一團

□庄野より十町許り東には『おこん茶屋』といふのが昔あつた近鄕第一の美人にして貞淑の譽れ高かつた女が出した茶屋だから大變繁昌した。今はおこんが酌んだ井戸だといふのが畑の中に殘つてる。井戸なんか見たつてつまらぬ。

□雨の中を疾走する。勢ひで兩側へ水溜りの水をはね飛ばす。若い運轉手は『水雷艇ぢやい』といつて尙もスピードかける。

□龜山につく三本松の名松がある。古い松が三本、街道筋に並んでる三軒の家の軒を破つて幹を出してるのだ。一軒は俥屋で松の根方に俥が二臺置いてある。次の一軒は鹽屋。次の一軒は料理屋で二階に客が酒を飲んでる。

□仇討で覺えてる龜山の城趾を仰ぎ乍ら壕の周圍を迂廻して行く。石垣の上に城の一部が少し許り寂然と遺つて居る。之に對照して周圍の桑畑には雨に桑が實に素晴らしい生氣を吐いて居る。玩具の風車をつけた日章旗が一本すつくとその中に立つてる。

□濁流の上の鈴鹿川の橋を渡る。黃昏の頃に關の町につきかゝる。

□見ると關の町の入口の小萬の由緒ある松の邊に伊勢詣りの一團が雨に濡れて佇んでる。飛白の揃ひに絲經菅笠の女連を中堅に背流の籠を擔ぎ出したものもある監督の男は刀をさし丁髷の鬘を冠つてる。われ等の自動車を見るや群り寄つて引き止め。『伊勢は津で持つ津は伊勢で——サ、ヤアトコセーヨイヤナ、——』これ何ぞや。

二十七、關——小マンの墓

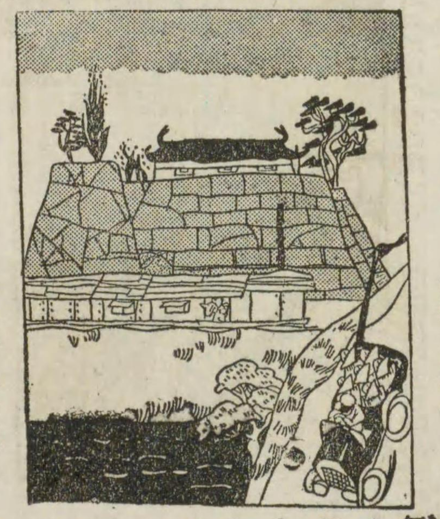
□これは關の有志の歡迎振りであつた。籠屋はその昔眞當に籠屋をやつた老人を引き出して我れ等に籠を勸めさせた。

□宿屋へ着く。燻んだ古驛の感じがする。夜、町の名譽職を招んで宴會を開く。凸凹になつて濕つた疊に牙えぬ太鼓や三味の音がボコボコ響く。旅愁に似た心が酒間に搖曳する。

□此處は亮英の故鄕に近い土地とて知己の杯を献酬しに來る客が多い。服部硬くなつて『その御方は存じませんが御目にかかつたら存ぢるかも知れません』等と云つて居る。自分の方を『存ぢるかも知れません』と云ふ日本語はないぞ。

□翌日雨、桐油を着て出發。昨日のヤアトコセ連が復た送りに出る。今朝の歌は斯う云ふのである。

紅葉の樣な手をついて（ヨイヨイ）左樣なら皆さん御機嫌宜敷う、御靜かに。復た來年の來春も（ドッコイ）私が居るやら居ないやら（ヨイヨイ）あなたが來るやら來ないやら。思へば涙が（ヨーオイ）御連中さん先に立つ、ホンマカ、ヤートコセ、ヨーイヤナアリヤリヤ、コレワイナ、サーヨーイトナ。



□紅葉の樣な手をついてと云ふがどれもこれも八つ手の樣な手をして居る。

□小マンの墓見物。福藏寺と云ふ寺の中にある。佛の姿の浮彫りになつた石が、生えた草花に根元を蔽はれ

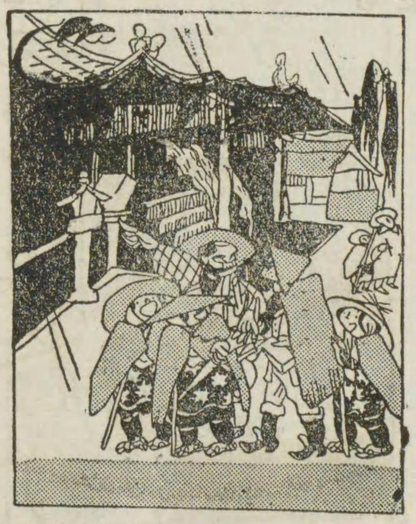
て居る。『關の小マンが米かす背は一里聞えて二里響く』爾かく彼女は力のある女だつた。『馬が物云ふた鈴鹿の坂で小マン女郎なら乘しよと云た』爾かく彼女は美人でもあつた。『關の小マンが鼈山通ひ月に雪駄が二十五足』爾かく熱心に彼女は劍術を習つた。何の爲めに。親の仇を打たんがために。

二十八、坂の下——立戻つて惡巫山戯

上山——戸締附金看板

□關の地藏さんへ參詣。內陣へ導かれ香具花立の間からお顏を拜む。本當の石の地藏さん、濡れたようにしつとり落付いた石の肌質の色がどんなに地藏さんの柔和な光を現す助けになつて居るか知れぬ

□溪川に沿うて自動車は走る。溪を距てゝ右手に一寸した岩山。弘法筆捨山といふげな。



□鈴鹿峠にさしかゝる手前、坂の下で伸と別れる。ヤートコセ連にも分れる、殘り惜しげな連中は又立戻り後から巫山戯かゝつたり中々峠へ向はぬ。

少し登つた處に片山神社がある。建物は延喜式そうな。

『坂は照る〳〵鈴鹿は曇る間の土山雨が降る』

謠で敎へられてる鈴鹿は可成り險惡な山路らしいが、實際はそうたいした事は無い。直ぐ越して平地へ出る。

□でも流石、汗が出てる。茶屋が欲しい所に一向茶屋が無いから前川千帆の駄酒落『茶屋が無いからこれが本當の無茶や』

□猪の鼻坂、古木欝着たる田村神社がある。かゝて土山。

具合の惡るい後の自動車を待合す爲め、土山の藥屋の前に駐車。そこには中風藥と書いた金看板が建つてる。屋根あり。戸が覆はれるやうになつて古風の看板この古風に並んで仁丹のブリキの看板も並んでる。

二十九、水口——腕車に嫁

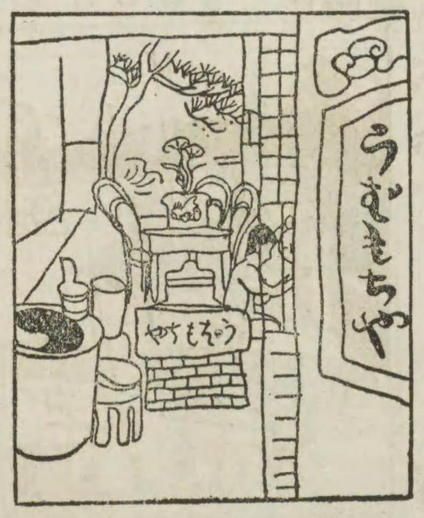
石部——酒屋の門に杉の玉

草津——姥餅屋の金魚鉢

□出發。田の中の道へ出る。麥が雨風で寢てる。田の緣に手製の小さい風車を案山子ようにに立てる。

□水無口は一寸賑かな町並、俥で田舍のお嫁さん角かくしをしてるを珍らしく見て通り過ぐれば頓て横田橋、橋の袂の高燈籠が繪になる。

□河が堤の上を高く流れてるので通り道は河の下を隧道を明けて往來してる。次は石部。これも相應な町。



酒屋の目印に今なほ杉の玉を軒先に出してる。

□車行につれ近江富士がいろ〳〵の姿に變つて見參に及ぶ、

それに一時袂別て町へ入るところが草津驛、名物姥が餅屋で休憩。

廣い雄大な土間に拭き磨かれた茶釜がかゝつてる。姥餅屋も開化して奧に洋風卓子を据へギヤマンの金魚鉢が載つてる、色硝子の障子が異國趣味を帶びてる。中庭を距てゝ向ふの座敷が昔大名が休んだ部屋そうな。姥ケ餅は他奇なし

□再び近江富士に遇ふ。このあたり赭い土に藁を澤山刻み込んだ家の壁に柿若葉うつりよし。

湖水の鏡が近くなつて來た。湖水を越へて比良も比叡も雲霧の裏。

□ガタ〳〵〳〵ド、、、、、と橋桁ホ欄干も古りて曲

れる瀬田の唐橋にさしかゝる、三度び平遠法中の近江富士に邂逅。

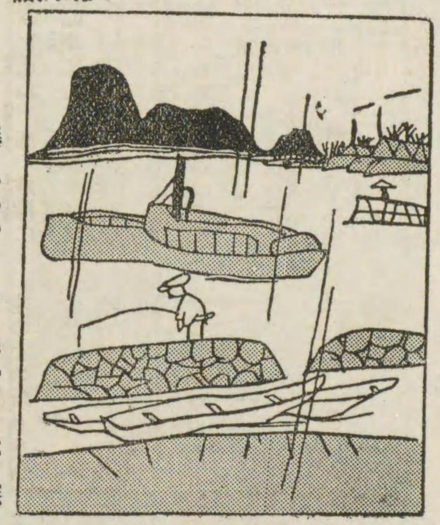
三十、大津——防波提上の釣人

京——三條大橋上で寫眞撮影、壬生狂言見物

□粟津の疎らな松並木を通る。膳所は紫雲英の花盛り豆の花の花盛り、その畑を緣どる蘆狄の根には既にひた〳〵と琵琶湖の波が寄せ親しむのであつた。

□大津着、魚善樓でひるめし。元氣を恢復して京に入らうといふのだからしばらく休む。石山寺へ大部分は行く、二度も參詣してるから予は噴水の魚槽に活けてある、鰻やもろこを眺めて遊ぶ。

座敷より湖水の眺望も長閑だ。小雨の中を蓑も冠らず防波堤の上で紳士が釣りを垂れてる。あまり熱心そうにないところが一層長閑だ。



□驀直に京へ入つた、久し振りで看る都會の人の顏は眼玉がギヨロ〳〵してる。こちらの異樣な行裝を見て小僧が杉の皮を積んだ小車のひつくらかへつてるのを放却して呆氣に取られてこつちを見てる。

□三條大橋へ目出度く到着。みなさんお目出度う厶つた。橋の上に自動車を並べその前へ一行横隊に並び待構へてた新聞の寫眞班に思ひ存分撮らせる。それを『けつたいな連中』と思つたか、通行の大原女、舞子なぞが怪訝な顏をして佇立し、しげしげと見入る。例の形の笠を冠つてるので少しきまりが悪い。

附

□一たん澤女旅館に落付き、湯に入つたりしてそれから佐阿彌の招待會に臨む。招んだ客は多く藝術家なので氣が張りもすれば又一方親しみも覺える。料理がうまい。

□京都方への示威運動に一同裸體で大井川の連臺渡しの眞似をやる。今度は更にお慰みを重ね幸内の殿樣を河の人足共が酒手を强請り、聽かれぬ事にして殿樣を河の中へ振り落さうとする趣向をしたら、幸内が柔道初段の腕前を見せて見事蓮臺から轉げ落ちると引受けた。が實地に當るとどうも端からは危なくて馬子達は殿樣を突き落しといて直に途中で抱き留めて仕舞つた。

□服部がラオコン踊りをやる。女性のお客上村松園ともう一人若い閨秀畫家に遠慮して服部に褌を取る事だけは保留して置いて貰つたが踊り中、二女史共まともに見入つて瞬一つせぬのは流石モデルに慣れてる人達だけあると感心してる奴がある。

□くたびれてぐつすり寢る。西京の正午の汽笛、牛の鳴くようなのを聞いてそれからそろ〳〵京見物に出かける。

□本願寺へお詣りして內陣のお賽錢の上に座つて合掌念佛。それから鶴屋で一行の會計監督の招待宴がある。

□壬生寺の近所へ自動車着け壬生狂言見物。境內、壬生の面の玩具を賣つてる店が賑かだ。切りにデンカン〳〵といふ音、壬生狂言は總て鳴物はこのデンカンだけで調子を取るのだ。狂言は二十五坐を稍上品にしたような無言劇。坊主が女を圍つてるところへ人が訪ねて來る可笑味をやつた。

琵琶湖めぐり

一、知事公の料簡

滋賀縣の知事の森正隆君から案内を受けて都下各新聞記者大ぜいと名士少々とが琵琶湖見物に連れて行かれた。周遊三日の間森知事は嬉しさに先頭に立ち恰も近江八景を自分の骨折で出來た樣な顏をして說明し歩いたこつちは又釣り込まれて切りに八景の出來榮えを知事に向つて褒めて居た曰く『嘸お骨折でしたらう。』

二、石山寺（その一）

石山寺は名の如く岩石だらけの山だ。本堂の前の庭にもとろ〳〵書に墨を塗つた樣な岩が澤山重なつてる。その岩には所嫌はず小さな紙片が結び付けられてある。仕舞には結び付ける餘地を見出し兼ね岩の上に竿を立てた儘紙片を結び付けたがつてる、其痕歷々たり。この紙片を片手で結び終ふせたものは自由に思ふ男、女を得られるといふ言ひ傳へがある。それでみんながこんなに紙片を結び付けたがつてる。

三、石山寺（その二）

上の方の書は紫式部のつもりになつて彼女が籠つたといふ石山寺の源氏の間から先方を覗いて見た景色だ。平凡のわれわれには源氏物語が書き度くなる程のいゝ景色とも思へぬが、もつとも當時は眼を遮る楓の木がなくて金勝山を出る十五夜の月まん〳〵と湖水の水に映つたといふ。下の四角いのは紫式部が源氏物語を書くに使つた硯だ相な。大きさは縱六寸二分横八寸四分ある。硯の池に一方は牛一方は鯉が浮彫になつてゐるのはどういふ譯だ。喰つちや樂寢する事と戀する事とこの女らしい紫式部の理想を現したものかな。俗では牛の方で淡墨、鯉の方で濃墨を遣つたと云ひ傳へてる。

琵琶湖めぐり

四、石山寺（その三）

蓮如上人のお袋はこの石山觀世音の化身だ相な。末法相應の法門を弘通せさせん爲め上人を生んだ。上人が布袋丸と名付くる六歲の曉、もうよからうと觀音さんはお袋をやめて元に還つて仕舞つた。その時『戀しくは尋ねきてみよ唐橋の

石立つ山は母の古里』と云ふ歌を詠みそれから布袋丸の鹿の子の片袖と、彼の影像とを持つて行つた。本堂の傍の別な建物で此兩方の遺物を拜ませて呉れる。御影と稱して厨子の中に入つて居る。その垂幕を上げる時は周圍をわざと暗くして説明の坊主は如何にお有難く拜ませるべきかに腐心して鐘を叩いたり鼻をグウ〳〵鳴らしたり、緣起の卷物に非常な節を付けて讀む。紅かつた鹿の子の片袖は今箱の金網の中に白つちやけて居る。『上人樣ご苦勞のお珠數を頂かして上げまつせ』と次に皆の頭へ頂かせて呉れる。お珠數を頂く時の第一の所感は『上人の珠數なんていゝ加減なもんだらう』といふのであつた。かういふ了簡だからわれ等未だに凡夫でムる。

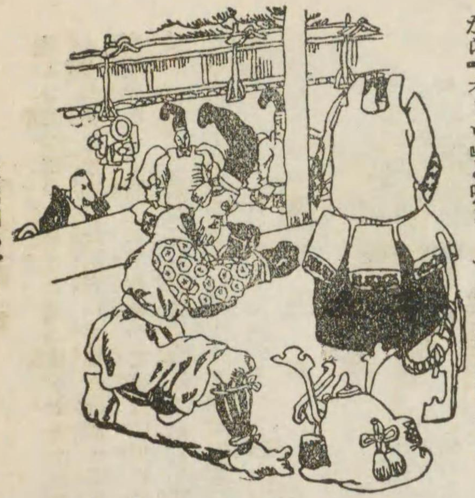
五、洗堰

南鄕の洗堰といふに連て行かれる。人間の平仄より推して琵琶湖から淀川への排水は之で十分手加減が出來ると考へて居た。處が自然の平仄には少し許り違つて居た。若し强て双方の平仄を合せやうとする時ンば、今度は知事公の首の平仄が合はなくなつた。森知事は此堰を『知事の首切臺』と命々して委細を紹介した。首切臺の欄干には肩に竹筒の餌容れを下げ風流なはす釣りが纖細な釣竿を無關心に上下して居る。長閑である。われ等をして首切臺の話しに沒頭せしむべくそれがあまりに長閑である。

六、着甲式

觀光船は阪本へ着いた。傳敎大師がその種を唐から持つて來て植ゑてから既に千年餘になるといふ茶の木を見せた。幹の周圍が約四尺に高さが九尺ある。葉を摘んで嗅いで見たら千年經つてもちやんと茶の香がして居た。

日吉神社は尊い。拜殿にて神道無念流劍士、眞之神道流柔道士、日置流弓術師範の肩書を持つ六十六の老爺さんが甲州流出陣着甲式といふをやつて見せる。これはこの神社の祭禮に屹度やる胄を着て見せる式だ。家の子郎等のつもりで、村長や縣會議員などが赤い着物や黃い着物を着て廻廊に鹿爪らしく控へる。甲州流の老爺さんは中央へ出で恭しく一禮致すや其處い等に陳んでる鎧や甲や刀やを急いでみんな着て仕舞ひ、一つ威張つて途に巖谷小波のおぢさんと自動車へ一緒に乘つた。するとおぢさんは耳へ口を寄せて『僕はあの着甲式を後から見て居たがあの老爺は確に半きん拂だつたぜ』といつた小波のおぢさんも稀には敎育にならぬ事を敎へて呉る。



琵琶湖めぐり

七、高穴穗宮趾

延曆寺より唐崎の松へ出る道の途中に穴穗神社といふ小さなお宮がある、景行成務仲哀三帝六十四年間奠都の宮址だ相である、何となく神々しい。少し山手へ入ると仲哀天皇產湯池赤井水といふのがある、一層神々しい。この樣な尊い所を村社位に致して置くは勿體

ないと論ずる人が澤山ある。道伴になつた百姓のおやぢが、われ等を新聞稼業のものと見て、御所の森で發掘した劍があるから新聞へ書いて呉れと家へ取りに行つた。われ等が拜殿へ戻つて由緒ある名物のあは羊羹や蕎麥羊羹を頻張つて居れど未だやつて來ない。そのうち發足の時間が來たから自動車に乘つて仕舞つた。自動車がこの邊を通るのは初めてだ相だ。驚かぬやう沿道の牛は悉く柿の木へ鼻を縛られてゐる。しばらくすると、先のおやぢが箱を片手に追つて來た。自動車は遠慮なく走る。流石舊都の民も頓て人の足は自動車に及ばぬ事を覺つて漸くに引返した。

八、唐崎の松

今度は唐崎の松を見せて呉れる。第一驚くのは枝に支柱の多い事だ。總計三百六十何本とかある相だ。幹は弱つて處々に膏藥が貼つてある。松自身にしてみれば大袈裟の處で御免を蒙りたかつたらう。夫を人が横枝の先へもつて行つて支柱を重ねるものだから、不本意乍ら東西四十間南北五十間といふ畸形に伸びて仕舞つた。少くともこゝでは唐崎の松よりも唐崎の柱の方に意志を認める。こゝから琵琶湖の眺望は又格別。傍に歌詠みの土岐哀果が居た故試みに同感を求めた。すると彼は『全く自然とさゝ波やと云ひ度くなる景色だなア。こゝへ來て始めて枕詞の價値が判る』といつた。われ等は歌の字が足り無い場所へ埋草に使ふ文字が所謂枕詞と解して居たがさう云はれゝばさうだ。

九、辨慶の汁鍋

三井寺に連れて行かれた。寺の什物にて有名なる應擧のスツナソ、スツフク之圖を見せて呉れる。此は米澤訛りの森知事が發音するからスツナンスツフクだがちやんと標準語に直せば七難七福の圖だ。世相の幸福の方面と災禍の方面とを二卷の繪卷物に描き分てある。七難の方は生血の色を使つたり裸の女を配したり飽まで觀者を怖がらせようとする魂膽が見え透いて嫌だ。七福の方が應擧らしくてよい。三井寺には外にべら棒なものが二つある。辨慶の引摺鐘と辨慶の汁鍋だ。鐘の方を説明するおやぢは京阪地方では誰知らぬものは無い説明者としての天才だ。成らう事ならこのおやぢを保護建築物に加へ度いと論ずる人がある。鍋の方は遺憾乍ら凡才だ。鍋の大きさは周圍一丈五尺九寸直徑五尺三寸ある。

琵琶湖めぐり

十、源兵衛の閼伽

三井寺の下の兩願寺に源兵衛の閼伽といふのがある。そもゝ蓮如上人の御世に堅田の浦に源右衛門といふ漁夫

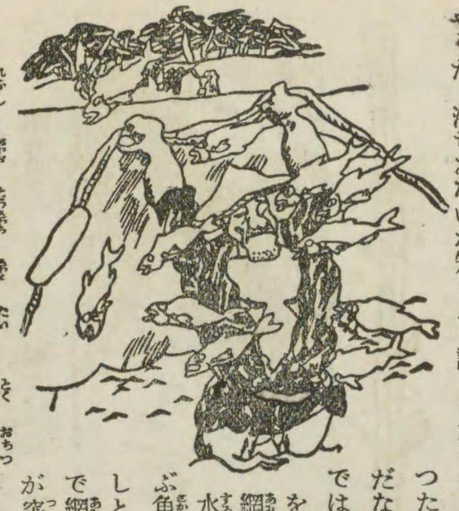
があつた。上人に歸依致し無二の信者だ。文明三年事情あつて上人は祖師の御影を三井寺に預けて廻國致される。同じき十二年に山科、本願寺を御建立の際かの御影の返却を乞はれた。然るに三井寺では生首二つ持つて來ねば返してやらぬとの難題源右衞門はその時伴の源兵衞の首を打落し三井寺へ持つて行つた人だ。そして自分の首も打落して合せて二つ確に受取つて呉れと云つた。三井寺は感心して他意無く御影を返した。上人の歌に曰くあひがたき教へを受けて渴仰のかうべはこゝに殘りこそすれ。兩願寺は源右衞門の像と源兵衞の髑髏とを納めた所だ。説明者は更に髑髏を裏返して斯く附加へた。『源右衞門は漁師ですから首なぞ切り慣れない。其處でつい手元が狂つて頭へ切込んだ。其痕が其だといふ風にちやんと殘つて居ります』

十一、ゑり搔き

あくる日は竹生島丸といふに乘せられた。料理道具やコックが支度されてある、草花で欄干を飾つた白い色の遊覽船に乘つてさゝ波や中を滑つて行く時の氣持ちはお大名の樣だ。ゑりといふので魚を漁るところを見せて呉れる。これは湖中にくるくるつと芦簾を立て廻し其處等の魚が一遍中へ入つたが最後仕舞ひの圍みの中へ迄どうしても迷ひ行かねばならぬ仕組みに出來上つて居る。舟を最後の圍みのところに着けその中を手網で掬ふと鮒、鯉、モロコ、イサザ、ハス、ヒガイが面白い樣に漁れる。一番最後の手網には三尺以上の大鯉が漁れた。其處で名士連は『搔きあぐる鯉三尺や青嵐』など平和に興がつて居る。新聞稼業のものはさう正直には行かぬ。職掌柄第六感を働かして初めから入れといたんだらう、いやそうぢやないの議論に一花咲かせたが、然しそれでは餘り琵琶湖を信用しなさ過ぎるといふ說同情者多く漸く無條件でこの大鯉を讃美致す事になつた。

十二、近江舞子

船を雄松といふ處へつけた。本當の青松白砂が長く續いてる。海のやうだ。海ぢあないか知らん。試しに水を掬めて見たら矢つ張り淡かつた。土地の人は近江舞子だなどゝ自慢してる。此處でははす網を揚げてわれ等を魂消さす計畫らしい。網は段々揚がつて來た。水上を高く縱橫無盡に飛ぶ魚がある。これがはすだ相だ。馬鹿に威勢のいゝ魚だな。この儘にしとけば一匹殘らず出て仕舞ふに極つてる。漁師の爺が矢庭に飛込んで網を持上げた。今度は漁師の顏と云はず胸と云はず腹と云はずはすが突付く。われ等は計畫通り魂消させられて思はずワーイと聲を揚げた。漁師の爺は東京の客に對して特に落付いて見せた。そしてこんな魚は琵琶湖の屑だと云つた風な顯揚さを示すべくいつまでもくはすの突付くに任せた。



十三、沖膾

下甲板からいゝ香がして來る。小便に下りた序に覗くといよう——山々のご馳走が支度最中だ。固唾をのんで待

つ間程無く運ばれて來た。酢にしたり天ぷらにしたり勝手氣儘だ。就中先程の三尺鯉は身體をあらひに頭は鯉こくに首足その處を異にした。鯉の頭を背り乍ら心に思ふやうは、この鯉もかのゑりの猾討にかゝつて最後の手網で掬はれる迄は迷宮の中を散々迷つた事であらう。恐らくは神經衰弱になつてるだらう。可愛想だ。こゝまで考へて自分は名士もすなる俳句といふものを吐き度くなつたこんな事は云はぬ。笹川臨風氏の句に『沖膾やつたこれを人道主義の俳句と稱す。翻つて名士の俳句を聽くと江州富士の日和かな』云々。（圖は多景島の景）

十四、竹生島

觀光船は多景島を一匝した。島端の大石に南無妙法蓮華經と彫つてあつた。沖の白石といふ處を船が通ると水鳥がむらゝゝと立つた。何處を見ても靜な湖中にこの鳥だけが動いて居るのか、東京へ歸つてからの話杉村楚人冠が訊くには『琵琶湖の中で君、仰山、鳥が立つ處があらうが』と。勿論この沖の白石の事である。沖の白石の水鳥はあの口八釜し屋にさへちやんと飛びたつて見せた。詩歌で偲ぶ竹生島は可憐な島だが行つた實際は石段が澤山あつて息が切れる島であり膝が痛くなる島でもある。も一つおまけに寶物の拜觀を強ひられる島である。役の行者の所持した根元二股竹といふのがある。これは行者の竹杖が此島の將來佛法興隆の有緣地なるを啓示する爲め一夜にして斯く變化したものだ。此の島からわれ等の好意に竹根のステッキを與れた念の爲め『これは變化しませんかしら』と訊くと寺僧嚴かなる聲して『ご信心次第ですぞ』と叱られた。

十五、長濱

船は長濱へつく。町會の決議で花火を三發擧げて與れた。八幡神社へ行く途中に曳山といふのが飾つてある。お祭りの時に子供に芝居をさせる出車だ。昔からこんな贅澤な出車を町々で一つ宛都合十二本を持ち傳へて居る長濱は見かけより○を持つてるに違ひない。總體に支那か朝鮮臭い作りの曳山の後へ持つて行つて白耳義あたりの作と覺しきゴブラン織が垂らしてあるのは一奇だ。名士組の若宮卯之助氏が飾りの總の水晶を切りに弄つて居る。若宮氏は文明評論家といふのだ想だ。晴天の東京を出る時から足駄を穿いてる。訝くと『傘は何處でも間に合はされますが足駄は一寸さう行きません』と。成程。それから序に『貴君でも景色が面白うムいますか』と訝くと『面白くありません』と斷つて『自然は大觀すると何處も同じ樣なものです、たゞ細部だけが少し宛違つて居ります』と註釋を加へた。琵琶湖も文明批評家に見られたら、から、もう、だらしがねえのさ。

十六、彦根

その他に長濱で覺えて居るのは大通寺（大谷派別院）の八間の襖に續けて梅の大木を描き飛ばした岸駒の筆力と、同じ寺の門に太閤が出世前の長濱城門を使用してあるその門は馬が三頭並んでは自由に通れ

ない程の小さいものであることゝだ。船は彦根へついた。お城へ案内される。城山の頂きに天主閣が殘つて居る。見渡せば湖とは反對の側に萬頃の田を越して一うねりの山脈が走つてる。一寸平な處が見ゆるは佐和山の城址ださうな。東海道を琵琶湖畔で扼するには石田三成は佐和山が好いと思つたし井伊直勝は彦根が好いと思つた。劣は別とし石田さんも井伊さんもこんないゝ景色の中に居乍ら尚且戰征伐の事を考へなけりやならん運命の下に生れたのは可哀想だ。それよりか彦根の町外れより湖を瞰下するこつちの景色が心を痛めなくていゝ。古人ならばさしづめ鹽川文鱗さんに描かせたい。今の栖鳳さんに描いて貰へば尺八にして千五百圓位の景色だ。

十七、お多賀詣り

彦根へ一晩泊めて呉れた。あくる日は多賀神社へ詣る。多賀は諸册二尊を祀つてある。『お伊勢詣ればお多賀へ詣れ……』とある俗謠通りこのお詣りは兩社何れを缺かしてもならぬ習慣だ。社に齋き奉る形に兩側町が並んでる。家々に滅法大きな飯杓子が陳べてある。長壽の呪になる。神主が眞面目な顏して『皆さんはお玉杓子をご存じかな』と訊いた。この辭になつてお玉杓子を知らぬ唐變木は無えぞ。少しムッとして『お玉杓子は蛙の子でしよう』と答へる。すると『そのお玉杓子の名はな、こゝのお多賀杓子から訛つたものです』といつた。社務所で山樂の描いた太閤の像を見た。可なりお世辭の無い所を描いてる。神樂殿で巫子がお神樂をあげてる。神の眼からはいざ知らず、われ等凡夫には劍の舞をやつた女が一番いゝ女に見えた。

十八、安土城址

院線の安土驛で下りる。佐々木神社に淨嚴寺を見て安土城址に行く。截つ立つた山で登り惡い。ポッ〳〵狹い平地の跡が見える。秀吉や家康が信長の家來時代の館跡だ。險しい岨を傳り湖の方へ出た八角平は菅谷九右衞門が館の跡ださうな。菅谷九右衞門は本丸でご酒を頂いた晩なぞは四ッん蒲いにならねばこの難路を家へ辿り付け無い。大津へ歸りその晩知事公の慰勞會。縣下の重な人が三列にも四列にも並んで坐つた。贅澤をいふ樣だが膳の上の川魚料理にうんざりした。いくら名物だつて鮒の子付け膾を日に二度蜆汁を日に三遍食つたのだからモウ勘忍して呉れ。われ等は何故琵琶湖で豚カツレツやビフテキが漁れて呉れ無いのかとつく〳〵思つた。場慣れのして居る田山花袋氏はつい合せの靑唐辛子許を酒の肴にしてチビ〳〵やつてる。

善光寺詣り

一、傾いて蕎麥を食ふ

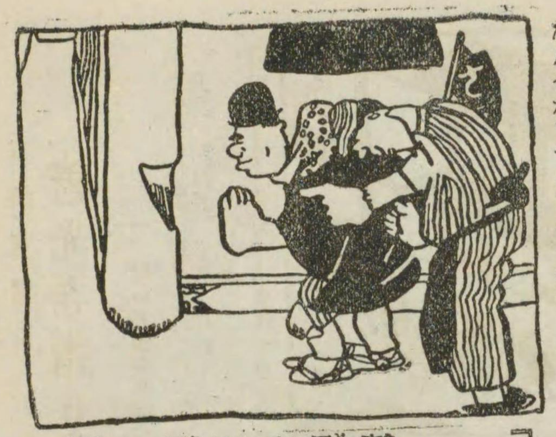
長野の町は長い坂の上に建て連ねられてる。坂の突當りが善光寺、坂の取つかゝりが長野のステーション。傾斜の上に建てられた家並は自然傾かざるを得ない。長野の人は永劫この傾いだ家の中に在つて矢張傾いで蕎麥を食ひ、稽古三味線を彈き、按摩に肩を揉ましてる。

二、氷滑りも法の光

善光寺境内の結氷した蓮池に子供が集つて氷滑をやつてる。中坊主が來て強引に子供から氷滑下駄を借受け滑つてる。

三、柱の傷あと

本堂左方端に舊幕時代の地震によつて上に釣つてある鐘が落ち當りゑぐれた傷跡のある柱を指し案内者『ご覽じろこの傷あとの具合と寸法と鐘の重さなどを大正の學力で調べると百年も前の地震の強さや搖れて來た方角なんぞがちやんとこう判るでげすからなア』といふを聞いた老爺感心して『フウー、ナムアミ〳〵。』

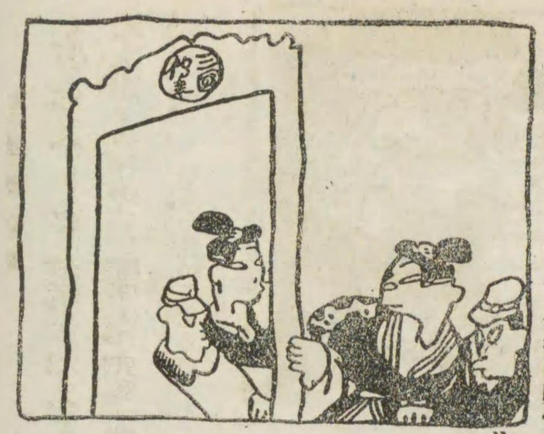


四、誘ひのお供餅

外陣の一隅にお賓頭盧さまがある疫除けの呪禁としてわれの痛所と同所を像の上に見出し其處を撫でた手を用ひて以て更にわが痛所の上に加へ平癒の祈願を凝念する事は世の常のお賓頭盧さまと同じ。お供餅がれが惡疫除けの呪禁となる。このお供餅いかな日でも斷えた事が無いのを案内者が像の功德の樣に云ふがその實無くなつた時にはお供餅屋がソッと來て上げろといふ催促のお供餅を澤山置いて行く。

五、照覽境

同じく外陣に三國傳來と銘打つて一大玻璃鏡が鹿爪らしく置いてある。罪業深きものは鬼に映ると案内者に嚇されて、善男善女達に眞正面に映して見る程の勇者は無い。見合ひに出た時の樣な森嚴な顏をして端からそろ〳〵ないしくづしに映し出して見。最後に映像は矢つ張り自分の顏なのに安心して始めてニヤリ。



六、後生定めの錠

瑠璃壇下、堂の緣の下に迂曲した闇黑の路が作つてあつてそれを廻るを戒壇めぐりといひ放僻邪私の人は入りて再び出るを得ぬと又案内者に嚇される。戒壇草履といふを買つて入る。この草履は後で持ち歸つて何かの呪禁となる。闇黑の隧道の中頃と覺しく右壁に一個の錠がある。手探りに探り當てた人は後世安樂受合なりといふ。案内者嗟嘆して曰く『この頃懷中電燈を持込んで探す奴があるので困ります』と

七、極樂の風

も少し先へ行くと壁に茶碗大の穴が穿たれあり冷風が通ふ、極樂から吹く風だ相だ。して見ると極樂は可成寒い處か。煎餅の空袋を持參に及び念佛を唱へ乍らこの風を詰めて居る婆さんがゐる。訊くと『へえ、持つて歸つてお風を孫共に吹きかけてやるでや。』

八、除幕されぬ銅像

境内に仁王門を獨力で再建したN田H太郎君の銅像がある。N田君は信濃國一圓に鳴り響いた高利貸、夜は猛獸の檻の樣な中に入つて眠るといふ程爾く他より恨みを買ふ迄にして彼の巨財を得た。一旦豁然として悔悟し貯蓄の膏血を淨財に投じた爲め、善光寺保存會が感心してこの銅像を建てたがN田君の篤志は永く續かず又ぞろ毒手を弄し始めたので保存會が嫌氣をさし、古幕を冠せた儘うつちやらかしてある。

九、川中島の客

參詣終ると詣者達は長野の町で遊ぶ。之等を總稱して川中島の客。要は田舍者といふの義。例の土産の戒壇草履やら死んだ時棺に納めて貰ふ白珠數などを座敷の一隅に置いて『佛の契あらたかに導く方は雪の肌、夕陽も何時か入相のいようがく山の鐘の聲、――法の燈の長野町よい〳〵〳〵よいやさ』

とまふ何處までもお有難い唄を聞かせて貰つて『ア、コリヤ〳〵浮いた〳〵。』

夢むらく

机に頬杖つき常に夢むらくは、一週間許り暇が出來、左手には菜の花右手には櫻の咲く山道を老鶯をきゝ乍ら駕籠にゆられて行き、湯があふれて居る溫泉宿に着くとそこは海近で鮮けき魚がピチ〳〵して膳の上にのぼる――。何處かそんなやうな溫泉場へ仕事から逃げ出して行き度い。と、

海の底へ

一、突ン棒の畫家

房州館山へ來た、此處には美術院の洋畫家倉田白洋君が居て、半漁半夫畫家の渴仰すべき生活を續けて居る筈だ見せて貰ひに寄る。唐もろこしの葉末に風わたる露路を突き當つて左側の家、畫室の鴨居に顏眞卿の眞蹟を主人自身が克明に臨寫した扁額が掲つてるその下で逢ふ。倉田君のやつてるのは石油發動機船に乘つて出るかじき鮪漁で、手鉆で突くゆゑこの漁法を突ン棒と稱して居る。生憎冬期中だけで今休みだ。紹介する譯にゆかぬ。その代り外房州千田で潛水器で鮑採りをやつてる知人が居る、これに連れて行つて君を一つ海の底へ入れて遣らう。と倉田君が妙な方へ力瘤を入れ始めた。それから夜が更けるも知らず倉田君が潛水器で入つた時の經驗談を、空氣の調節が拙いと水中でこんなに逆轉をするなぞと仕方迄して咄して聽かせた。

二、赤島の沖

翌朝、自働車や俥で七浦千田へ着いた。此處の漁業組合長小谷氏は倉田君の義兄に當る人、永年加州モントレーで採鮑事業をやつたとかで、言葉の房州訛りの間に正確なる發音の英語が混り座敷の床には森田恒友君の畫が描かれてあるといふ土地柄不相應の新人らしい。

潜水器は村の子弟の練習用に組合の事業として購入したもの、只今も恰度、赤島の沖に稽古に出てゐる筈一つ呼び返しませうと、案内して家の裏から出た。烈日を射返す貝殻の破片の多い畑を脱けて磯に至る途中には、相撲を取りたいやうな柔らかな芝草が敷き詰あり、元來は網干場だが今は放牧の場所になつてる。家賃八十圓位の借家の大きさの磯岩の上に攀ぢ登ると、既に海！ 黒ずまで藍色を凝らして澎湃する海。

『繋がれし牛の眼に映る浪がしら』

三、冷酷な金具の音

余等三名を移し取つた潜水器の船は頃合ひの沖に行くと櫓を揚げて仕舞ふ。波の揺蕩の儘なる船の横木に余の腰を据ゑさせて、禰惣えむ、次郎えむ、五えむ、これは船員達の名だ、總がゝりで潜水服を着させた。厚い毛糸のシャツと股引を二重に着けるから丁度芝居の鼠のやうになつた余を赤いゴムで出來た人型の服とよりは寧ろ氷枕に近いものゝ中へ無理に捻ぢ込む。痛い。胸の前後を螺線鋲で止める。金具の加減を見んとて眞鍮の螺線器で叩いて見る。最早、中身の人間を生物扱ひにせぬ冷酷な音がカン〈と響く、尚も胸の前後に六貫目の錘を掛ける三貫目の鉛の靴を穿かせる、しめて二十貫。かくて日本武尊のやうな服裝になつた余を七八本の赭黒い手は舷側より水中への梯子へ擡ぎ出した。兜を冠される前、半身潮に浸され乍ら余は覺悟を極めるべく情無い顔を擧げて周圍を見廻した、水平線が上つたり下つたりしてゐる。

四、紳經質になる

眞鍮の兜を篏る音カタピシン。もう外の咄聲は聞へぬ。同時に世界がゴーくと鳴り出した。是れは顏の周圍へ送り込まれる機械臭い空氣の出入だ。兜の上よりペタンくと叩くは『もう入れ』といふ合圖の信號。愈入らうとして余は念の爲め生綱の控手を透して見た。倉田君が握つてる。何でも四五年前の春の頃と記憶する、長谷川昇君の畫室開きに招れて醉餘の無茶苦茶に美術院の諸君と唾み合つた事がある。小杉未醒君とやつて倉田君の前へ來たらこの倉田君は肌を脱ぎかけて居た。もし倉田君にしてあの事をこの生綱で加減する氣があらば余は一と溜りもなくさらんばらんだ。こいつは考へものだと尙もよく見直すと倉田君は親切な地藏顏をして居た。で安心して下りて行つた。梯子が盡きる。手を放す。余は一寸沈んで空氣の調節が拙いので水面へぽこんと浮き上つて土左衞門のやうな形になつた。

五、逆に載つかる

兜の息の拔ける栓を頭で小突いて居ないと空氣を孕み過ぎて浮くと敎はつて居たで小突いた。スー、ブクくと云つて沈み出した。潮の搖蕩に左右され乍ら下つて行く身は煙火の人形の氣輕さだ。ふらりくと調子付き過れば間々逆になる。すると息の栓から海水が潛入して腹の上へ不氣味に流れる。一度なぞは、的切り機械が壞れたと思ひ『揚げて吳れくく』の合圖の綱を牽いた。とちつて居るから、生綱を牽かずに舳から垂れてる下りる便宜だけの細綱を牽いた。いくら牽いたとて舳が何を受付けるものか。この時上で次郎えむが水を覗いて『へへえ大將、ひつくらけへつたね。ま、も少し漬けとくべえ』と云つた相だ。底へ着いた。感じた事は、意外に明るい事。水が始終漂つてる事。山あり谷あり林ある事。手を振り足を振り操人形の素振で歩くと着い水に氣泡が騰る事サイダの海へ入つてゐるやう。打捨て置と耳の皷膜が痛くなる、で無性に息を呑む。ひよつと觀ると沓跡に擧がつた砂の濁りを覗つて黑鯛が寄つて來た。摑へやうと手を延ばすと身體が斜に浮いてその儘女の黑髮の如く閃めいてゐるかじめの林の空を越し向ふ山の頂上へ逆に載つかつちやつた、息の栓から又水がブクく。五分で揚げて吳れた。

安房上總

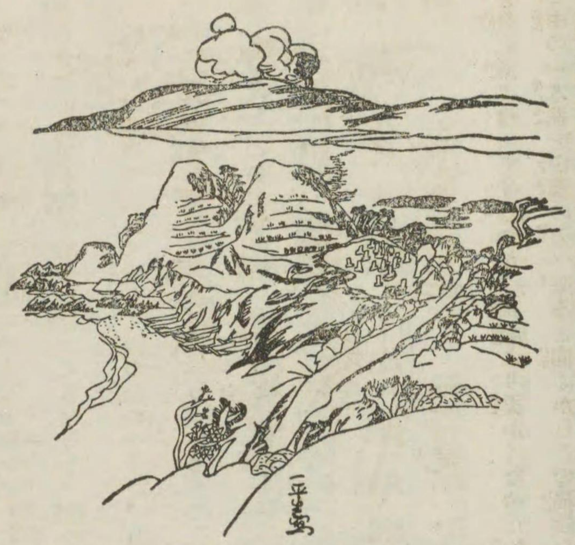
一、猫鮫

知つたか振りに海の底の咄をした、それぢや貴様はどの位の深さへ入つたかと聞かれるとお恥かしい次第である實は五尋だ。二十五尋位になると慣れねば身體が痺れる相だ。然し專門の潜水夫は平氣で半日位宛入り氣泡が一と所に擧がつて移らぬ時は沈沒船の檣に身體を縛り付け晝寢をして居る時だ相な。海の中で恐ろしいのは海馬に鰕魚に猫鮫だといふ。猫鮫一名榮螺わり此奴の居る近所には此奴が噛み潰した榮螺の殼が狼藉として居るからこの名あり。所がその上手が居る、名前を八五郎、齒が無い老人ゆゑ又の名バクさん。一日この猫鮫に内股噛み付かれたらその儘泳ぎ上り猫鮫を拷問の天ぷらを美味く喰つて拠組合長の家を出た。海沿ひの田

ぎ外し煮て喰つて仕舞つた。蒟蒻より柔かくなつた鮑の天ぷらを美味く喰つて拠組合長の家を出た。海沿ひの田の中の一本途を白濱の方へ來ると向ふからこの猫鮫を曳つぱつて來た漁師が居る。獰猛な顏色で遲蒔ながらゾッとした。根本の海岸より大島、伊豆七島が美女の黛の如く匂ふ。

二、布良

房州の中でも布良は特に房州らしい感じのする漁村だ。そのせいか此處は美術學生が愛してよく行く。畫に就いて説明する、岬に二つの丘がある左を女神、右を男神この間の處へ天富命が相模から渡つて來て最初の根據地を据えた。向ふに見えるが洲ノ崎の突出、彼此、兩つの鼻の間を鬼ヶ浦といつて牙のやうな岩礁が一ぱい海底に蟠まつて居る相な。出入危險ゆゑ難船多く、此處の鮪船の事をやんの船(決して出してやるなの義)或は後家繩と綽名している。晴れた日の事ゆえ鬼ヶ浦、布良瀬の赭黑い暗礁の上へ海潮、碧を流して海の中に小川の瀬の如き瀧を立てゝ居るのみこの快濶な海がそんなに後家を澤山拵へた海とはどうしても受取れなんだ。訛を唄つた俚謠を一つ御紹介。『いらかくしても布良ものは知れる、ねひやくねかんでねじねもん、』譯すると『いくら隱しても布良ものは知れる二百二貫で二十二文』



三、船形觀音

山の崖の中腹に細い小楊子のやうな支柱を便りに觀音堂が引かゝつてる。危險いものだ、あの中に住んでる觀音さまなぞは年中膽を冷やし切つてるだらう。崖の皺が面白い。生きて流れて激して波の線のやうだ。お堂の色の褪せた青と褪せた丹とが夢みるやうな靜けさを保つもよい。このお堂の構へを見ると、佛法も衆生濟度の爲めには可成りケレンを遣つてるのが判る。上へ乘つて眺むれば、眼は眩々する、凉しい鷹の島、沖の島を見据えるには相當膽力が要る。船形で名物の茂八の鮨といふのを食ひに寄つた、鮪が分厚である、それから握飯が、生揚のやうな厚い玉子燒きを背負て、これがヘイ玉子の鮨でムいと見參に及んだには二驚を吃した。

四、羅漢の首（日本寺の一）

鋸山の乾坤山日本寺、石の山を切り拓いた路を上つて行く。古雅な仁王門に大木が倒れ朽ちたまゝなのがある、日輪山月輪山瑠璃山の綠峰に圍まれて法堂がある。椽にエハガキ一しよに名物の四方竹といつて四角な竹の杖が列べてあるが買手が稀と見え黴が生えてる。通天關だの二天門だのと石のトンネルが處々にある。その間の路の傍には岩を穿つて佛像や高僧の像が澤山安置してある、或は護摩窟或は無漏窟或は日牌洞、因に從つて名前が違ふ。その他石が軟かくて刻み易いせいか無暗矢鱈と石像が置いてある。所謂五百羅漢だ。日露戰爭の際出征軍人がこの羅漢の首を除ねると敵の大將の首が獲れる呪になると て山へ詣つて皆な除ねて仕舞つた。近頃周章てゝ、首を拾ひ載せた事ゆえ、てんやわんやだ。それを笑ふ參詣の女も房州女と見え潮風に吹かれた手足の黑いのとコテ〳〵に塗つた白粉の顏と別々になつてた。

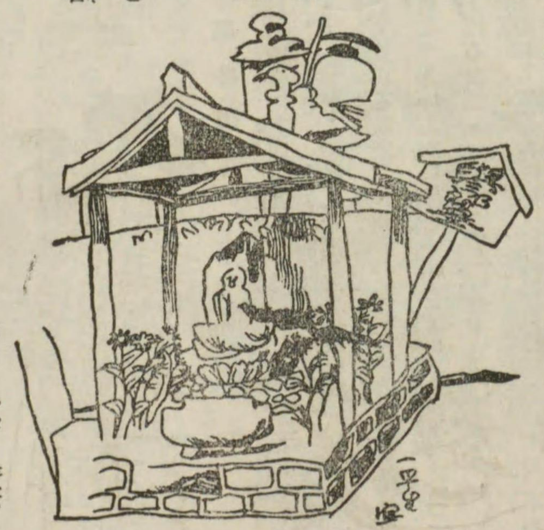
五、中止の大佛（日本寺の二）

不動の瀧の傍から十州一覽臺といふへ登れる。秋晴には完全に十國が見渡されるといふが今日でも可成遠見が利く。三浦半島が直ぐ眼の下に見える。半島を上から瞰下すと皺だらけだ。皺の裂の間に三崎だの浦賀だの横須賀だのがある。人間てい奴は皺の間に住み度がる奴だ。茅店の婆アが眺望をわがものにして説明する『朝早くお出でなさりやあ、立派に富士を見せてあげるだがねえ』といふ調子だ。十國より吹き集めて來る風が凉い、床几で晝寢をすると鼈の浪の音が絹漉にされて肌膚こまやかに耳へ通る。下り路に自然石で大佛を拵へかけたのがある。昔此處で拵へかけたら大佛は日本に三箇所の外許されぬとお上から叱られて中止したのだ相な。『大ぼとけと云へば許された相だね』と案内者今更殘念がる。今大佛樣は頭が草の五分刈になつてゐる。

大佛

六、與三と蝙蝠安の墓

切られ與三の墓と稱するのが木更津光妙寺内にある。寺で過去帳を調ると與三郎なる名前のものが文政七年に病死して居る、で、捜し出したのだ相だ。慈久行心靈六月十五日と文字のある圖の如き墓だ。眞僞の程を訊かれたら『左樣さね、まあねえ、エヘヽヽヘ』と答へて置かう。肥料富肥料、與三肥料と云ふ製造の名前の借賃だ相だ。撰擇寺といふのに蝙蝠安の墓がある。この方は『エヘヽ』でないらしい。蝙蝠安本名瀧さん、左の股に蝙蝠に三升が刺青してあつた、相當の財産を遣ひ潰し姉の隱宅に居候して居た芝居好きで遊藝は江戸の芝居の出語に賴まれる位、この瀧さんが酒癖あつて、姉の家で管を卷く具合がすつかり芝居がかりなのよりヒントを得て當時木更津に起つた與三事件を芝居に仕組む中へ江戸作者が一ト筆加へたのだ相な。瀧さんの墓は先祖代々合葬の墓で、進岳淨精信士、慶應四辰閏四月五日とあるのが瀧さんの戒名だ。子孫は今も相當にやつてる。與三は江戸の生藥やの息子で木更津の藍庄と云ふ親類へ遊びに來て居るうち遊藝の師匠のおとみと芝居に似たやうな事件を起した。



和歌の浦見物

一、言葉尻に駄斗

南海電車を降りて和歌の浦へ行くべく和歌山の町へ入つた。どうにも道筋が判らぬそこで向ふから來た子供連れのかみさんに訊くと『この道を行つてのし橋を渡つてのし左へ曲つてのし三つ目ののし――』驚いた事には總てのしづくめだ。

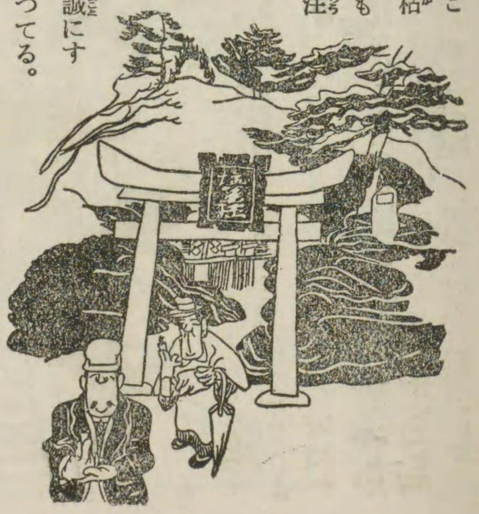
のお城下だけあつて言葉にも駄斗をつけて進ぜる。子供がお袋の手を引ぱつて、『早うのし行き度いのし』俥屋『廉う參りまほかのし』

二、紀三井寺

紀三井寺大門前の兩側に茶店が並んでる。石だん二百三十一と威嚇し新調ぞうりと誘惑した貼札を出して草履を賃貸し度がつてる。成る程急で高い石段だ。參詣者のおやぢ子供に『それ、おばゞの尻押してあげんかい』といふと子供二人得意になつて尻を押し上げるおばゝ一段毎に『孝行やゝソレ孝行やゝ』と褒言葉を力聲にして登つて行く。寺は只今普請中で材木や鉋屑の中に本堂、多寶塔等おはします。繪馬堂より和歌の浦を見渡せばよい景色の處へ、こうもしたらあゝもしたらと人智の工を加へて稍いゝ景色過ぎた傾がある。新和歌の浦の經營振りが亞米利加臭く遠望される。

三、下り松

妹背山といふ小さな島がある。賴宣卿の夫人養珠院が家康公追善の爲めに法華經の一字を一石に書した石數二十一萬を埋めた多寶塔がある。外側の海に面した崖に淨瑠璃の中の文句で有名な下り松がある。(或は東照宮前の松並木だといふ說もある)今枯れて居る。旅館の番頭が案內して此處へ來るとお客から屹度『こういふ名代の名木を枯らすといふ事があるもんか、けしからん、注意が惡いからぢや』と叱られる。すると番頭松を枯らしたのは自分の責任のやうに『ご尤もさんで、誠にすみません』とあやまつてる。



四、鹽竈樣の蠟燭

これも淨瑠璃「柳」の中のさわりの『三に下り松、四に鹽竈よ』で有名な名所、鹽竈神社は木目のやうな皺の入つてる岩山の窟の中に祭られてある。窟の口に垂れた御簾が潮風に鎖びてる。此所に上げてある蠟燭の燃えさしを貰つて歸り、お產の時に燃やすと安產の呪になるとてみなみな頂いて歸る。頂いて歸る男の顏を見ると何れも妻君孝行らしい處を鼻の下の長いのに現はして居る。

五、片男浪

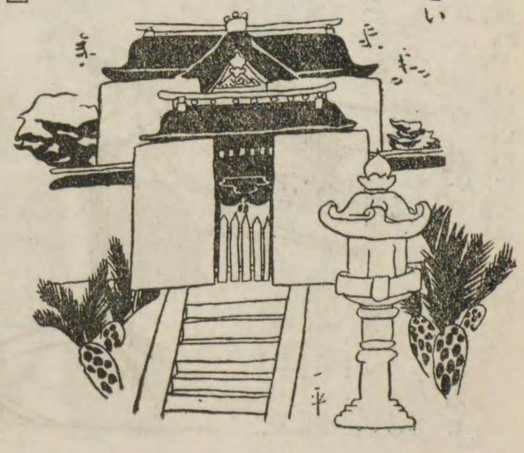
この平沙長汀は潮流の具合で打寄するのは男浪のみ、即ち片男浪だといふ説と赤人の『和歌の浦に潮みちくれば潟をなみ芦邊をさして田鶴なき渡る』の潟をなみは潟がなくなる、即ちこれだといふ説もあるが、兎に角今では平沙長汀の上に嚴重な防波堤が築かれて片男浪が打つかつては飛抹になつたりいびつになつたりして仕舞つてゐる。そこで若し赤人が今生きて居たなら

『和歌の浦に潮みちくれば防波堤芦も無いから田鶴なき渡れぬ』

と詠むであらう。圖は芦が無くて田鶴當惑してるところ。

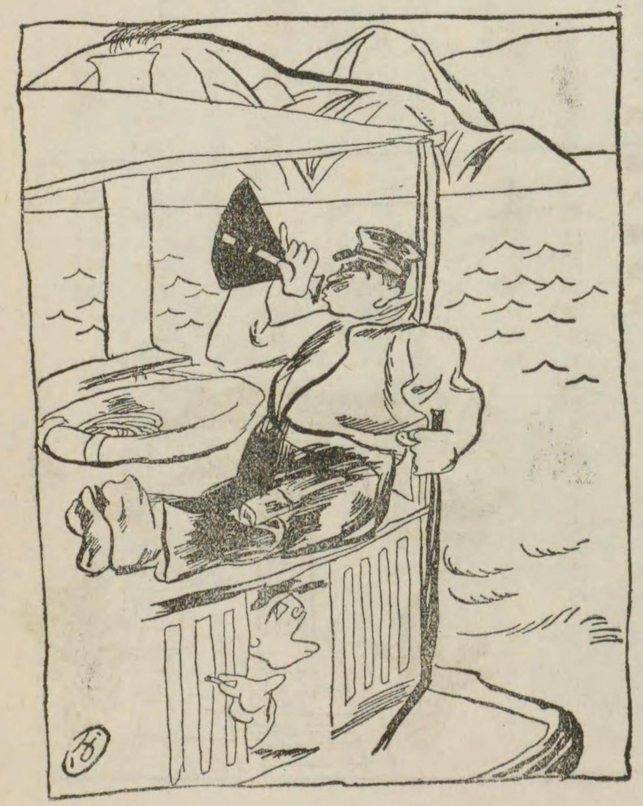
六、箱入東照宮

金碧燦爛たる東照宮は汚れないように美しい所を箱で圍つてある。箱入娘といふのがあるがこれは箱入東照宮だ。



濱名湖めぐり〔一〕

巡航船、東海道鷲津驛にて下車其處から出る巡航船に乘る。船は四十三人詰八浬の速力が出る石油發動機船である。午前八時四十分發時刻なので船長さんラッパをビーボー〳〵と吹き乘客を改め予に『何處へ行かズ、三ケ日（處の名）へ行かズ』と答ふ『ほんとに行かないのか行くのか』と聞いても行かズ〳〵といふ憤慨して降りかけると乘客中に物識りがあつて行かズのズは方言にて肯定の意、發音の調子にて問ひ掛けの意味にもなる、船は確に三ケ日へ行きますといつて呉れたので大笑ひとなつたが船長さんそれでも『だから行かズとはつきり言うたや』とまだやつてる。

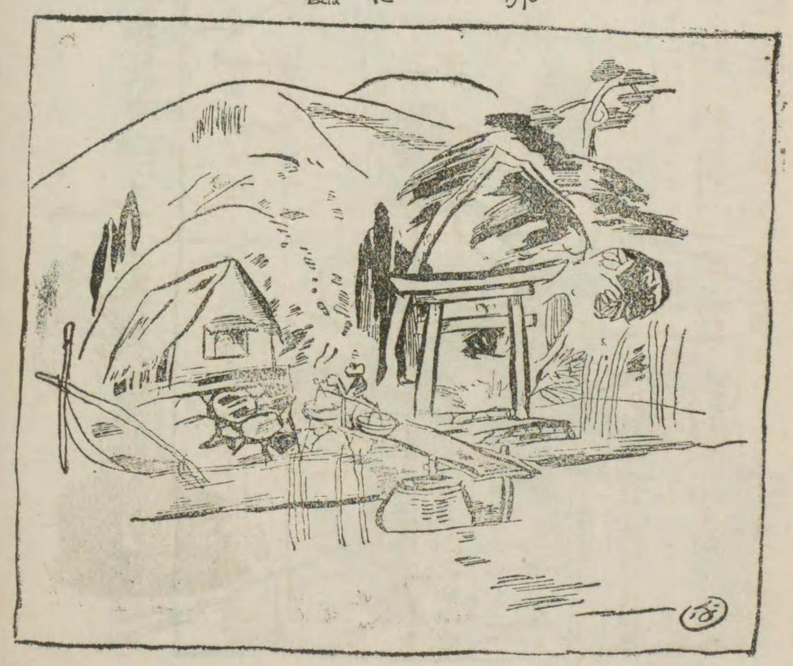


濱名湖めぐり〔二〕

新所、碧波油の如く凝れる湖面に一條の白線を引きつゝ船は愈〻進んで行く。新所といふ漁村が第一の寄航地になつてる別段有名な土地ではないが渚に建てる鎭守の宮の鳥居苔に寂びて古松程よく之を覆ふ處直ぐそのまゝが一幅の畫である。

……

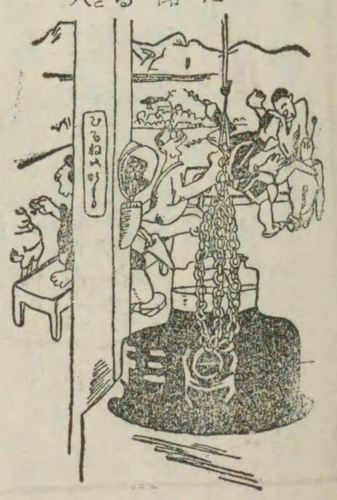
この紀行文はなほ續けるつもりであつたが丁度對獨宣戰が布告され戰爭漫畫を描べく召電を受け歸京、爲めに中止した。



近江八景

一　大原女の卵

大津街道を間違へて大原女について行くと大原村へ來て仕舞つたこの邊の女の子は親を見習つて何でも頭へ載せて歩いてる。道を聞くと『ハアなンどす』といふ言葉振りまでひどく小さく纏まつてる百姓老爺が足駄を穿いて日傘をさして荷車を曳いてる。關東の旅人の目にはそれが馬鹿に長閑に見える。

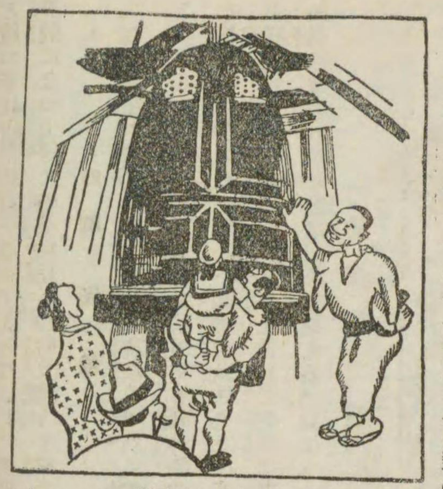


二　辨慶の力餅

三井寺へ詣づ、石段を登ると境内、そこの額堂にて辨慶の力餅を賣つてる、餅の小片れに黄粉をつけ串へ刺したもの、子供連れの母親一ト切れ毎に『辨慶はんがこの餅喰べはつて強うなつたのやぜ』と云ひ聞かしては小さい口へ入れてやつてる。喰了ると子供『僕も強うなつたんやぜ、ヤア〳〵』と急に玩具のサアベルを引拔いて其處等斬り捲る。見學旅行の教員らしきが串の横咥へは如何にも威嚴を損すると心得たか不便を忍ひ串の餅を縱に喰ひ取つてる、して一ト口毎に丁寧に髯を拭ふ、見渡せば足下には大津の町の全部、それより湖を隔てゝ矢走、近江富士など却々よい景色、從つて額堂へ

入り來る客も客も衆口一致する處は『こゝで晝寢するとえゝなア』と云ふと雖も堂の柱に貼紙があつて『ひるね御斷り申候』

三　三井寺の靈鐘



本堂とは又別な山内の建物に寶物の梵鐘が置いてある。高さ五尺五寸厚さ三寸五分口徑四尺一寸で妙な事に鐘の表、一面摩滅して流行るお賓頭盧の頭見た樣にツル〳〵に光つてる。その由緒を寺僧が節面白く說く『この鐘は正平年間俵藤太が龍神から貰ふた鐘でやす。俵藤太秀鄕は大津に居やはつたが、あの日草津へ行うと瀨田の橋を通りかゝると蛇が一疋臥てよつた。俵藤太はその頭をまたげて通らはつた、すると向ふから老人が來て、われはこの湖の龍神ぢやが三上山の百足に窘められて敵はん、どうぞ退治て呉れんかと賴みやはつた。俵藤太は弓矢を關げて待つて居ると大けな百足が三上山を七卷半卷いて瀨田の橋まで頭を出した。そんな大けな百足があるかしらんと思ははるやろがあんた方にした處で頭に手拭一筋卷いて何んと云やはる鉢卷をしたがチョと足らん、そこでその八卷に足らんよつて七卷半と云つたもんや、この百足を退治た禮に十種の寶物と一しよに龍神からこの鐘を貰ふたものでやす、それから程經て辨慶といふお人は熊野の別當辨正の子で書寫山に上り西塔谷の武藏坊といふ處で修業しやはつたお人やその頃比叡山と三井寺と戰ひをした際お恥かしい話やがこの鐘は辨慶に分捕れた鐘や、辨慶はんが三井寺から三里半ひきずつて行きはる時にこないにチビたんや分捕つて行つてこの鐘を撞くと鐘の音は出ずに只いの一〳〵と泣いた。辨慶はん怒りやはつてそないに歸にたけりや歸ねと谷へ抛りやはつて其儘になつて居たのを和睦した時又貰うて來た鐘でやす。下略』

四　駒留松

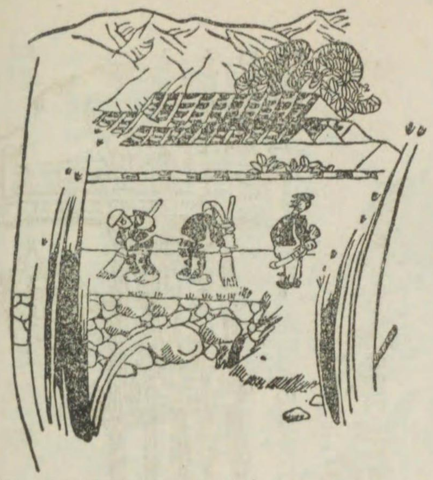
さゞなみや志賀の浦曲を北へ唐崎まで行く途中の畑中に駒留松といふのがある。明智左馬之介光春が湖水を涉つた後名馬大庫毛を繫いだといふ松である、可成り大木らしくあるが四五年前非人の焚火が移つて燒け今は根本だけ保存してある。代りに傍の松の苗木が植付けてある。說明者の農夫に『本には左馬之助の馬を繫いだは唐崎の松とあるがどうだい』と聞くと『そりや、あつちやへも繫いだらうしこつちやへも繫いだやらう、左馬之助やて小便せんならんよつてなア』

五　唐崎の松

幹の高さ三十餘尺なると比較べて枝の延長東西四十間南北四十八間といふのだから横へ横へと擴がつた松だ松の下に立つて見物の甲『松の木といふ奴は煖てると圖に乘つて隨分延びるものだなア』乙『支柱で保たせてあるのだから、支柱を褒める方が見巧者と

近江八景

いふものだ』松の北枝はもと其處に汽船の發着所があり油煙で燻された爲め一面枯て居る。入口の茶店で晝食、一膳頼むと亭主いきなり鯉を鷲掴みにして往來の旅人奥座敷の客にまで聞えがしに『どんなもんぢやい、生きのえゝ鯉やないか。これ見い跳ねるよ〳〵』と出刄庖丁を振廻す。表の看板にお晝食料三十錢とあるから三十錢かと思ふと餘計に取つた亭主に詰るとよく看板を見ろといふ、も一遍見ると成程三十錢の下に蟲より小さい字にてよりいろ〳〵と書いてあつた。

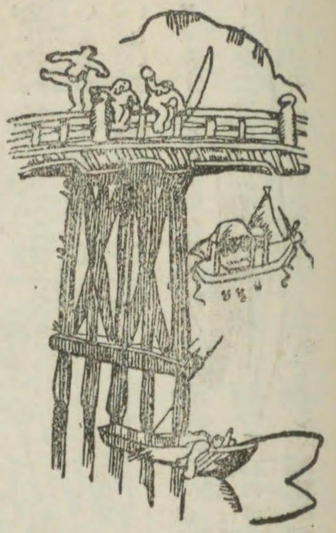


六　矢走の歸帆

湖水は蒼冥として暮れ渡り群り歸る帆の一二にのみ斜陽の朱を點じて居る美しき一幅の畫圖これが矢走の歸帆だ。然るに、その背景をなす矢走の村に突兀として煙瓦會社の煙筒が突立ち新施行の工場法に從ふ火夫共の手によつて黑煙濛銀と畫面の空を塗抹し盡すに努めて居る。

七　膳所

「水に映るは膳所の城」と謠はれたその城跡は今監獄になつてる。看守の眼玉に追廻され乍ら鎖で繋ぎ合はされた囚人二人塀外を卑屈な腰付きで掃いて居る。



八　瀨田の長橋

瀨田の長橋の上に立つて眺めて居ると若い船夫態の男がチヨコ〳〵と來て『廉うして置きますわ。船へ乘つて貰へませんか。景がよろすあすわ』と云ふ、乘る、ハヽ釣りを遣れと勸める。承知をする、『ほたら六七錢の宰をこうて來ますわ、序にゑゝ水一杯汲んで來ますわ』と丁度東京の女學生が遣ふ樣な語尾で話しかけるのが船頭さんに不似合だ、橋の下で釣る、釣れぬ釣れぬ方で先輩の船が先にもう一艘居り、釣手は竿を水に委したまゝ晝寢してる。欄干の上から子供達が『あんじよ具合よう石を膾の上へ落したろか』と囃ぎ戯れて居る。

上信越の溫泉地巡り

婦女界の依頼で菊池寛君と上信越の溫泉地廻りをやつた。

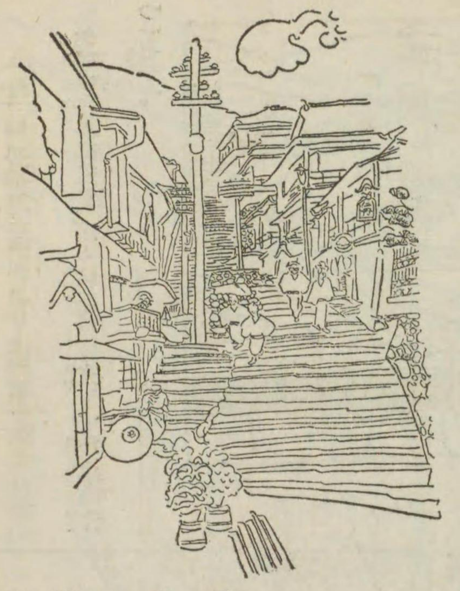
他に同行者山本有三君佐々木味津三君。

一、車中

大宮で買つた鰻丼を食ひ終へた後、みんな甘いものが食べ度い食べ度いといふ。熊谷驛でアイスクリームとあま酒を仕入れた。菊池君がアイスクリームを二つ占有した。それを兩手に握つて右のが冷たいか左のが冷たいか代る〳〵嘗めて居る。同君の小さい嬢さんのルミ子さんとあまり違はぬ仕打ちがある。同行戯曲家の山本有三君があま酒のラッパ呑みをやる。劇的だね。僕は大宮で鰻丼を買ふ時周章て五十錢紙幣らしいのを三四枚重ねたのを線路へ落してしまつた。賣子に汽車が出たあとでそれを拾つて代價に取つて呉れといつて別に一圓やつて置いたが後で考へるとあの中に五圓紙幣位折り込んであつたかも知れないと少し殘念に思つた。

二、伊香保の石段

貸浴衣に懐手をして兩側の土産賣る店を買ふ氣でもなくまた買はぬ氣でもなくぶら〳〵覗いて歩くのが溫泉旅行の樂しみの一つ。



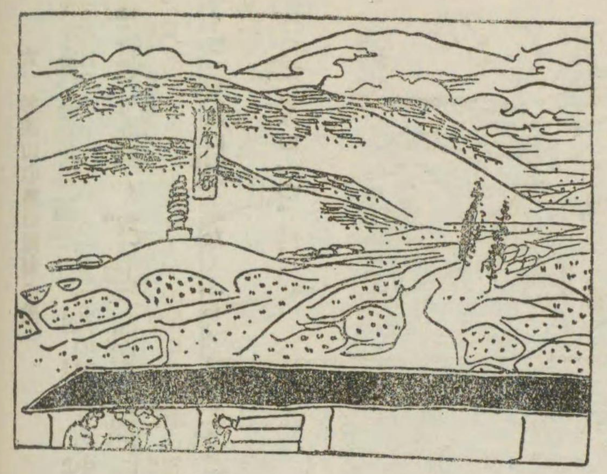
上信越の溫泉巡り

三、蜂の分房（伊香保）

蜂が一本の樹から空へ撒いたように飛んでる。山本氏が角の店で訊いて見る。蜜蜂に新女王が出來、新らしくそれについた家來共が巣を作りに行く處だそうだ。蜜蜂の一疋が菊池君の頸へとまり菊地君恐惶をきたす。同行新進作家佐々木味津三君が吹き飛ばさうとする。臆病な僕は逃げ出す。

四、別所花屋ホテルより上田平を眺望の景

お味噌汁を戀ひしがり宿屋に注文して朝澤山作つて貰ふ。

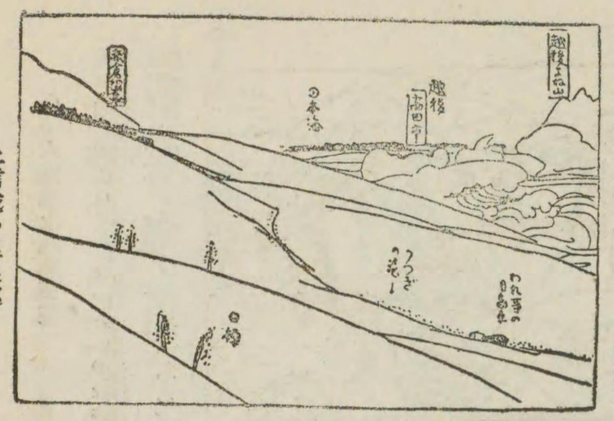


五、シッケイ（赤倉にて）

田口ステーションより赤倉まで乗合自動車を買切る、道の兩側の子供が自動車を見るとみなシッケイをする。どもりの運轉手君大いに自慢をして『あれは、みみみ　んな。わ　わたし　がおおしへたので　でですす　です』といふ。愉快なので、シッケイしない子供にはこつちからシッケイして催促する。

六、妙高山の麓の傾斜の美

妙高山のスロープ。うつぎの花の眞盛りの中を自動車は豆粒の蟻になつてうね〳〵削ひ上つて行く。甚句に名高い米山が右手に見る米山とこのスロープの間に日本海が想ひを遥けく浪の上に運ぶ。處々に立つて居る白く晒された白樺の幹は何となく神秘に對して襟を正さしむるものがある一むらの林に圍まれた赤倉温泉が近づいて來た。



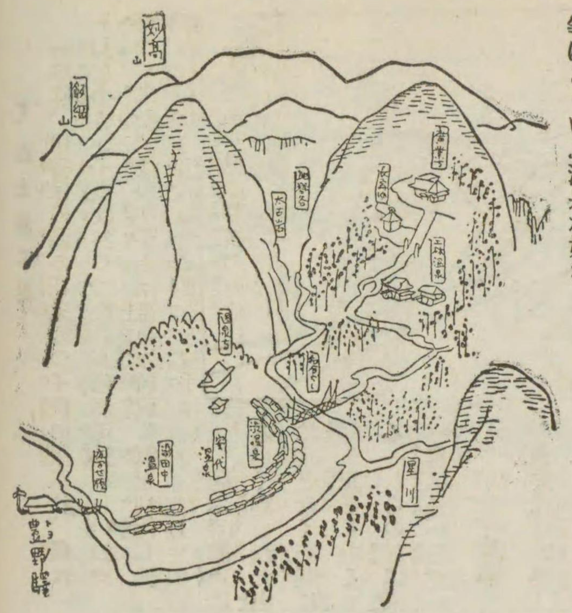
上信越の温泉巡り

七、廣業寺の老尼一行を長蕎温泉に案内する

上林温泉に行く。寺崎廣業畫伯の別莊を畫伯の歿後追福の爲め寺に直した廣業寺には老尼が寺の番をして居た。老尼はわれ等一行に寺を見せた上なほ寺の傍の浴室に案内、旁一風呂浴びて來やうと手拭と金魚のおもちやを持ち子供の手をひいて行く。人情味のある超越振りだ。

八、人間的な温泉街道

豐野驛で降車、二三里行つた湯田中温泉より安代、澁、上林と驛續きに町家と混つて温泉がある。人間的な温泉場だ。われ等はこういふ温泉が好き。



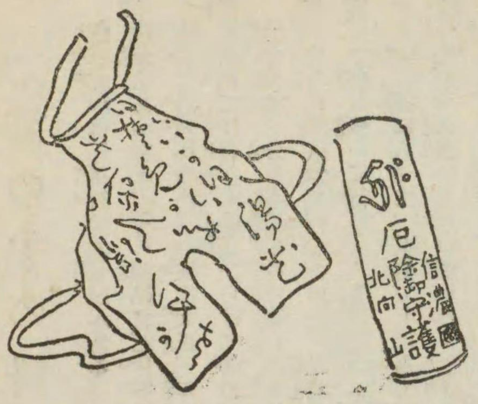
九、やまめ釣り

澁の裏にある星川へ自動車の運轉手君を案内にやまめ釣りに行く。餌のみゝずを堀り賃に佐々木君が子供に二錢やる。一時間程やつて一尾も釣れない。歸つて湯に入つてると運轉手が二尾だけ釣つて來て見せて吳れた。

十、お土産二點

一つは、伊香保の湯の花染めの子供の腹がけ。僕はそんな小さい子供は持つてないが形が可愛らしいので買つて來た。湯の花染めは温泉の硫黄の氣を利用して染めるもの、腹があたゝまると賣手はいつてる。

一つは別所北向觀音の厄除けのお守り。弘化年間の善光寺の大地震の時、旅人がこゝの觀音の夜のお告げにより同行の中でたゞ一人助かつたといふお札の額が上つて居た。僕の地震後の神經はすぐさまこれを頂く事に決めさした。



植物採集

『貴樣もつと足を延ばさんか』

『延ばさんかとて、俺の足はこれ丈だ』

『エーイ勇氣を出せ』

『勇氣を出したつて、足は延びやせん。』

湯の中の緋鯉

伊香保へは二度行つた經驗がある。一度は明治四十年時分であつたが、その頃はまだ伊香保の下まで電車が出來て居無かつた。一度は大正三年頃であつたが電車も出來て伊香保も餘程ひらけて居た。

前の時は自分は美術學校洋畫科の生徒として學校の修學旅行に加はつて行つたのだ。高崎で下りて、途々寫生し乍ら歩いて行つた。澁川といふ町の野趣のあるのが大に氣に入つて、其處でしばらく憩んでうどんを喰つたり、必要でも無い畑ものゝ種子を種子もの屋から買つたりした。

夕闇に温泉の煙のなつかしく包む伊香保についた。例の石段を永々と登り乍ら自分等の級の割當られた宿屋は好い宿か惡い宿か何處だらうと疲勞れた足で探し乍ら行く。修學旅行の樂しみの一つだ。自分等は木暮へ泊つた。上級生達は、はや美術學校の名物のチャカホイ節を唄ひ乍ら假裝行列で繰出して温泉の町の人々を笑はせて居る。そのどよめきが温泉場で騒ぐ唄と遠近して聞えて來る。自分等も騒ぎ度いには騒ぎ度いがまだ入り立ての一年生だから流石に恥かしい處であるで仲間中車座になつて歌を作つたり狂句を作つたり仕舞ひには天狗俳諧を始めた。その中で偶然

秋の夜や木暮武太夫寢ぼけけり

といふのが出て來たので一座腹を抱へて笑つた。記念の爲め貼つとけ貼つとけといふ聲が起つたので紙片に大きく書き、鴨居に貼つた。

頃は晩秋で伊香保は既に寒かつた。庭の池からポツポと湯氣が立つてる。手を突つ込んで見たら本當の温泉だ。その熱い湯の中を平然と緋鯉や食鯉が泳いでるので一驚を吃した。翌朝榛名へ向けて出發した。

かの天狗發句が木暮武太夫君の目に入つたか否や知らず。

後の時は朝日新聞社の漫畫記者になつて居て、その

方の寫生旅行にぶら〳〵館林のつゞじを振り出しに茂林寺、金山呑龍から赤城に登つた歸りだ。赤城の山頂に二日居て三度々々鑵詰のしやけとうどの漬物許り喰はされるので閉口した。

身體にも口にも少しは保養さしてやらうと伊香保へ廻つた。澁川の町の意外に發展してほとんど前の面影の無いのに驚いた。都會の人間が少しでも地方を歩るいてると非常に都會味とでもいはふか、人工的なユーモアに渇して來るのを覺える。それを醫す爲めに澁川の町で活字本の七偏人と八笑人を買つた伊香保の町の直側に電車がついて紅い灯に櫻の木なぞが植はつてるのが便利で嬉しくもあり、手つ取り早過ぎて拍子抜けのやうでもある。

宿屋の名を忘れたが町の入口から歩るいて行つて左側の一寸した家へ泊つた確か五月の初めかと思ふ。暇な時だといふので自分を入れた室の廊下の所だけ戸を明けて他はみな戸を締めた儘であつた。

拭き込んだ長火鉢に鐵瓶の松風の音を立てる。その側に腹へ座布團を當がひ寢そべり、江戸時代の興味中心者の書いた戯作を讀む。食事は都と大差無い鮮味と氣の利き方である。飽きると障子の硝子を透して見える赤城、そのこつちの何とか山の山の襞を眺

める。眞に氣さんじな逗留といふ感じがする。又時には廊下へ出て赤城のこつちの何とか山を上から見下ろして、山の頭を眞向に頂邊から見下す不思議な感じにしみ〴〵打たれて悦んだ。

農閑を利用して三山をめぐるのだといふ地方の講中が來て階下へ泊つた。夜、酒を飲んで大騒ぎだ。色氣の無くなつた爺や婆が唄を唄つたり踊つたりしてる。その唄も踊なるものも悉くくわいせつなのが妙だ。

山の湯にて

逗留山客『こう毎日玉子と鶏肉ばかり食はされてはこつちが鶏になつてしまひそうだ』

女中『そういはつしやりや、お客さん段々鶏似て來たべい』

上總から房州へ

勝浦より（上）

今年は汽車の便が開けたので夏休み以來海水浴客の入り込む事夥しく五軒の旅館は何れも滿員の姿だ。左右の岬によつて灣は太平洋の怒濤を遮られ漣寄する渚には掛茶屋、相撲場、運動器具など設けられて居る。黒くなつて眼ばかり光つてる都の人は行き交ひさま互に「大分御修業ですな」と冗談を言ひ合つてる。町の高照寺といふ寺に乳銀杏といふがある、幹から乳房の樣な瘤々が垂れ下つてそれを紙切れで縛り念ずればどんな乳でも出る樣になるといふ。覺翁寺山に登る。舊城主植村土佐守泰忠公の墓がある。頂より勝浦灣全體が望め八幡崎、惠比壽臺、砂子浦の白波など案内者の指さす儘である。突序耳を破つて汽笛の聲がする、玩具の如く浮いてた汽船が動き出した。外房州の浦々を經て東京へ行く船だ相だ。

上總から房州へ

勝浦より（下）

東京では大分下火の浪花節が今この勝浦では大流行で漁を終つた若者連が派手なまいはいに切立ての手拭で頬冠りして夜街をぞめき歩るくにも「お萬可愛や八幡山で命取られた茱萸の枝」「爺は銚子で松岸通ひ金は持てない浪枕」などいふこの土地の俗謠を賑辛聲の闘東節にもぢつて唸り散らして居る。勝浦唯一の劇場勝浦座にかゝつて居る東家樂燕の一座は御蔭で大景氣だ。濤聲松籟の裏に快よく夢に入る曉方、宿屋の表通で騒がしい人聲にあわてゝ戸を排し觀れば朝市といふのが立つて居る。物賣りは總て女で亭主息子共が昨晩より沖へ出ての獲物をこゝに集うて鬻くのである。あぢ、黒鯛、かさご、かわはぎなどの磯魚が多い。日は丁度八幡岬の上に登つて上本町通り兩側に處狭しと打並べられた樣々な魚は白銀の光を放つて居る海老は鬚を顫はし章魚は頭を擡げて匍ひ廻つて居る。魚賣り女の「このかつてゐぼう、そねゑに引つ掻き引ん廻して……おゑねゑさ」と叫ぶ物荒い調子がいかにも海國らしくて好い。

『お仙ころがし』の奇勝

勝浦から馬車、海岸を太平洋の怒濤に沿うて南へ下る。一時間餘で興津村に到る。七月一ぱいまで禁斷なる海老漁、今漸う盛つて來たので、阿爺も息子も嫁も濱にた干網に取付いて繕ひに忙しい。車上より立場茶屋の澁茶一杯飲んだ。愈、お仙ころがしの險にさしかゝる、隧道一つ潜ると右手見上ぐる許りである。明治十七八年の頃この道が出來ぬ前の話村のお仙といふ娘が秣を刈りに來て崖から落ち、この名を得たのだが、つひこの間も誕生寺詣での客人西風に吹き上げられて海に落ちた。峰から落ちたった石で死んだ人も あると更に同車の人 說き出すので婆さん 遂に泣聲出してお題目を唱へ始めた。

鯛見船

處　小湊より二十町計り沖、蓮華岬附近の海、通稱鯛の浦

人　船頭二人、乘客四人（子供を連れたる商人體の夫婦及び館山の水泳場より廻り來つた學生）

學生『船頭君、その笊に入つてる魚はどうするんだ』船頭『鯛の餌にやるだア』妻君『綺麗なおさかなですねエ、こはだですか』船頭『こはだでねエさつばちう魚だア、阿爺（鯛の事）は鰯でもさつばでもあんでも喰ふだアよ』商人『それぢやア海老で鯛を釣るんぢやなくつてさつばで鯛を釣るんだね』と言へどこの洒落船頭に解らず少し悄氣る。商人『鯛は確に出て來るかね。』船頭『受合ひ兼ねるだ、汚れたものが乘つてると阿爺あんじようしたつて出て來ねえ——そんに阿爺に揶揄面アしとると御祖師樣ア怒つて罰を當てるちふこんだ』

船、鯛の浦に着く、船頭餌を撒き鮐を叩き水を水面に投げなどする。

『そら出た、さう鮐に片寄つちやあなんねえ、そうら出た、そうら出た』學生『おう喰うとる喰うとる、偉大な奴が出て來て喰うとる』商人『眼の下三尺位はありやせう』子供『かアちやん、この鯛赤くないねえ』妻君『謙ちやん（子供の名）お手々を出しちやいけませんよ』

村あつて網を干し鷄犬を養ひ、紫の炊煙を上げて居る。田舍人力車の緩漫なる進行は之等を一幅の繪卷物を順次、繰展げつゝ行く如く車上の人に指呼せしめる。斯くてこの繪卷物は展くに從ひ實に鴨川町を中軸として編み卷かれてあつた事を發見するに至つた。鴨川着少憩、鹹い井水には閉口したが四邊の風光、白波磯の千鳥に睦るゝ畫趣は之を償つて餘りある。

濱の祭り

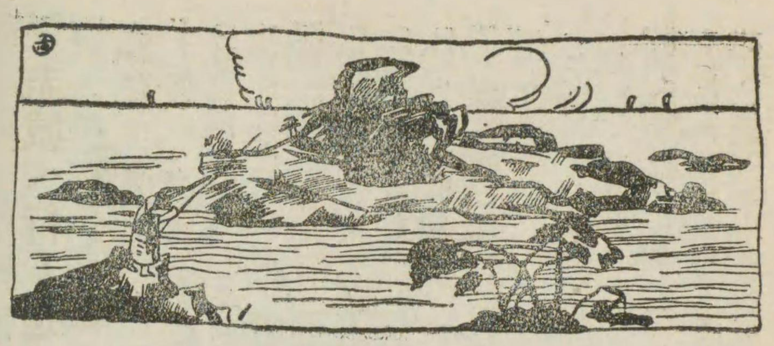
息ひなき太平洋の怒濤は外房州沿岸を洗ひ盡して海岸線に恰も音譜を現す線の如き凹凸を生ぜしむる。其處に岬あり島あり礁角あり岬と岬との間には灣を生じ灣の奥に漁*更に車行、濱荻漁村は丁度祭りで御輿を浪に洗ひ、陸上げした船の艫には家々の定紋打つたる旗を押し立て、赤銅色の漁夫達、涼風通ふ濱邊に圓陣を作つて酒酌み、踊り謠ひしつゝあるのを觀た。

仁右衞門島より（一）

鴨川から二里程海沿ひに行く太海村の地先に江ノ島の十分の一計りなる小島がある。全島は一家の所有に係り島主仁右衞門氏の家は鎌足時代より連綿として續いた家柄である。島の高所に石垣で圍まれたその邸宅は元祿時代より其儘に今も尙快よく住み慣されて居る。渺たる孤島の中に一家十五名と犬の外に水も交へず、清水湧く井戸もあり麥も作られ、蔬菜の類は年々喰べ切れぬ程の收獲がある。島中尙頼朝や日蓮の舊跡は丁度湘南に於ける江ノ島の如く、房州めぐりをやる人々に取つての遍歷地となつて居るといふので陸波太（地名）より左に外れ、磯傳ひに島の對岸に出で、渡船の便りを待つ間、先此小島國の全貌を寫生する。

仁右衞門島より（二）

船を島へつけて置*いて渡守が早速に案内者と早變りする。先づ島主の家へ行く。岩角に聊かの工を加へた趣ある石段を數十階上ると城の見附の樣な處へ出る、そこの門を潜ると玄關前の廣庭だ、思ひがけない蘇鐵や芭蕉の青々して居るのに驚く、更に琉球の家屋に觀る樣な築墻の塀の門を過ぎ御座敷の拜見に取かゝる。元祿十六年十一月關東大海嘯の際に崩壞したその殘留木材を拾收して造り更へたものだ相だが南天の床緣、桑の天井、栂の柱等頗る古風を帶び成程案内者の自慢するだけの事はある。たゞ柱、障子等腰以下は元祿以後の新木を以て繼ぎ足され木目、色澤等上下非常の差があるは致方ない。島の裏へ出る。辨財天がある、案内者曰く「この御本體は、石塊で



があす」余曰く「それで御利益があるかい」案内者曰く「もつてねえ」事言はねえもんだ、御本體は石塊の代りに御自分の姿は濱に現すと仰つて、ほうらあすこに蛇體の大石ががんせう」と指す處に成程似寄りの形の物がうねくつてる。これを手始めに所謂島の名所めぐりの參詣者となる。

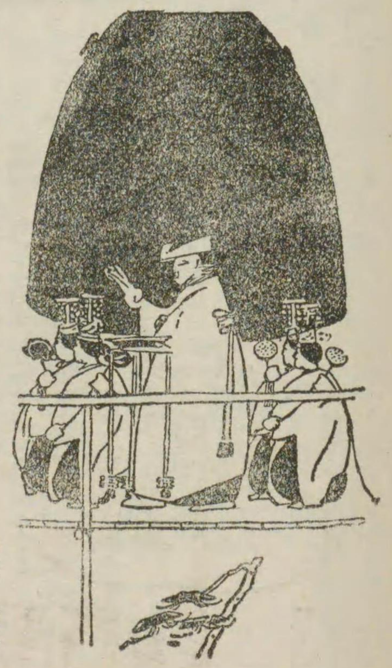
仁右衞門島より（三）

萱に混つて百合、サフラン、撫子の花の咲いて居る磯を傳つて行くと〆を張つた雌岩、雄岩がある日蓮大士讀經の靈地と稱され參詣者は賽錢を投げお題目を唱へなどする。更に數十間進むと方四五坪計りの平地を孕んだ窟がある、治承年間頼朝石橋山に敗れ安房に逃れし時、島主この窟に庇ひその功によつて公、覇業成るの後、附近、海面一圓の漁業運上を收むる特權を賜はつたのだといふ。實際今でも鮑採りの專有權だけは仁右衞門家が握つて居て島の維持費は大部分この運上が擔つて居るのだ相だ。この處は丁度島の尖端をなし左手は房州白濱の海岸より總州勝浦の鼻まで見通され「その間十六箇村どの村でも見えぬ村は無い」と案内者が自慢する通りである。白濱の漁村より海面に亘つて白煙吹き流れて居るのは沃度を採る海藻を燒いてるのだ相な。

赤城へ行く迄

一　呑龍上人の鐘供養

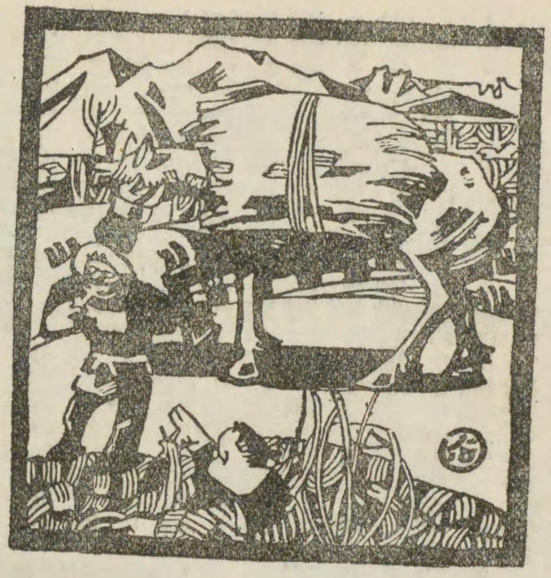
お稚兒が出る相だ。飾り物が十幾はいとか出來たつて事さと、太田行の臨時汽車はこれ等祭の噂で上氣して居る女子供達で詰まつて居る。宿場らしい地味な家並をした太田の町は取つてもつかぬ紅提灯や派手な幔幕に粧はれて呆れて居る樣にも見える。松並木には梢より高く軒を並べた曲馬師活動屋などが毒々しい繪看板と强い調子の鳴ものを用ひ總て地方人の粗つぽい神經にも喰ひ入る樣な手段の限りを盡して居る。その日蔭を擇んで種物屋がつゝましげに早出いんげんやそらまめなどの小札を並べて居るのがしほらしい。鐘樓の前には祭壇が設へられてあつた。そこから鐘樓を取り卷いて廊下も出來て居る。讀經の聲漸く高くなるとお稚兒を前後に置いて僧正がこの廊下へかゝる。左手に捧げた平盤より造花の蓮華を殊勝げに振り撒きつゝ一めぐり二めぐり三めぐりして元の坐へ直ると讀經の聲は更に高まる。地方の豪家らしい夫婦がおづ〳〵番僧に案内されて撞木の繩に縋つた。女房は慄へて居る。紺の絆纏を着た男が介添へして飽くまで身を反らせ繩を曳かせた。鐘が鳴つた滿山の鳥が騷ぎ立つた——私はこれから赤城山の方へ行く。



二　やまうど

赤城山麓黑保根村の一茶店で草鞋を代へて休む。駄馬に山獨活を材木のやうに積んだのが通る。農家では

今之を買ひ取り鹽漬にして置いて一年中の貯へものとするのだ。賣る山の男は買ふ家の人から數箇の銀貨を受取つてから今日はもう日のある中に山へ戻りつけないから是非泊めて貰ひたいと掛合つて居る。その活獨の鹽漬の出來てゐるのを湯漬けに添へて食べて見る。



快よき齒觸り。心を遠く幽境に導くやうな香氣。予は瞑目してこの氣持ちをひたすら身に浸さうと努めた。

赤城小品

一 湖水

つゝじが咲き掛けてるのに赤城山頂の湖水（土地の人は大沼と稱してゐる）にはまだ岸邊に氷が殘つてゐる。その氷は南の方地藏ヶ岳を越して來る暖風に毎日二寸

三寸づゝ解け行き軈て二坪三坪ほどづゝの塊となつてそれが北岸へ向け泳ぎ出すと山頂の人々は男も女も之に飛乘つて遊んで居る。何が樂みだといつてこの氷へ乘る事と雪沓をぬぎ捨てゝ下駄で黑い土を踏む事程のものは無いといつてる。あわたゞしく過ぎ去つて仕舞ふ春。それを僅な間に樂み盡さねばならぬと山の上の人々は懸命になつて遊んでゐる。

二 天狗の話

赤城に出る天狗は團扇天狗といふ天狗だ相だ。何故團扇天狗といふのだと聞いてもわからない。昔から然う言つてるのだとのみで說明して呉れない。唯この天狗は鉛の彈丸だと拂ひ落して仕舞ふから要心に鐵彈を塡めたケースを山の獵師共は屹度彈帶の端に一つづゝ用意してるとて眞顏になつてそのケースを拔き出して見せて呉れた。

三 小沼

大沼より山一つ南に方つて小沼といふのがある。同じく火口原湖で大きさは大沼の三分の一位なものか。大沼は周圍一里十餘町の水を湛へて尙餘裕を存する大洞の平原に在るだけに風趣は餘程長閑である。湖畔には相當に老木もあり湖には小鳥ヶ島と名づくる小島なども浮んで一體が遊戲的分子に富んで居る。小沼は岸より直に峙つ山である。湖に影を浸す木とては白樺の洗ひ晒された幹、それも幾年の風霜に赤味を帶びて蛇の腹の樣にも觀らるゝ。その外偶雲一つ二つ湖心に撮る事はあるけれどその他に何物もない。鳥さへ鳴かぬ淋しさ。——神祕性を帶びた山間の雪の色は不思議にも高山畫家セガンチニイの畫架がアルプスの山

頂に近づくにつれ彼の畫に愈崇高なる靈性が增して行くといふ話を思ひ出される。

四　小沼の傳說

それ程昔の事ではなく赤城の麓に赤堀道玄といふ富限者がありました。道玄に一人の美しい娘があつて近村の評判ものでした。その娘が十六の春に赤堀家に傳はつて居る龍の鱗といふのを見てより急に赤城へ詣りたいと言ひ出して聞きません。仕方なく駕籠へ乘せ供人をつけ四月八日に山へと立たせました。其道筋に此小沼があります。丁度そこへ來た時娘が水を飲みたいと言ふまゝに下すと、小沼へ飛込んで仕舞ました。死體なりとも上げたいと湖尻へ堀割を掘つて、も少しで底まで干上らうとする時分大雨俄に降り來り黑雲渦捲く中に振袖姿の娘が白馬に打跨つて現れ恨めし相に工人共を睨めたといふのでかい堀りは止にしました。小沼のぬしになつたのだ相です。

上田澤の回向寺といふには娘の帶があります。

雪國の女學生

一　黑のマントに靈香

雪に育まれて雪に咲く北方の花、雪國の女學生を觀やうか。高田高等女學校を訪ねる。吹雪で吹き閉ぢた教員室の窓硝子を丸く指で搔き開けて覗くと通學生が來る。一樣に男用黑羅紗のマントをスツポリ冠り雪沓を穿いてる。若し內股に歩かないなら男の學生と判別が付かぬ。

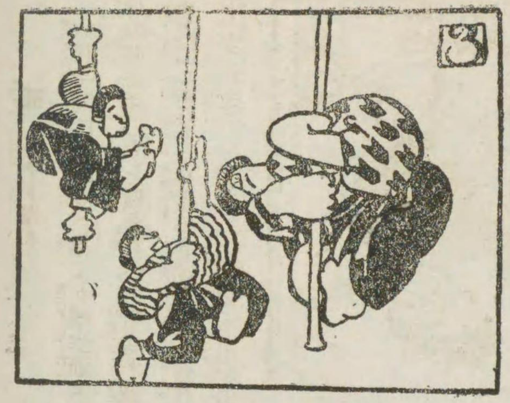
雪國の女學生

二　板額女史養成

室內運動場の片隅に砂袋を十貫六百目の重量に纏め繩で縛り上げたものがある。校長さんの說によると女は嫁いてから手桶を提げたり可成り力業が要る。その用意だ相な。女が働くといふ越後の國の女子教育としてこの用意甚妙。これでも女にしちやあ一寸重荷でがしようよ』と校長さん輕蔑らしく手を掛けたが、男の校長さんにしても重荷だつたので一同どつと吹出す。女學生諸君に命ずると『わたス駄目だわよ』『わたス駄目よ』と謙遜し乍ら然も輕々と提げて往き、戻る。

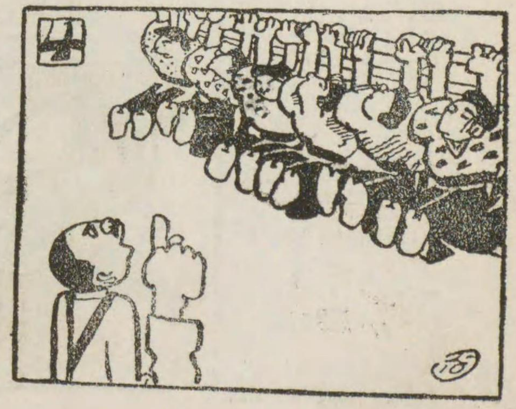
三　木登りの稽古

同じく運動場に天井から竹竿が釣下げられあり、努めて攀ぢ登る稽古をさせる。これには校長さん格別の説明も無かつたが校長さんの前説により推論すれば多分嫁づいてから柿の收穫などに木登りが必要ゆゑその準備知識を與へて置くのか。



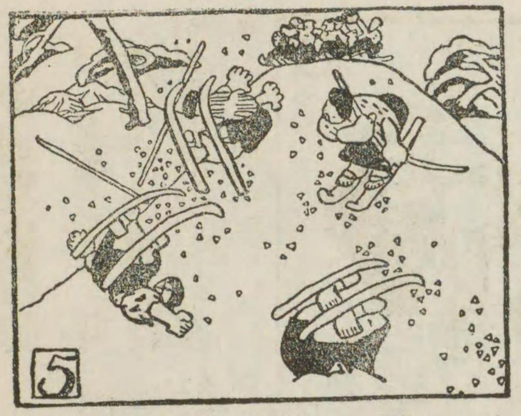
四　癖直し運動

今度は女學生を十人位づゝ、壁に同じ間隔を置いて横に取付けられた肋木へだらりと並んでぶら下がらせる。越後の女は素直だ、先生の言ひ付け通り嫌な顔もせずだらりとぶら下る。かくて先生の掛聲につれ膝を曲げ下肢を體に直角に延し又元の位置に復させる。寒氣にかじけて前屈み勝ちな當國女性の習癖を矯め直す親切よりである。斯く教育づけられたる女性の一度母となる曉には延て當國の壯丁も其軀幹眞に視るべきものあるべしと讃嘆する、『だが、女で居て、よくかう思ひ切つて活潑に運動が出來るものですな』と疑問を挾むと校長さん曰く『イヤ此等の袴にはみんなマチが付いて居ます。』



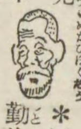
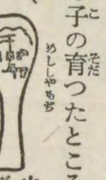
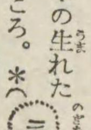
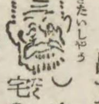
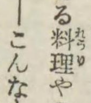
五　スキー振り

休課時間には校庭へ出て女學生連スキーをやる。出口の釘にずらりと履き替への雪沓が並んで居り、その沓には一々級と持主の名前が記し付けられてあるのが可憐だ。スキー場にこの學友が二年計畫で積んだ築山が出來てる。スキーをつけた女學生諸君、家鴨の樣な足取りで築山の頂上へと辿り付き暫時『あなた先へすべつて頂戴よ』『わたす始めた許りで駄みよこの方お上手な癖に』など目白押しをやつてるうちお轉婆な一人が先頭の一人を突きだすと『アラ△子さん酷いわ酷いわ』とキャッキャ云ひ乍ら滑走し終る。中には筋斗切つて雪中へ埋沒するのもある。然し積雪七尺にも及んで然も綿の如く柔か、キャッキャ云ひ乍ら又起き上つて來る。この國の女の雪に親しき事眞に豫想外である。



中國漫畫行脚

○出發に際して

今回社の同人のお勸めにより中國節を見物に參ります。山陽道についての僕の知識はむかし神武天皇様御東征の途中兵たん部を充實あらせられたところ。＊  ＊に代議士二度の勸めをさせた選擧區のあるところ。宇垣陸相が『さうけヘナ』といふあの訛りを生ん ＊のなる木はまだ知らぬ『人だところ。『＊の子の育つたところ。年々、國民に米の割あて額が少くなるのに不似合な大きな＊  ＊を土產に出す神社のあるところ。  ＊の生れた海軍宰相＊（  ）＊の舊宅のあるところ。＊（  ）＊を食はせる料理やのあるところ。——こんなものでとこころ、決してあたらぬと云ふ、＊今度詳しく拜見いたします。よろしく。只今出發に際し、準備のため地圖を展げて見ました。ところが山陽道にみゝずの匍つたやうな鐵道線路の外何にもない。もつともこれは汽車旅行案内の地圖旅行案内の地圖は單純な奴だ。人生汽車にさへ乘れば能事畢るものと心得てる。

岡山見物 一

『飯借りやく！』

僕の泊つた宿屋の表通りを『飯借りやく！』と怒鳴つて通るものがあります。飯を借りて歩く奴はどんな奴だらうと覗いて見るとこんな姿＊ ＊の魚やでした。『飯借り』は魚の名です。東京でいふ『このしろ』や『こはだ』に似てゐます。

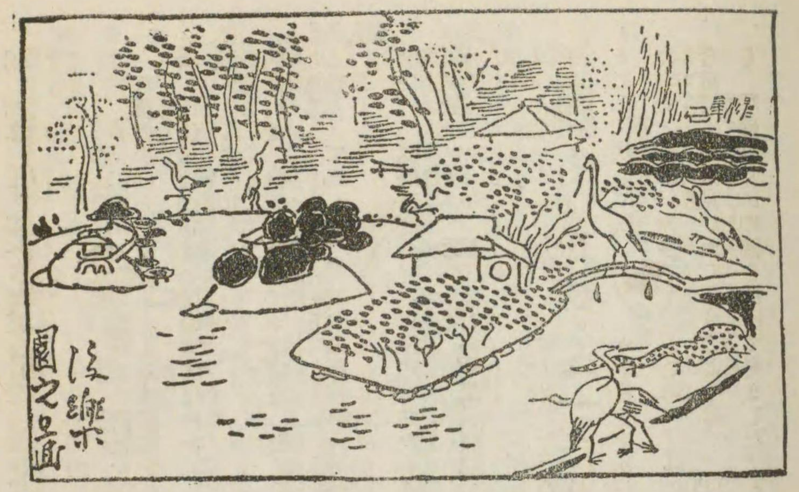
『飯借り』は客に買はれると二つに剖かれ酢につけられその後、漸く目的どほり飯を借り受けることが出來ます。その飯を彼女は腹に丸く抱きます。すると彼女は『飯抱き鮓』と改名いたします＊ ＊このとほり。人間の生活にも『飯借り時代』と『飯抱き』時代とあるやうですね。

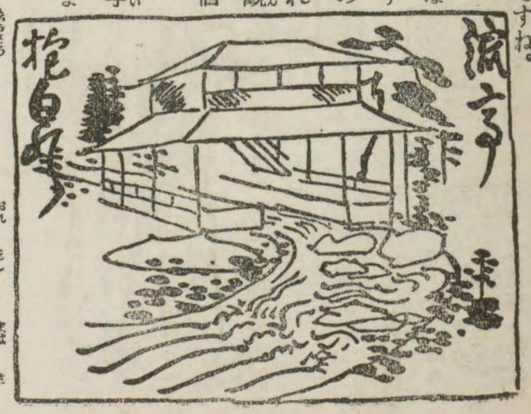
後樂園

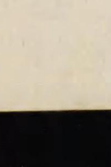
廣い池があり岩石を亂用した小島が二つ三つ浮んでゐます。梅林、櫻林、藤棚、あやめの池等はおの〳〵部門に分けられ百貨店の商振りのやうに觀賞者のすき自由な需に應じて居ます。

水が家の中を通り抜ける流亭は暑がりの怠ものにはうらやましい風雅な仕掛けです。

廣い芝生を＊ ＊がマラソン競爭をしてとても俺の足では廻り切れぬといつて居ます。

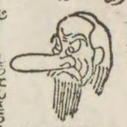






鶴が見物人を人臭いとも思はず悠々と小徑で摩れ違つて臭れる。蓋しこれが園の一番の御馳走でしょう。

園の背景として右手に岡山城の天主閣眞向ふに東山の翠色を取入れてあります。多分これが＊の一つでしょう　全園の評語を選べば雅潤暢達。



こゝの造園家の＊

終りに佐上當縣知事が就任早々作つたこの園の鴨綠江節をご紹介いたします。

『岡山の人よ誇れよ後樂園、仙鶴遊ぶ庭の邊に常盤の松も色榮えてかしこき記念の延養亭（先帝行啓の御館）』

知事が、鴨綠江節を作るのだから內務部長は安來節勸業部長はストトン節でも作らずば役目はつとまりますまい。

岡山見物　二

第六高等學校名物先生

これから岡山の六高を訪問いたさうと思ひます、途々案內役の學生が六高の滿田先生の話をしてくれました。先生は東洋史專攻の文學博士です。學問執心の餘り世情に頓着なさいません。登校の折には縞のシャツ一枚になつて洋傘の先に上衣をひつかけ歸去來の歌かなんかを唄つて悠然とやつて來るさうです。

野幸を拾ふ

學校では『カガミ』と『テル』と『ヘウ』が案內してくれました。これは綽名です、本名は何といふか知りません。六高は運動、中にも柔道で鳴つてますがその先輩には猛者がゐたさうです。牧場へ行つて＊

＊を拾つて來て交番へ屆けた男があつたさうです、交番ではそれを下げ渡したので旭川の砂利河原で引導文を讀渡した上を斬罪に處し厚く胃囊の中へ葬りました。

落第山

校內の名所を紹介すると、學生がそこに立つて寫眞を撮るときつと落第する『落第山』。寮生七人あつたが中の六人は落第の運命と決まつてるのであとの一人の寮生もわざと試驗の答案を出さず落第につきあつた歷史を持つ南寮三の『友情部屋』、夜そこへ入つたら決して戸が開かなくなる『入らずの便所』。

燈火信號

中國漫畫行脚

多樂室前の芝生を座敷にして碁を圍んでる友達が自轉車や下駄穿きでお座敷に踏込む）向ふの女學校の建物が見通されますが

木立を座敷にして碁を圍んでる友達が自轉車や下駄穿きでお座敷に踏込む

＊を一遍に消す、その後パチくとスキッチを捻る。するとふの女學校でも同じく＊で應答するさうです。それによつて何かロマンスでも起るのですか』ときくと『カガミ』君『なにたゞそれだけです』はさつぱりしてゐていゝ。

岡山見物　三

木堂せんべい

商品陳列所へ入つて見ました。疊表、備前燒などが威張つてる中に木堂せんべいといふ出品があります。これは扇形のせんべいに木堂の右肩上りの例の字で『樂善』などと燒付けてあるのです。一體大養といふおやぢは食へないおやぢで強ひて食はうとすれば反對に食はれてしまふおやぢです。成程木堂はせんべいにして食ふ方が安全です。＊

＊政友會總裁の茶受けの相手には持つて來いでしよう。

女の自轉車乘

岡山の市を歩くと女が＊

＊へ＊

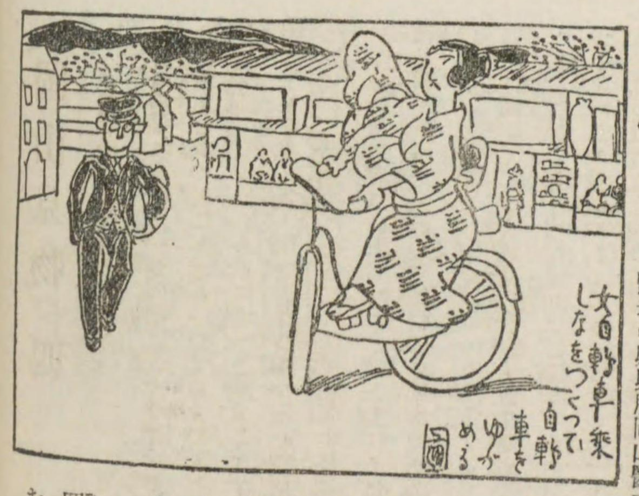
＊て行くのを澤山見受けます。岡山見物の一つでしよう。もしか向ふから若い男が來ると嬌姿を作るのでその度び自轉車

はよろめきます。＊やが自轉車へ乘つて賣り歩くのも見受けました。

岡山醫科大學

岡山の女學校でこの間將來何の職業の夫を望むかといふ問答を出したところ答案に醫者が一番多かつたさうです。それ程岡山縣は醫者のもてるところだ相です。

＊はさつぱり駄目の由。僕は只今そのもてる醫者の卵所岡山醫大の田中學長と對談して居ます。そして矢つ張りその話題について話して居ます。學長『全くさうです原因の一つには岡山にはむかしから代々名醫の人格者が現はれて信望を受けた習慣からも來るのだと思ひますがね。そりや土地の人が醫者を敬信するのはまた格別です。



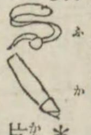
病院なんかでは科長の事をみな大先生と呼びます。助手は小先生——』もしこの呼順で行くなら學生は二分の一先生でなければ0.5先生と呼びますか。この學校は傳統的に教授は內職をしないさうですが時節柄、君子保身の術に適つて結構です。この學校には世界的學者も數多くゐられる、でそれ等の方々の實驗を見せて下さる事になり田中極大先生は問合せの電話を他の大先生へかけました。

『——君。あの龜の心臟はまだ動いて居ますか』

岡山見物四

岡山醫大　つゞき

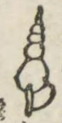
學長に連れられて一つの室に入ります。洋書少し並べた粗末な机の前にどこといつて目立つところのない男が兩切煙草を＊



＊して考へこんでゐます。これが片山病蟲の媒介物を發見した鈴木先生です。世界的になるには活動役者の外は容貌はゐらないことを發見いたしました。わたくしは現代の職業で何が幸福だといつて純科學の學者ぐらゐ幸福なものはないと思ひます。

世間に絶えず動く思想沙汰にも左右されないでよいし、眞理性の般闇もほゞ定まつて居るし、相手にするものは生々した自然であるし、うるさい社交は無いし、一生凝視の世界に立籠つて居れるし僕に若し多少その才能があつたら先生の弟子にでもして貰はふと思ふその僕を世間ではまた幸福な職業だといつてる。博士は蟲の擴大圖を澤山並べて說明して下さる。僕は禮儀のた

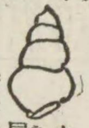
め判つた顏はしてゐるが腹では一向判らないのです。大體の感じで申しますと何でもこの蟲が水中より人體へ侵入し殺に混じつて田にまかれ再び水中へ戻る長道中の間に水中で一度宿屋に泊ります。博士が發見されたのはこの宿屋たる宮入貝であります。宮入貝といふのはこん



なに小さい貝それからですも一つ興味が持てたのは片山病の蟲はきつとメス、オス絡み合つてゐることです。斷りなしに入りこんで人間の肝臟で愛の生活を營んでる。思想が新し過ぎる蟲です。

ヂストマ博士

ヂストマも道中



＊の宿屋に泊ります。これを證明されたのが

＊を一尾手網で掬ひ出し肉をこそげて顯微鏡で覗かして下さいました。長野博士です。博士は＊支那大陸の地圖へ硝子製の玉子を環切りにしたやうなものがズルリ〳〵と浸入して行くのが覗かれます。玉子の環切りがヂストマの幼蟲ださうです。かの肉を削がれたハヤを指して博士は『これ一匹喰へば屹度死ぬのは受合ひます』といはれました。博士はなほヂストマが成熟して毛を生やして泳ぐ姿をやつて見せて下さいました。本當にこんな形でしやう。

蛙の神經と電氣

老沼先生はしじゆう餅を餘分に貰つたやうな嬉しさうな顏をしてゐる先生で

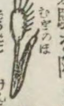
＊の股肉に電氣をかけると神經に感じてピリ〳〵動くす。その動き方の推移を油煙

＊の筒へ針先で記錄する實驗を見せて下さいました。神經の疲勞についての實驗ださうです。田中學長は四十四歳ですがまだ婿にして學費の出し手はいくらでもありさうな學生顏のぬけぬ爽敏な紳士他の三先生も少壯學徒です。そして隔てのない交際ぶりは見る目にも美しく感じました。僕も田圃で何かつかまへて來て研究の仲間に入れて貰はふ。

倉敷見物

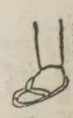
役人の巡檢

倉敷驛を降りて畑の中を行くと



に半身隱れて職務に忠實な縣廳の役人一行がこの地方の巡檢に歩いてゐるのが見えます。役人といふものは行儀作法の正しいもので畑中道を歩くにも官等順でせう。みな昇任しさうな顏ですす列より少し離れて倉敷町の大王大原孫三郎さんが案内して居ます。長身の眼の光つたをぢさん

＊は社會事業を、＊は金儲け仕事を踏み固め〳〵するやうな足取りで歩い



てゐます。夏の＊

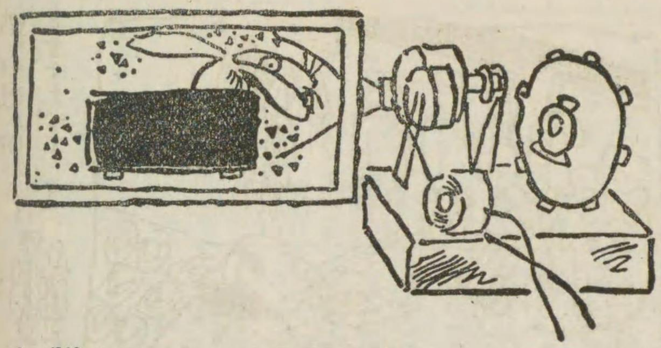
＊が課長の背中にとまつたりしてゐました。けれども居心持は結局ひらけた金持の背中に限るとて大原さんの羽織の紋の傍にとまつたきり動きません。彼も現代を識るものです。

大原農業研究所

畑中に書庫の土藏を抱いた清朴な木造建物です。所長の近藤博士は＊

＊を强くしたやうなこんな＊

＊をした紳士です。『ジャガイモを二倍にも四倍にも大きく實らせる研究などは出來ないのですか』と訊ねますと所長『それは大變です。土壤學の方からも肥料學の方からも八方からかゝつて共同研究をしなければなりません。で此處では手に合ふだけの部分々々の研究をしてゐます。』從つて直接の利益にはならぬ根本の究理も多い相です。奥床しい事であります。



入つて先づ目につくのは勞働者の榮養食品の見本が蠟細工で寫實に出てるものです。献立表の一例を擧げると朝、殘飯利用味噌汁、壹＊吉＊野煮、小間切肉の甘煮、夜さつまいも梨もどき――の程度なら大概のプチ。ブルジョアの日常食より趣味の點ではしやれて居ます。次へ行くと兎が硝子箱の中で紡績工場の空氣と同じゴミの空氣を送られ保健研究の材料になつてゐます。次へ行くと屈強の男が一所に取付けた自轉車を踏んで疲勞の研究をされてゐます。次は密閉した箱の中で男が煉瓦の積上げをやつて空氣の濕度の研究の材料になつてゐます――たゞ、美人女工がゐるため男工の能率が上るこの實驗はどこにも見當りませんでした。大事な研究なのですがね。

津山見物（上）

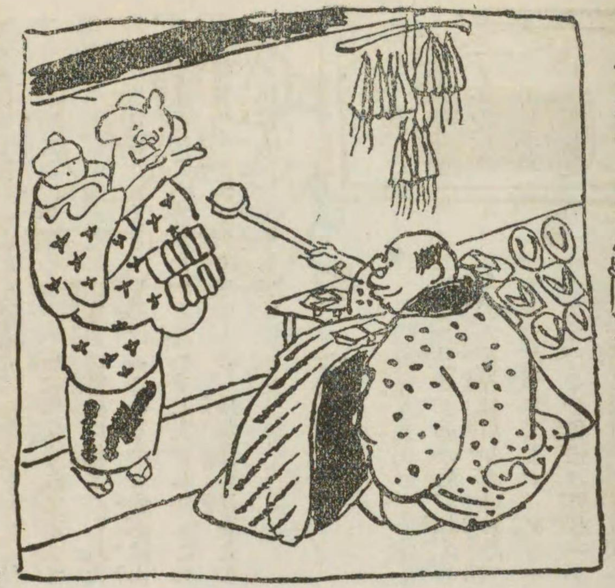
國言葉の送仰

『ゴヂヤ描いたら覺悟がアリマスルワ』といふ言葉で岡山驛を見送られ『あんたの筆はムチヤ、バー、ユーケエ、用心セニヤ』といふ言葉によつて僕は津山驛で迎へられました。

取引

炬燵情調

津山氣質を聞き得たところによつて綜合すると、こは山中の別天地、それに養蠶や製紙材料や比較的物質の生産が豐かであります＊『（ ）＊は津山へ』と申しますよつて『ますくらゐ他人でさへ



も落付きのよいところとしてあります。冬になると商家は店先に炬燵を拵へ店番はそれに入り、ついこの間まで客の出す金を柄ひしやくで受取つてゐたさうです炬燵情調。炬燵取引といふ通語は津山、善惡兩樣の內容を表現して響きます。しかし最近になつては津山の人間も大に覺醒して――なにしろ千二十萬圓の銀行がありますからね。その代りこれに伴ふ弊には――マアムチヤいふのは止めやう。

さんしようを

魚が津山邊にゐる事は遙々東京にをる僕等も聞き知つてをりました

で訊くと、本當にゐるのは十五六里先の山中だが姿だけは町内のどこかで見られやう。案内役の紳士の電話で方々探して警察の中に一疋ゐる事をつきとめてくれました。行くと井戸端のカメの中に拘留されてゐます二尺ぐらゐ。『なぜこの山椒魚は警察に擲まへられたのです』と訊きますと、署長は『このものゝ名がはんざき(犯罪)であらうがな』と答へました。しかしこの答は筆者の創作かも判りませんよ。山椒魚の事をこの土地ではは、んざきと申します。

津山見物（下）

虎斑竹

山椒魚は半裂きにしてもまだ生きてるから、はんざきといふのださうです。牡丹が美事に咲いてる中學校で、美しい斑の ある虎斑竹 ＊ ＊を見せて貰ひました。名物の一つです。この竹の斑は學者が調べたところによると、黴菌ださうです美術思想のある黴菌ですね。

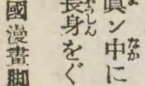
親睨み

先生が硝子桶に飼つてある小魚を掬つて見せます、眼が四つある。この通り＊ ＊これは實は鱗の二つの斑紋を眼のやうに見せてゐるのでした。この魚が眼醫者へ行つたら眼醫者は藥をさすにキットまごつく。

ケン

津山の人は言葉の中でしきりにケン〳〵いふ。そこで中學校の先生が生徒を叱つたさうです。『お前等さうケン〳〵いふてはイケン』と。

城山

維新の際、もて餘して四百圓で賣り出しても、誰も買手がなかつたといふ城山へ上つて見ました。櫻の木が澤山あり、花ごろの眺かさは落ちてゐる辨當の折箱で知れます。崖へ出て見晴すと、津山を中心にしてあたり隈なく手に取れます、津山は何といふ長い町でしやう。宮 ＊  ＊のやうです。川の岸に落した ＊

これでは津山町でなくて津山ま――ちです。またこれだけ戸數のあるのに町とは謙遜に過ぎます。御遠慮なく市にお改め下さい。

安黒氏

土地財界の重鎮の安黒氏に會ひました。何を訊いても徹へないでにこ〳〵 ＊ ＊人物惠比須が鯛を賣りに來つた時は丁度こんなでしやう。

平沼樞府副議長

土地出身の平沼さんが歸郷してゐるのに會ひました兒島高德の舊蹟に建つた作樂神社の用件で相談に來た土地の有志の眞ン中に、百萬遍の和尚のやうに坐つてゐます。彼は長身をぐんにやりさせて草臥れてゐます。

子供の守をした男が、彼が好きだつたからといふので、今度も持つて來たおやき＊ ＊を筆者に食べさせました。野趣があつてうまい。問『あなたが大きくなつて、これを喰べてご覽になつた味はどうです』答『モウ――今は――フン』問『あなたは子供の時おとなしかつたさうですが、子供の時どんな心持ちでをられました』答『おとなしいのは今だつてさうだろフン』氏が樞密院で當局大臣をあしらふ調子もこんなものと心得てよろしきや。恭しく退出して町へ出

で昔からの名物である『初雪』の菓子と近ごろ創案した名物の竹細工とを買つて、『僕、もう去にますケン。さよなら』

鯛網見物

小川郷太郎

津山より福山へ汽車で向ひます。里庄の驛で＊

＊小川郷太郎さんが乘り込みました。郷太郎さんは議會の小委員會に算珠盤を持込んで妥協豫算を彈き出した本黨の財政通博士。

早速訊きます『金を儲けるにはどうするのが一番いゝのです』答『困りましたな、マア山氣を起さず、都會の附近の土地を買つてぢつとしてるのが一番でしようハ、、、』それからしばらく二人で次ぎの内閣の品定めをやりました。『たとへ本黨だけで内閣を乘取つても大臣の手が足りないから困るでしよう。尤も大藏大臣はたしかに一人ありますがね』と僕がいふと『これはどうも恐れ入つた』と郷太郎さん悦んだ。誰もあなたの事だといはぬ先に、愛すべき郷太郎よ。神よ彼の志を遂げ得さしめ給へ。

鞆之津

鞆之津は海も空も港も、ねつとりとして丁度甘い明るい美しい寒天の中に閉ぢ凝らしたやうな港です。港の形が巴になつてるから鞆といふのださうです。巴の入口の仙酔島と辨天島の間の水道を今源平船戰のやうに紅白の定紋の長旗を旗風に吹きなびかし、四五艘の船が固まつて出て見くのが見えます。鯛網船の出漁です。裸の水夫船頭が踊つてゐます。出漁の儀式ださうです。

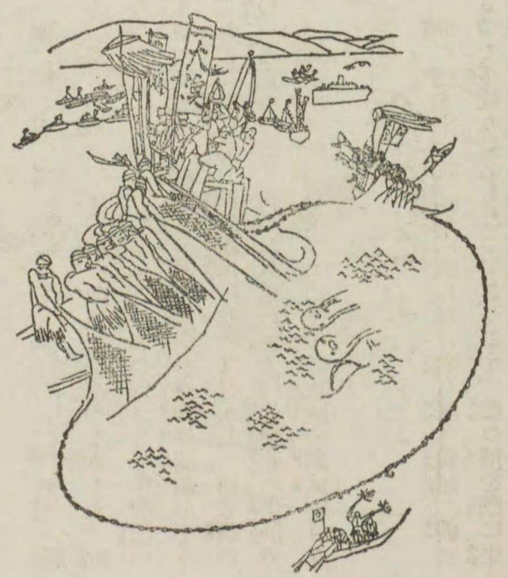
ハリマヤノヨヤセ

沖に出ます。楕圓形に張られた網が既に親船二艘によつて手繰り縮められつゝあります。網の圖を潮に歪め流されぬため手船若干の網で各方面へ張り擴げてゐます。離れて、一艘その船板の上で一人の船頭が塵はたきのものを両手に持ち空間をはたいてゐるのは天地の掃除ではありません。指揮です。漁陣を外巻きにして見物の汽船、モーター、手船等がゐます。何れの船にも黒山の人です。これ等の人々は漁れたら買つて直ぐ食はうとかんてきには火を起し、德利はあたゝめ、胃嚢に胃液まで分泌さして待つてるのです。鯛も苦笑しましよう。界隈海面一面に響く聲はハリマヤノヨヤ、親船で網曳くかけ聲。おや〳〵網の中の平和を亂して何だか大きなものがポカリ〳〵泳いでゐますよ。確に三びき。訊けばこれは海坊主事ナメ魚卽ち海豚。

たゞで撮る法律はない

町長の許しで親船の舳の櫓に乘せて貰ひました。續いて活動撮影技師が一人。すると漁夫は威丈高になり『コラ、人の身體をたゞで撮る法律はないぞ。一升買はんかい』

漁夫達は裸に腰簑をつけて美事な藝術品です。關東荒海の漁師は身體が筋だらけで、蔦が絡み合つたやうです。この邊の漁師は肉團團、恰も正月の供へ餅を數積み重ねたやうです。道理で御神酒を上げると申します。網の引締ると同時に親船へドヤ〳〵見物が乘込んで來ました。船が傾きました。町長は怒鳴ります。『朝日新聞の畫描きの外、船を退け－オイー！』と隨分句調の悪い號令ですが、報道任務には同情のある號令です。



平常着の鯛

三時間目。掛聲がトウ〳〵〳〵からヨイヤサノ〳〵に變り、親船と親船は引挾みて、網は遂に庭の池の大きさになる。この時、再びドヤ〳〵乘込む見物に突き飛ばされながら踏み付けられながら強いて覗くと、海月が蓮の葉のやうに網の池を覆ふてる下に、黑い木片のやうなものが塊つて動いてゐます。これが鯛?! とは、鯛は海の中にゐる時は不常着を着てるのでしようかちつとも赤くはありません。漁師の一人が跳ねる海坊主を提げて氣取つて『畫描き、かういふところを描いてくれ』百目五圓づゝで買つた鯛の肉を豆腐のやうに心置きなく食ひ『これが料理屋だつたら』なぞとケチなことをいふものあり。走島の島蔭で一睡して覺めると、また茶受けに鯛! 晩めしに鯛。『誰ぞ早う、佩刀を持て、予は鯛に取憑かれてあるわ』

福山より廣島へ

阿伏兎觀音

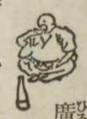
網の戻りに阿伏兎觀音に詣でました。岬の岩の立づまひ兎の伏した姿に似て居るので阿伏兎といふのだ相です。海の江の入口になつて居て誰しもこゝのところに何かほしいと思ふところへ昔の人はちやんと調和した建物を建てゝ置いてくれます。僕がお をあげたのは昔の人への御禮です。お住持から昔の人へ屆けて下さい。美的感覺の滿足と靈的欲求の滿足との一致。殿堂佛法の出現は可なり人間性の自然から出立してをります。ブース大將の救世軍も可なり人間性の自然から出立してをりますが彼の殿堂 ＊と向ひ合つてをります。どちらも本部は＊ハレルヤです。

福山の夜

船から上つて福山で一泊しました。豐饒な海を受けた暖濕の地に惠まれた市。城山に贅澤にイルミネーションがついてゐます。風が落ちた明るい主街を散歩すると溫室の中を歩いてゐるやうです。尙行くと家に小格子が篏つて四角い軒燈が圖案的の距離の配置を以て並んでる町並に出ました。遊廓。『廻れ右オイ!』

かの字づくし

廣島へ入ると廣島の人が『何故もつと一ト月早くかもつと一と遲れて來なサランノカイ』と叱りました。一月前なればまだ牡蠣が食へるし、一ト月遲れゝば鮎が食へ出すのださうです。

『今の名物は無いかい』と訊くと『五月雨に雨傘でもさして酒を＊  ＊歩くぐらゐの事だ』といひました

廣島名物、かの字づくしといふ事があります。

前に申したかきに、かさに外にかみ、果ものゝかきそれから鼻の落ちるかさ——酒も名物ださうですが都合が悪くかの字がつきません。尤も酒も月末の懸勘定にして飲めばかの字がつきます。

廣島見物　その一

宇品軍港

直ぐに宇品軍港へ行きました。

廣島より自動車で二、三十分の道です。

宇品へ行つたには行つたが要塞地の景色は畫家には禁斷の木の果です ＊です、兎に角海があつて如描けば直ぐこれ＊ 何なる大艦も無限に收容が出來、海を圍むに山があつて如何なる文明の利器も軍容を覗ひ知る術がない。だからこの要塞一つのためにでも諸外國は日本を攻める不料簡を起さぬがよいと申

して置きましよう。しかし時勢の進運に伴つて要塞の意味が從來守るべきであつた面の世界の擴大と同時に立體の世界へ向けて層一層增進しつゝあることは事實です。物的に

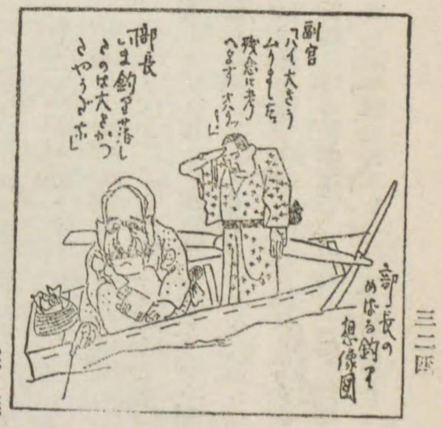
＊陸相も心的にも＊

＊相も猪首の方で寶の處置に向つては好都合の首ですが、高く將來を見も海＊す。猪首は當面現卵すにはいかゞであらう。追々に＊

＊おなりなさいませ。

運輸部長の赤木中將にお目にかゝりました。

問『近ごろのお手柄は』答『ハイこの間の日曜にめばるを百ほど釣りました』して副官には中の幾ひき分けてやりましたか。

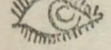


三二四

銀行の預金吸

牧地廣島へ戻ります。市を貫いて水が流れてゐます。河沿ひの家に灯が入つて美しい。後に縣の視學官に逢つたら東洋のベニスだといつて悅んでゐました。今に堂々と教科書に書かれるでしよう。

＊的にいへば本店よりも立派町を通ると、＊に建築した銀行支店が澤山目が年に八百萬圓立ちます。移民の送り越す金だそうです。銀行が競つて美裝して秋波を送る廣島縣人行はその金を＊



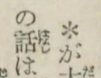
＊んでゐるのです。銀行は小金の＊

＊達です

濱田知事二

濱田知事に官邸であひました。應接間に翠石の生毛まで描いた虎の軸がかゝつてゐます。お役人の應接間に翠石の虎の軸は附ものです。若し誰か脚本を書くとしてその中に官邸の應接間が出るならト書きにこの翠石の虎の軸さへ描き込めばその場を浮き出すことが出來ます。

濱田さんは拓殖局長からこの任地について日がまだ新しくあります。住み具合を訊いたら、酒がよく、うまいものが澤山あるから非常に幸福だ相です。なほ所感を叩けば廣島縣は物產は豐かだが小資本割據で無駄が多い。廣島市は戰爭毎に發展した土地ゆゑ＊



＊が大事にされる。等です、後ゑ興味を持つて聽くよりも實行に移して頂くのを希望すべきです。後に警察部長から聽いた話ですが役人は前任地の親しみが中々失せなくてよく前任地の話を新任地の縣民にして嫌がられる相です。丁度後妻に先妻の話をする夫のうつかりさのやうなものですかな。

この話なぞは人間味があつて面白うムいました。

夫婦仲

そこへ夫人が出て來られました＊

＊第一の淑德夫人と見え廣島社交界の話を訊いても流慮勝ちですそれをそばより濱田さんが『ドーダエー、愛國婦人會や廣島夫人會の×話でもしたら、

＊しましウーンエー』と、＊

＊の情合です。縣民はお見た。＊

習ひなさい。

松より支柱

師團司令部の城門を入ると若葉の中から附劍が突け出されます。＊

＊これが兵隊さんの挨拶です。ヒヤリとしながら帝國萬歳を唱へました。日本の軍紀はまだ〳〵綱張してをります松の木の支柱が多分工兵隊の作業になる見事なコンクリートで出來てをり松よりも支柱の方が見ものなのも陸軍式です。

岸本中將

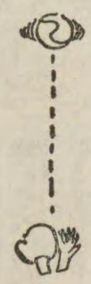
師團長の岸本中將に會つたら國民教育のフン圍氣として都會文明の煩瑣を嫌忌し深山大澤にこそ大人物は生れるのだと軍人らしきトリックを用ひて主張しました。一ッ劍舞でも踊つて氣に入りましようか。

廣島見物　その二

比治山公園

頂上の平地に日清戰爭當時の舊大本營の御便殿が奉安してあります。質素な板柱にも明治大帝の御神格が薫習されをり、柵の外に拜するものをインスパイヤいたします。

廣場で學生が＊



＊して居ました藤の棚の花が盛りです。

廣島市の富

崖の端に立つて市の空を嗅ぐとうまい晩めしの匂ひがします。廣島市民は富んで居るらしい。處々にライスカレーの匂ひが立つてゐます。學校の寄宿舍が澤山ありますね。この肉の少なさうな＊

の多さうなライスカレーの匂ひは學校の食堂でなければ立ち得ぬ匂ひです。僕も美術學校の食堂で馴染みの匂ひです。なつかしくあります。

淺野老侯

老侯が日別莊で御親族を御馳走なさるのをよそながら拜見いたしました。老侯の＊

＊へもたれ方に感心いたしました。こんな大樣なもたれ方は一代や二代の脇息の馴染みでは出來る格好ではありません。

その老侯に泉邸で親しくお目にかゝりました同道の案内役が舊藩士でしかも彼の父が帶刀御免になつた光榮をいまだもつて忘れない人物ですから、やかましくもあります。何でも老侯の前へ出たら、向ふのことをおかみ自分のことは名前で申上げるのだ相です。自分の名前や苗字を名乘り上げることは＊

＊外史が好きです彼はよく『長岡は只今、萬歳三唱の發聲を勤むる光榮を有します』なぞ堂々やります。然し僕は嘗て一度簡閲點呼の時やつて不得手なのに驚きました。けれども覺悟を極めて行きませう。

床に土佐派の三幅對のかゝつてる泉邸の應接間、座敷は古びてゐますが＊

大柄で氣品は勿論十分、且、寛濶の感じがする老人です。『一平はおかみなぞにお目にかゝるのは昔なら中々難かしいのですが、聖代の餘德で——』と汗を搔いて申上げると老侯『何にしろ昔は籠の鳥でしてねハゝ、』といはれたので猶豫なく＊

＊を徹廢し『あなたは金勘定なぞ御存じですか』『その

＊です。老侯がお出ましになりました。

方は判りません、――けれども、これで御維新の時には勘定方に向けられましたハ、、、『今の御生活は』『毎日、謠か手習ひですが、人に遇ふのもこれで中々多いのです』なぞの問答によつてレポーターの任を盡す事が出來ました。老侯は昔伊太利大使をした事もある相です。老侯は八十幾つだがスケールも大きく物事の＊

＊が確かりしてゐて、これが若し藩侯の運命に居なければ今でも政界の重石となる位置に座つてゐやう。そのどつちが幸福かは別問題として。

廣島見物　その三

泉邸

岡山では後樂園。廣島では泉邸です。後樂園の見晴せる快濶に對しこれはこんもりとして幽邃なのが特長です。彼に洋趣味あればこれに支那趣味があります。

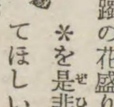
矢つ張り池があります。支那風の橋が架つてます。枝振り面白き松を隊長にさま〳〵の樹が密生し池を襲ひ籠めてゐます。

＊が現實離れのした色羽で人の目を覺ますやうに游いで行きます。この池を中心に山谿を辿るやうな處或は密林の庵を訪ふやうなところなどの各種の景趣が配置されてゐます。それを慥へるよりその

＊の名前を＊

ふやうな難かしい名前の名所が澤山あります。この園は支那西湖の佛を寫したのでまたの名を縮景園と申します。今は躑躅の花盛り。

岡山の人も、廣島の人も後樂園と泉邸との＊



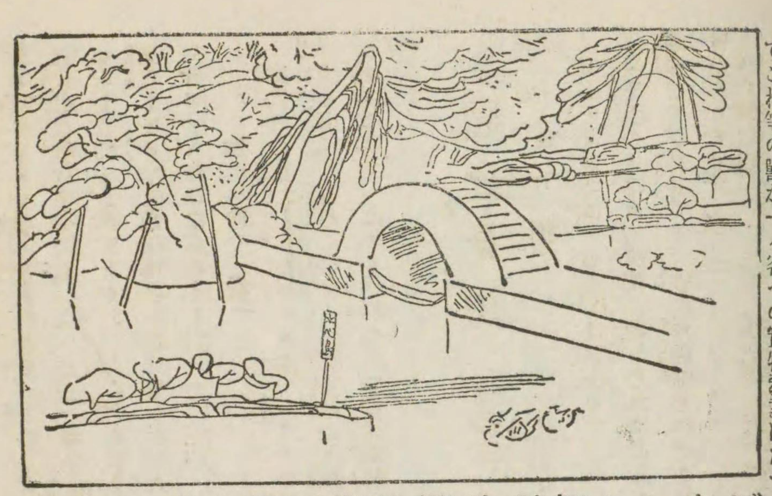
＊を是非つけてほしいと申されました。然し庭の審判は野球の採點のやうにも參り兼ねます。折しも雨。ドロンゲームに致しましよう。

動物園附料理屋夜店

日――別莊といふ料理屋は動物園があるので東洋一？だそうです。中々珍獸を貯へて見ものです。それでこれ等の獸が一々客への實物教訓になつてるから親切なものです。すなはち＊

＊の起誓は川うそ、その川うそがゐます。猛々のやうに飲むと身體に毒の猛々もゐます無理して遊べば頓てハダカテリヤもゐます。――客の敏感の程度によつて。これ等の獸がどのやうな意見の象徴にも聽かれます。中にも『夜中にアハ、と笑ふ小が＊

＊實際居るに至つては諷し得て頗る深酷です。



中國漫畫行脚

夜店

廣島の賑やかな夜町を散歩しました、カフェが澤山あるので町のハイカラが知れます。飯の菜になるやうなものを小皿に盛り分け硝子箱の中へ陳べ賣る露店があります。紙の大道せり賣やの口上にいはく『この鼻紙を一枚のまゝで使へば一シメで一年二ケ月。半分に＊

＊つて使へば二年と四ケ月。四ツに切れば四年と八ケ月――』

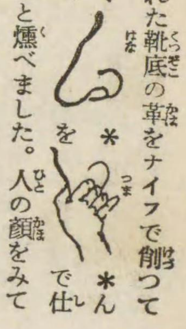
宮島詣て

アイスタイン博士の追想

宮島へはかの相對性原理の＊

＊博士と一しよに來たことがあります。博士は朝食の皿を二皿以上つけるとこれを斥けた程質素な人ですが、やいちやなところもありました

ある夜ホテルで彼は剝れた靴底の革をナイフで削つては火鉢に燻べます。臭いからよして下さいと＊方話しで申すとなほのこと燻べました。人の顔をみてニヤリ〳〵笑ひながら——



案内者

案内者の商賣道具は＊

＊一本です。彼はそれを帶の間より取出して商賣を始めました。これが清盛の入つた大風呂です脊中は佛御前がお流しいたしました——

大鳥居

『之が三笠濱の大＊

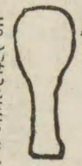
＊楠でございます。片一方のお柱はさぬきの高松、片一方のお柱は日向の佐土原から參りました。三抱へ抱へまして二丈も剩ります。手前共の家の大黒柱より少々太うございます』——

一本調子

案内者は冗談をいふ時も顔の筋一つ動かしません。和歌を朗吟する時も同じ調子です。道に松が倒れてゐました。すると矢張り同じ一本調子で『これは今日の雨で倒れました。公園係に申しましたがまだまゐりません。お廻りになりましてもよろしうございますがお＊考へます——』また同じ調子で餅を食はせもします。なにしろ毎日大勢の事ですから一一顔の筋を動かしては顔の筋がくたびれるだらうと思ひます。

宮島杓子

千疊敷の堂に紀念に奉納した＊



＊が大きく取纏めてあります。怪物のやうです。これは日清戰役當時出征の兵士達が敵をめし取るといふ緣起を祝つて奉納したのが始まりださうです。案内者の說明を聞いてると、歷史上の人物は必ずこの宮島へ來て何かして行つたことになります。

案内者大學

然し彼等の說明は歷史、宗教、文學、美術、工學等にわたり頗る該博なものです。夏期大學流行の今日彼等を敎授に聘して＊大學を催しませんか。大學聽講料一人金十五錢也團體は割引あり。（左圖　杓子に描いた即興畫）

錦帶橋見物（二）

御足勞をかける橋

橋一つの爲めにわざ〳〵汽車を降りて寄り道をして高い宿賃を拂つて見物に行くのは日本國中廣しと雖もこの錦帶橋だけでしよう。人に御足勞をかける橋だと思ひ乍ら夜、岩國驛より自動車に乘り廿分程にして＊

＊中＊

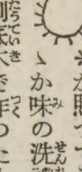
＊の音の聞える橋畔の宿屋に着ました。日本人は大概はしで飯を食ひますがなかんづく此宿屋は名所のはしで＊

＊を頂いてゐるのです。

朝

眠い眼をこすり〳〵宿屋のつゝかけ下駄で表へ出て見ると成程大皷形の山橋が架かつてる。然も五つ。一體このあたりの景色、兩岸の山腹は孟宗籔の淺綠に覆はれ、柔かく煙つてゐる。

處々を松の濃綠が調子をつけてゐる。肉色をした廣い河原に、細い河瀨の水は澱まうとしては流れ翡翠の斑の渦卷を見＊

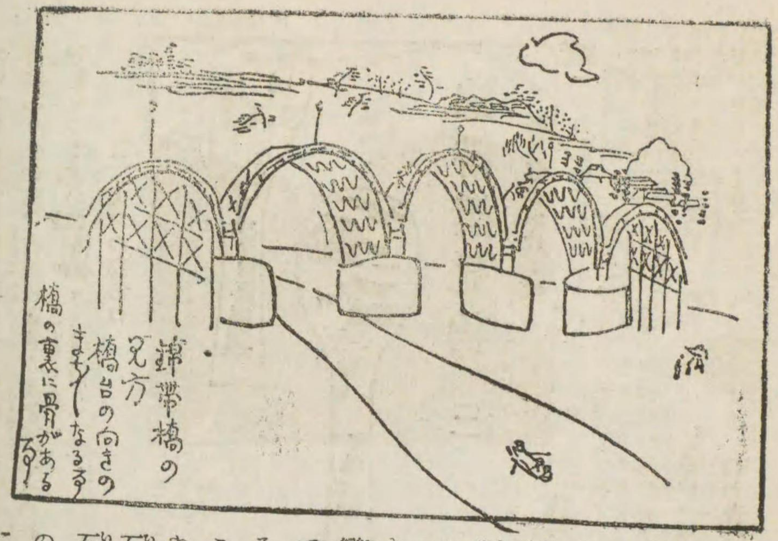


が照つてる。その新鮮なあたせてる。朝の＊〳〵か味の洗禮を受けた五聯の橋のカーヴの節奏は到底木で作つたものと思へない。生きて走つてる。人間の生命と同調の節奏をもつて！橋を見て心が勇躍しました。兩岸の＊

＊の聲と橋普請のてうなの音が長閑です。

橋を渡らうとするとこの橋は下から＊

る橋だと土地の人は吐



りました。橋臺の形が水流に從つて向きを變へてゐるところや、石と石との間に鉛がついであるところや、橋梁が脊柱骨の組合せのやうなセリモチになつてゐて骨一つ除いても橋はばらばらになるところやを研究した上感服すべきだ相です。僕が研究に不熟心なのを見てその人『お前工學士ぢやないのか』と聞きますから素人の由答へますと『そんなら橋上でも渡るがいゝ』橋上を渡ると大皷形だから上つたり下りたり〳〵——戻るのにもまた上つたり下りたり〳〵——

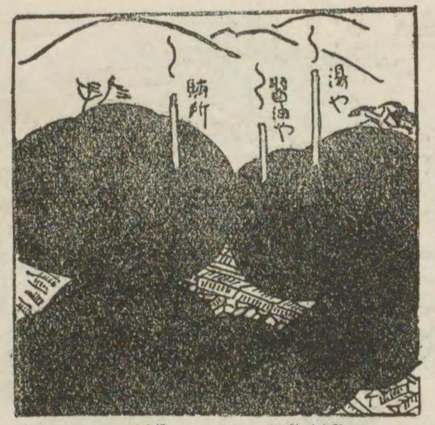
＊で渡る橋ではない。

山口見物　その一

(一)山口の惡口

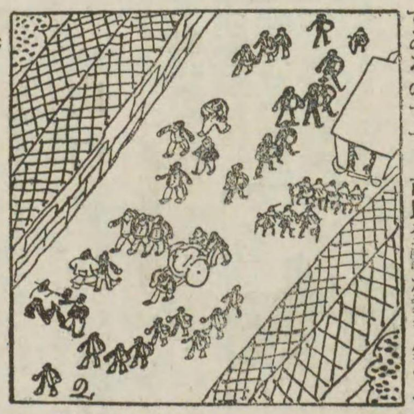
何といふ閑かな市でしようか。家々は青葉の底に埋もれてゐます。

見渡したところ市中で煙突は三本しか見當りません。その煙突も一本は湯やの煙突で一本は醬油やの煙突で一本は學生賄所の煙突です、何といふ工業嫌ひな市でしよう。何といふ生産的な市でしよう。——と申すだけを聞いてすぐ怒り出すやうでは、長州志士の後嗣ではありません。吉田松蔭君が黑船乘込みの時の忍堪さをもつて次の章を讀んで下さい。



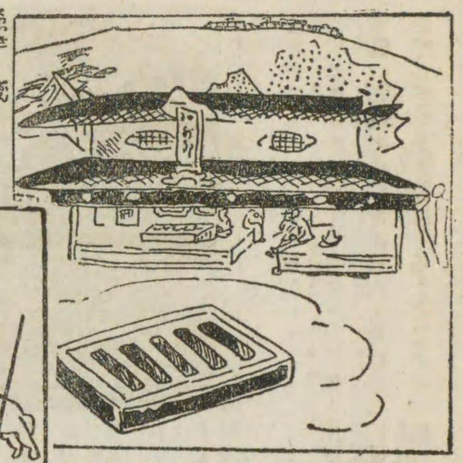
(二)山口の褒め口

ところが一たん町中へ入ると驚きます。蟻の行列のやうなのはみな學生ですズボンの腰が手拭掛けでもあるかのやうに必ず手拭をぶら提げ日本は年中雨期かのやうに必ず高足駄を穿いて闊歩して行くのは高等學校の生徒です。士魂商才が算珠盤と簿記帳とを抱へ宿題の苦情をいひながら行くのは高等商業の生徒です足ごしらへを嚴重にするためにより、體操點を引かれぬ爲の用心がよりよく彼に打克つて、揃つてゲートルをつけて行くのは中學生です。女學生は氣が弱くて親の命令通り、降りそうな日だからとて邪魔な洋傘を持つてゐます。兎に角山口は町全體を擧げて教育に捧げてゐるのです。市民全體が教育家です。これを洋の東西にその比を求むるならば。英の牛津市あれに寺院の尖塔とユニフォームを除き去り、長州武士の氣節を加へただけですこれでもまた褒め足りませんか。



(三)うゐらう

山口の漫畫材料詮衡委員が先づ以て筆者を連て行つたのが町外れのうゐらう屋です。成程厳重の道中繪か



回忌の分を一つすましました』うゐらうは外郎と書く。羊羹の従妹に當り、心太の祖父に當る樣な味と柔かさだ。この不得要領のうまさを三

ら抜け出した羹な店ですをばさんに訊くと『何年前からあつた店か知りませんがつひ此間も百五十

浦觀樹將軍がよく來て腰掛けて味はつたさうです。

(四)山口町長

詮衡委員が次に見せたのは山口町長の通勤振りです防水マントを着て自轉車で通ふところが詮衡の特典に強つたのださうです。

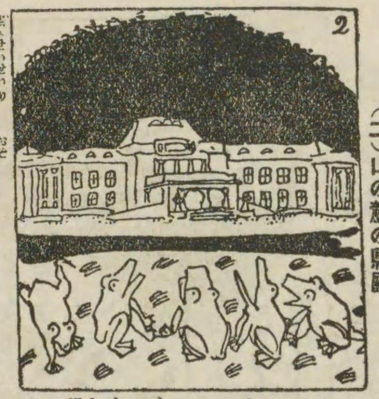
山口見物　その一

(一)龜山銅像公園

龜山公園へ行きました。陣笠、陣羽織だの、烏帽子直垂だのを着た武張つた毛利歴代の銅像が廣場をぐるりと取巻いてゐます。臺石には福原清水なぞ長州征伐で名高い家老の肖像が彫込まれて

あります。然るにこれ等の英雄豪傑を物の數ともせず大口開いて雜誌を枕に廣場のまん中に寢てゐる書生があります。見上げた度胸です。この人を長州征伐の大將にしたらよかつたでせう。(行つたころ)

(二)山の麓の縣廳



山口は町で縣廳の所在地なのも珍らしいが、そのまた縣廳が山の麓にあるのも珍らしくあります。實際の役人がみな青い顏をしてゐるのは、行政整理を恐れてるのではありません。山の青葉が映るからです。前の田で蛙が

ゲツキユコロ！ゲツキユ！コロ！月給ころ！

と鳴いてゐます、成程役人の月給ころに違ひありません、モウ五月も月末ですから。

(三)大森知事の書

知事さんは部屋で字を書きかけてゐました。水産講習所の船に彫る船名ださうです。長周丸と書くべくして、長から周の字に移りつゝあるところでした。そこへドヤ〳〵われ等一行が入つて行つたものですから、周の字がいぢけて長の半分程になりました。『見てゐられてはどうもうまく書けない。晩にうちで極祕親展で書かう』と紙を丸めてしまひました

大森さんは知事で年少の方ですが、この位の年配で字がうまく書けたら先はとまりです。超然内閣の首相の氣に入つて書記官長を内閣の壽命と同數の十日程勤めるのが落ちでしよう。將棋さしや、左官屋や政治家は字は拙い方が技倆が確のやうに見えます、大森さん極

祕親展で書かなくてもよい。

(四)ゴリの膾

詮衡委員が名物ゴリを喰べさせました。町の溪川で漁れる小さな魚です。椀の蓋を除ると、みな臍を出して浮いてゐます。委員達が臍ではない、鰭吸盤だといひますが、僕にはどうしても臍自漫の魚だとしか受取れません。

山口見物 その二

霽山堂

維新の元勳達が大業を謀議した質素な茶室です。六疊八疊三疊とありますが、三疊へ入る低い鴨居では氣の早い高杉晉作君など、額を＊けたことでしょう。

血管の模型

壁を血管の模型のやうにヒビ破らし、それを絆創膏のやうにセメントで貼り綴つてある建物があります。何だと聞いたら、赤十字病院。成程。

松茸は枝に實る

高等商業學校は入口が一寸異様なので、高商寺といはれたそうです

今は沒したが、こゝに佐々木先生といふ英學者がありました。學問一方の世間知らずです。あき松茸狩に連れて行かれて、『松茸はどこに實つてる』と上の枝を眺めてゐたさうです。

高等學校

教頭の靴下が＊ダブリと＊んで、高等學校の教頭らしい蠻足です。生徒の教室が爬蟲類の標本のやうに甲類乙類の名で分けられてゐます。教員室の掲示板に卒業生より先生達への繪葉書が來てゐます、『ゐること一ケ月餘り、さしもの大ブリテン國も委く會得することを得ました。寅之助』一ヶ月で大英を會得した卒業生を學校は誇るべしです。教員食堂で國語の先生もドイツ語の先生も同じ辨當で榮養を攝つてゐられます。同種の肥料でドイツ語の花も咲かせれば、日本語の花も咲かせる。先生といふものは勿論植物學では解釋出來ません。

生ける維新史料

熊野九郎さんといふ當時の事情に詳しいお年寄が一人、こゝに遺つてをられます。お耳が遠いので山口中での健啖家で大聲の、辯護士副會長＊さんが通譯の勞を取つてくれられました。

問『當時の流行唄を聞かせて下さい』答『男なら鎗を擔いでお仲間となつて、ついて行きたや下の關、女ながらも武士の妻尊王攘夷ときくからは、薙刀おつ取り締めだすき、神功皇后が手本ぢやそうな』問『維新の豪傑は大概女ずきのやうですが先輩は叱らなかつたのですか』答『聞多さんと俊介さんとは女のことばかり喋つて固い者は＊＊がりよつた。しかし、さゐたつぱりしたので、當節の學生がアレも買つてくれ、コレも買つてくれといふほどの調

子で小使を先輩にねだつてゐた。當節の政治家のやうにワイロは取りやせん――』

一ケ月學費十二圓

山口より高等學校の學生が二人小郡までわざ〳〵同車して、彼等の同志九人が十二圓づゝで生活して貯金まで出來てるといふ自炊寄宿舍の話を聞かせてくれました。彼等の一週間の獻立表を御紹介いたします。

	朝	晝	晩
月	葱油揚	ミソ、タクワン	菜つ葉
火	麩	ミソ、タクワン	カラ（人參青物）
水		ミソ、タクワン	鰯魚一人二尾
木	菜つ葉	ミソ、タクワン	三ツ葉 汁
金		ミソ、タクワン	ニシメカンピヨ入人參ゴボー
土	葱	ミソ、タクワン	トロロコブ

か ＊ばかり食つてて骨が柔かくなりませんかとう＊心配したらその代り『日曜にはエヘ、、』といつた。日曜には『エヘ、、』を食ふものと見える。この感ずべき寄宿舍の名は磨――と發表しかけたが待てしばしだ。評判は却つて青年の毒にならう。諸君が世評に動かされぬ齡に達した時美談として自然に流布されるを祈るべきである。ところで僕は一ぺんお家へ＊向ひでの＊

＊は味氣ない。

＊夜毎宿屋で旅鞄と差

（をはり）

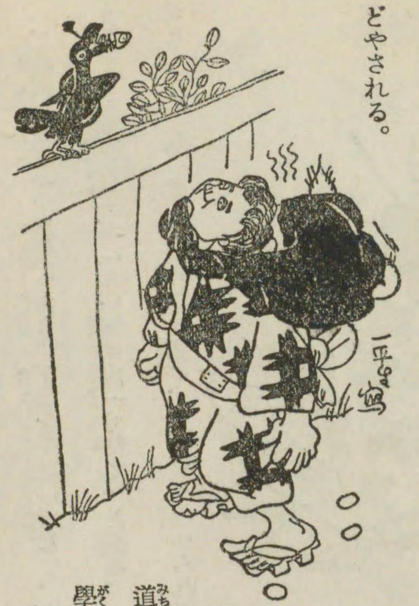
スポーツ漫畫漫文集

取的時代

（力士生活スケッチ）

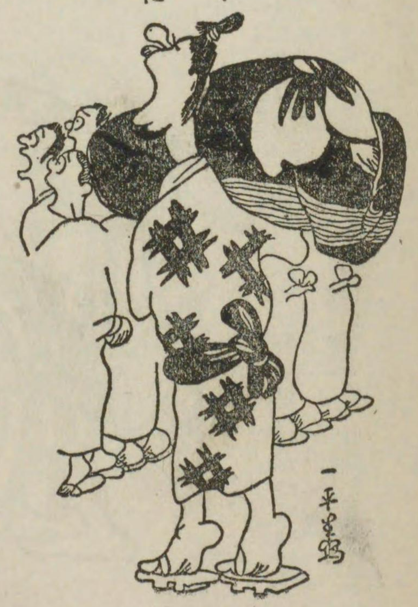
一、飯貰ひ

協會から、炊出しの飯と、澤庵と唐辛子味噌とを貰ひ、背負つて歸る途で、烏にからかひ、時間遲れて、關取にどやされる。



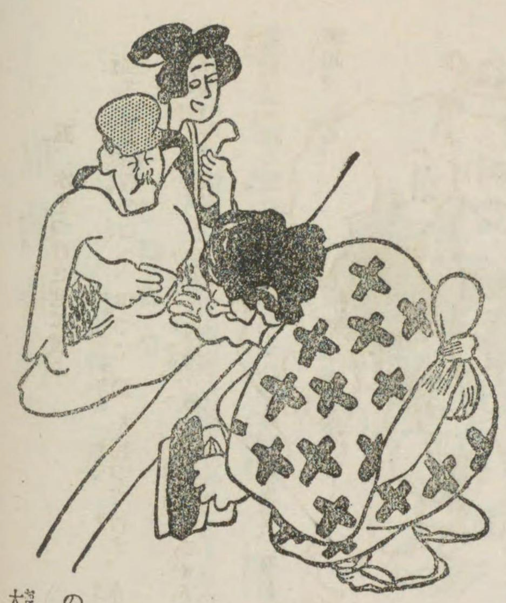
二、見學

少し早目に、土俵溜へ運ぶ關取の座布團を擔ぎ出し、花道で待ち乍ら人の頭の上から、先輩諸君の相撲振りを見學。



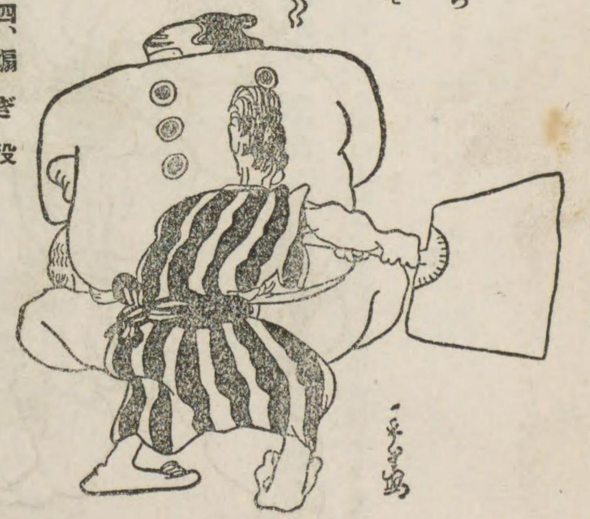
三、役徳

ご贔屓の旦那を、棧敷へ送り、下駄を受取一禮して、立歸らうとする刹那、旦那が『おい團子山一寸待て』と來る。モジモジしてゐると、掌へ四角な紙包み、テヘテヘ堪へられぬ。



四、煽ぎ役

土俵から上り、手水をつかつた關取は、熱がつてゆで芋のやうに、湯氣を立ててる。廣い背中の、お灸を目がけて大團扇で煽ぐ。これも一役。



五、水をつけさせて貰ふ

強さうな關取の口へ、爭つて盃を持つて行き、水を半分飲んで貰ひ、殘つた半分は自分が飲む。關取にあやかる樣にとの緣起。

六、汗こき

汗こきで、關取の腹をこき乍ら

『早うこないな太い腹に、なりたいもんやなア。』

七、幼稚園

關取に兩腕を掴まへられ、後じさりに歩るく關取の足について足の運びの稽古をして貰ふ。稱して幼稚園。

一平寫

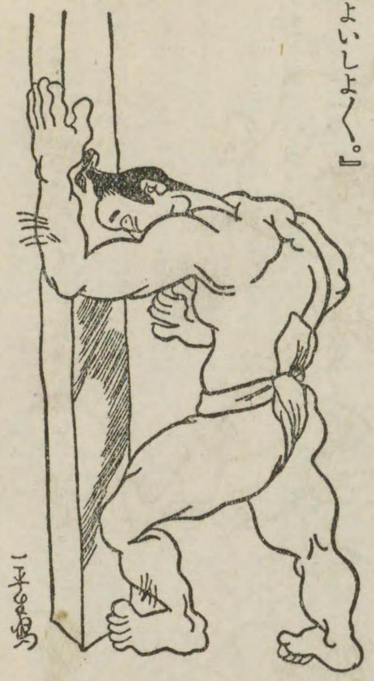
八、稽古

關取の右肩へ頭を、兩腕へ手をあてがひ押す稽古。力盡きへたばると、兄弟子が來て『この野郎、モ一丁行け行け』と弓の折れで脅かす。

一平寫

九、獨稽古

關取が忙しくて、稽古がつけて貰へぬ時は、柱に向ひ頭を打つけ、額を固めると同時に、手と足を運ぶ稽古。かけ聲『よいしよ〳〵。』



一平寫

十、三助

稽古が仕舞ふと、關取のお湯のお供。嘘ぢやないきんたまの脂まで流す。

一平寫

相撲の稽古

一、大錦の皮肉

今度は相撲の稽古を思ひ立ち師匠には大錦卯一郎君を見立てた。何も素人の痛つぽちを弄くつて貰ふのに斯程の大力士を煩はさんでもよいのである。併し稽古の始めは大抵抛り出されて許り居るに決まつてる。同じ抛り出されるなら相手が無名の丸太ン棒であるよりは天下の横綱なる方が自尊心を傷ける程度が薄いといふものだ。大錦君は巡業の歸路上州高崎に居たのを訪うて志を申入れた。大錦君が失笑した。それでも承知して湯にも入れ晩餐も一しよに喰はうと言つて呉れた。新弟子にしては叮嚀過ぎた扱である。湯殿には雲突く許りの力士が二人裸に締込みして待受けて居た

少しギョッとした。湯槽から上つて來る自分を摑へ石鹸を塗り小判型の刷毛で擦り始め自分は體量十五貫ある體格檢査でも上の部だが側に相撲取りが寄ると誠に見榮えが無くなる。其うち背中を共同で洗つて居た取的二人がつまらぬ爭ひを始めた。

『ヤーイわれの手をモツとねきへ寄せんかい、邪魔になつて洗やへん哩』『ねきへ寄つたら洗ふ處有らへん哩』『どだい、こんな小つこい背中へ二人かかるのんが阿呆やい、足へ廻れ〳〵』で弟子が脚へ廻つた。脚とても同樣小つこくて洗ふ處があらへん譯だ。隨つて暇潰しに同じ部分を擦る、痛い、それに脚の刷毛は背の刷毛よりも餘程毛が硬相だ。夫も其筈一方の刷毛は横綱用の刷毛、一方はお客に使ふ素人用の刷毛だ。膚の觸り具合から考へて此硬い〳〵刷毛を平氣で受ける大錦君の皮膚は少くとも馬より丈夫で無ければならない。

二、横綱と並んで

大錦君の座敷には牛鍋の御馳走を箇袖の取的が二人取賄つて居る。『巡業のホリ（折といふ時の大錦の言葉癖）はこれ等が女房の役も三太夫の役も按摩の役も一手で引受けるんです』と大錦君が自慢氣に言ふ。鬼の樣な取的君が少しはにかむ。大錦君は下戸で四五杯も猪口を受けると全く紅くなる、それで居て飯もタント食はぬ。牛肉も半斤とは食はずして茶漬を普通茶碗に四杯輕く流し込んだ。殘つた大部分の牛肉は廊下を隔てた取的の部屋へ運ばれた。取的の部屋が俄に賑になる。それを眺めて大錦君が嬉し相に『あの時代には

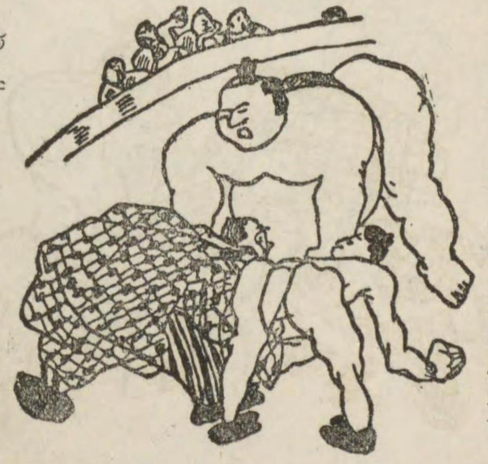
全く收入といふものが無いのですから師匠が氣を付けて力になる食物をわざと、あゝやつて殘してやるのです。』云々今の横綱も殘肴の惠によつて育まれた。牛鍋の殘りに歡聲を擧げ居るこの未來の横綱達にも幸多かれと祝福してその夜は寢た。翌朝は大錦君と並んで二人曳の俥で場所入りする。巡業の捉として力士は力量、位置の如何に拘らず二十八貫以上で無ければ二人曳きを付けぬ規則だ、さすれば十五貫の自分は十三貫だけサバを讀んでる譯だ。それでも何でも馬鹿にいゝ氣持ちだ。場所は市内の不動堂境内にある。櫓には型の如く擂音爽かに、天下泰平、國土安穩の祈りを赤城山の峯の雪に轟かして居る。

三、四股や掛聲

木戸を入ると地べたを掘り爐を拵へて一行幹部の年寄達が廻りに焙つてる。大錦君は檢査役入間川の側へ割り込むや早速鹿爪らしい議論を始めた。稽古の催促すると大錦君が氣の毒さうに

『實は巡業中の風紀に關する問題が起つたので一寸手を離せぬ誰か代りにさせますから』と小常陸君と若者頭雷ヶ浦とを呼んで自分を引渡した。二人は自分を不動堂の庫裡へ連れ込み締込みをさせて呉れた。『上州の空つ風つてそりやあ寒うどアすぜ』

とシャツと股引を着た上普通の取的は五まはりで濟むうんさい（纏し）を七廻り廻してあとはだらりと尻へ垂らす。いゝ形おや無いその儘土俵に引出された。雷ヶ浦は角技の淸通者芝居道に於ける新十郎といふ格だ新弟子を扱ふ事にかけてこの上は無いといふ人。傍で仕方を示し教へる。土俵にしやがんで塵を切り、兩手を開き掌の裏表を敵手に示すは種も仕掛けもムらぬといふ意進んで砂を兩腋に塗り、四股を踏む。上體は眞つ直にして足だけ高くあげよ。眼は一間先の土俵を見よ。砂を蹴る氣持ちで脚を踏み下す時必ず足尖よりせよ、踵は不可、踏んだ拍子に『ハッシー』といへ云々。夫が中々巧く行かないので散々繰返す。此時既に場内に滿員の高崎の角狂連怪訝な顔をしてそろそろ湧き始めた。



四、三人相撲

見物の聲として『芝居の鼠イ！しつかり賴むぞ』といふのがある。シャツと股引の縫くるみに締込みの尾を垂らし居る自分に對しての評である。又『小常陸イ、助太刀も遣つちまへ』といふのがある。雷ヶ浦を自分の助太刀と認めての評である

聞えるかして向ひ合ふ小常陸君の臍がクッ〳〵笑ふ、誠に氣が入らぬ。仕切り方は愈々以て難かしい。腰を割つて膝に力を入れる。兩掌は輕く輕く握り廣からず狹からず地に置く。顎を思ひ切つて引き、額越しに敵の眼を見る。素人は眼玉の筋が延びて無いから見えぬ。慣れると伊勢關の樣なお出額でも額越に見える。關取に打突るを鐵砲と稱して居る。相撲道の言葉に『押さば押せ引かば押せ押すに手段なし』とあり押し方一つだ『肘を堅く兩脇につける。隙くものは常に小石を挾んで慣らす、足並よく進んで頭を關取の右肩へ持つて行く。』と以上右の實際を雷ヶ浦は小常陸君と協力して予の身體の上に施した。自分は雷ヶ浦の力で木偶の如く取扱はれ最後に頭を小常陸君の右肩へトンと打突けられた。頭は暫く肉の中に埋まり頓て彈ね返される時呼吸をすつかり切らした。兎に角これ丈けでも獨立して出來る迄には半年以上かゝる。鐵砲の卒業は三段目以上がと聞いて打切りにした。小常陸君の部屋で晝飯を喰ふ。御馳走は葱鮪だ。國ヶ岩君が香を嗅つけて『一杯饗んで呉れ』と入つて來た。『これぢや食へんからのう』と差出す賄の上には鹽鮭が一片れ佗しく冀つてあつた。

怪物取組畫譜

（出羽ケ嶽その日その日）

一

つまらなくて、だれた國技館の中にたゞ一つ、つまつて吃驚するものがある。それは幕下二枚目、出羽ケ嶽君の巨軀だ。彼は身長六尺五寸、體量四十二貫あるそうな。象のやうな身體を猫脊にして勝つても負けても海豚のような細い眼は柔かく眠つてる。四十八手の裏表も彼に對しては桁が外れる。世の中で呆れる事が好きな人の爲めにこの怪物の毎日の取組振りを紹介しよう。昨日は楠錦にこんな風に負けた。

一平

二

この日の相手、雷ケ梅も六尺豐かな長身、但しその太さに於て出羽君とは西洋のマカロニとそうめん程の相違がある。わがマカロニ關はそうめん關に右管で押し行かれ土俵の劍ケ峰で危險迫ると悟つても相手を突き離さうとする狀、恰も『オイ、君、離して呉れては どうだね。さう押すとおれはひよつとすると土俵の外へ出て仕舞ふかも知れないよ』といふ如し、悠揚として居る。そのうち彼の兩足は持主の身の安泰を圖り土俵の外へバランスを取りに出る。

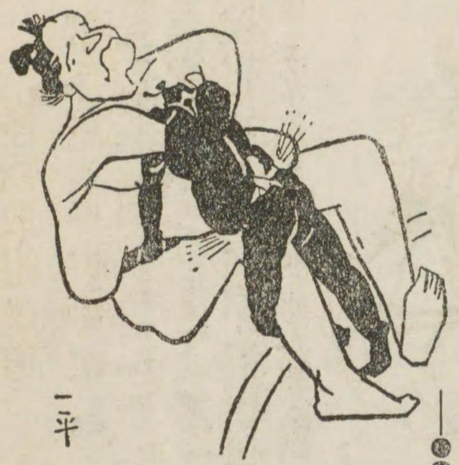
出羽ケ嶽星取表
——○●●●

一平

三

相手の朝ノ森はまつたの多い力士。出羽君もあまり立ちの早い方では無い。そこで何遍か仕切り直す。その度に、大きな袋のやうな身體をぐだらぐだら搖つて恰度子供が嫌ひなお湯に入れられる時のやうな澁つた態度で土俵を上下する。取組は二本差しの朝の森を貫で攪めてるうち左外がけで押し倒される。

出羽ケ嶽星取表
——●●●○



一平

四

この日は出羽君大出來である。江戸崎がかゝつて來るを閂で締めつけ、どうやらきめ出して仕舞つた。戰ふのにいつも相手の脊に釣り合ふやう身體をくの字に曲げて相撲はねばならぬから彼怪物はいつも、身體の半分の力しか使へぬやうに見える。

出羽ケ嶽星取表
——○●●●○

一平

五

今日は出羽君の取組は休みだ。梅雨を催す小雨の日。恐らく怪物は部屋に居て弟子達に身體を揉ましてるに違ひない。十兩の事ゆゑ、こんなに多勢弟子は居ないかも知れない。又湯呑みを擔いで運ぶ圖柄もあまり馬鹿馬鹿しいやうだが、彼怪物の休息圖を想像するとどうしてもこの冗談をつけたくなるこの意味に於て冗談は眞實になる。

出羽ケ嶽ケ取表

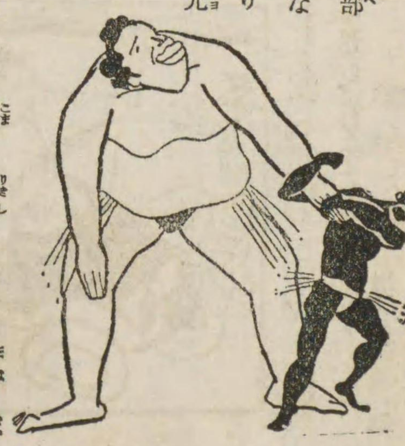
——○●●●○

六

相手の陸奥ノ花もそんなに細かい力士ではないが出羽に向つて仕切ると四階見物より『小さいのーイ、確かりしろ』と怒鳴られる。怪物の前に出るとどの力士も固有名詞を失ひ一に小さい力士として概念化されて仕舞ふらしい。仕遍り中陸奥に計文あり二度怪物の左手に取り付きとつたりの氣を見せる。渾身の力にても、引つ張られても貧乏揺りもせず微笑する處は大と小の價値を十分現してるが扨勝負となると物理學上の定理は應用されぬ。乞ふ星取表を見よ。

出羽ケ嶽星取表

——●や○●●●○

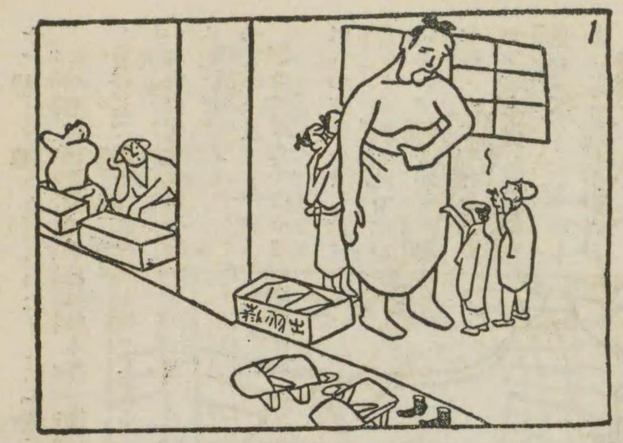


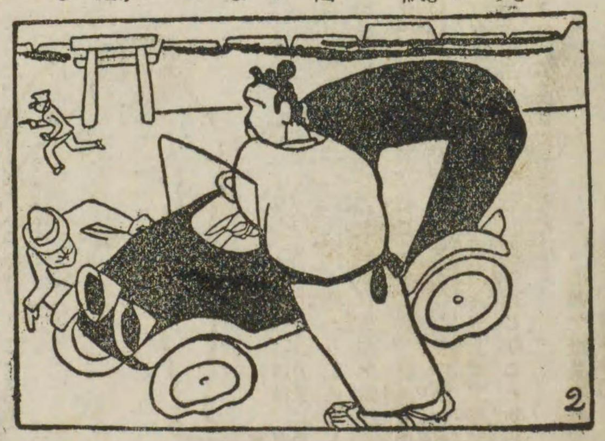
怪物と飯を食ふ話

上

死んだ小説家の獨歩は天地に驚き度いと申しました。わたくしのは少し違ひます。時々呆れるやうなものに打つからぬと生命が居眠りをして仕舞ふのです。

ふと相撲場へ行きました。出羽嶽といふ力士の馬鹿々々しい大きさに少し呆れる事が出來ました。廣い世界に同じ心持ちの人があるかも知れぬ。呆れをお福分けする積りで五六日土俵上の怪物の動靜を繪でお知らせしました。

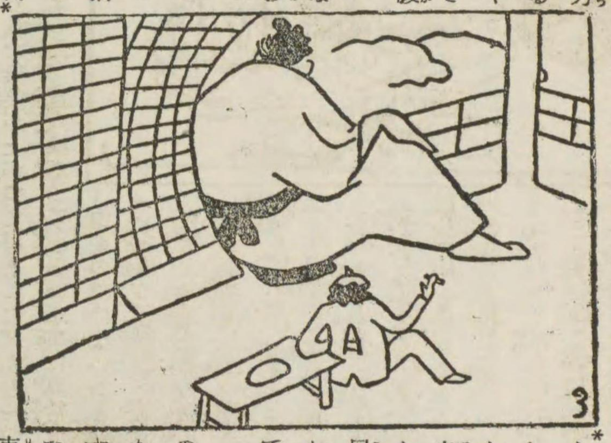




ところがこゝに怪物に紹介合せようといふ人が出ました。訊すと醫學士で歌人のS氏の奥さんです。S氏ならばわたくしの淺い知人でした。そして出羽はS氏の兩親が養ひ子として愛し育てた關係の力士ださうで

す。呆れを深める爲めわたくしは一議に及ばず承知致しました。

西の控へ部屋へ行くと怪物は今土俵から上がつたところです。奥さんがわたくしを紹介しても怪物はお辭儀をしません。遙か上の方で難かしい顔をしてるらしいのが仰向くとやつと覗はれます。奥さんが怪物の大きなお腹に向つて言ひました。『文治、お前失禮ではないかい。何とか御挨拶を申上げな』とそこでやつと上の方で水底の破鐘のやうな聲がしました。『新聞に繪を描いて呉れねえ方がえゝよ氣になつて力が出ね*物珍らしく撫で廻しました。進んで運轉手臺の機械に指を觸れると『あち……』と笑つて『こゝ熱いぞ。觸つて見ろ』と言ひました。わたくしはそれより怪物が寄りかゝる爲め車が傾いでゴム



3

*え』成程彼は此場所負けがこんで居ました。わたしは笑ひました。奥さんはばつを悪くしてそれから諄々とお腹に向ひ人氣商賣の力士は誰人にも愛想よくすべきものゝ由を言ひ聞かせました。奥さんは女として低い方ではありませんなんだ。それで居て顔の向き合ふところは丁度怪物のお腹です。お腹に向つて云ひ聞かした言葉がいつ怪物の頭まで傳はるやら覺束ないとわたくしは思ひました。怪物を誘つて自動車に乘りました。自動車の中の怪物は丁度辨當箱に澤庵漬を二つに曲げて入れた形でした。そしてわたくしはその隙間のつめです。神田明神前で自動車の電燈が獣目になりました。他の車を屈はせる爲め運轉手を馳らせた。降車て怪物は闇の中の自動車の周圍を玩具のやうに

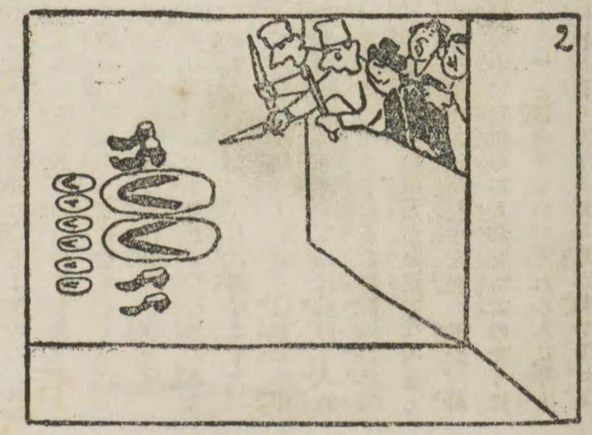
のタイヤがどの位皺面作るかに興味を持ちました。で怪物は一人で繰返し指を小さな熱所へ觸れては熱がつて居ます。然し大きな顔には愛物を弄る時のやうな魅せられた微笑が上がつて居ました。ふと一つの考案がわたくしの頭に閃きました。巨人は却つて小といふ事に異常な愛着を持つものではないかと。

本郷の『豐國』へ着きました。怪物は早速座敷の敷居に足を投げ出し漠と庭の青葉に映る電燈を眺め出しました。こゝで二つの微笑すべき事象を見逃してはなりません。弓なりに曲つた障子と尻の下に印紙程に見ゆる座蒲團と。

1

下

食ものや飲ものが來ました。怪物は小楊枝のやうに見ゆる手の箸を器用に操り鍋の牛肉を煮にかゝりました。女中がサイダーを抜き、コップへ置き注ぎにするのを見て怪物は急いで壜を奪ひ取り『さうやつちや失禮だぞ』と改めてわたくしに空のコップを持たせ、それからサイダーを

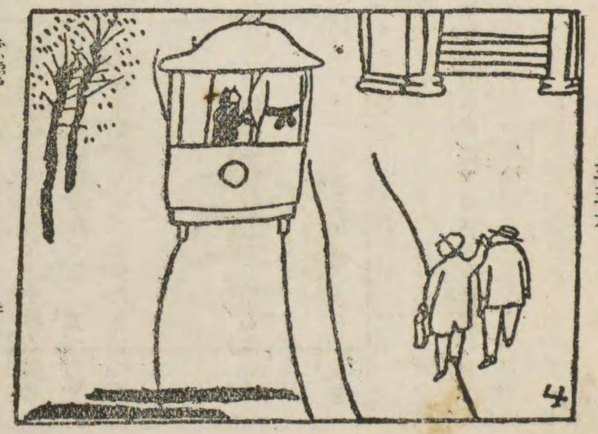


2

注いで呉れました。怪物にこんなこまかい常識があるとは思ひ寄りませんでした。

肉は煮えて來ました。わたくしは怪物がどのやうに大食するだらう、それを心待ちに注意を怠らず自分の箸を運びました。けれども怪物は汁の味を考へたり肉と葱との配合を程よく整へたり、可笑しな程人なみの事を致してます。

わたくしは堪へ兼て『君少し食べて見せて呉れないか。その積りで來たのだから』なぞ誘ひをかけました。怪物は少し面白くない顏をして『わしが大食だとてこの間も九州からの歸りの汽車でバナ、を二貫目食べたなぞと吹聽されたがそんなには食べられんわ。東京へ着いた時まだ八百目も殘つてた』と辯解しました。話を反らすやうに『その汽車の中で面白かつたぞ、田舍の客人が醉つてのう。跳へたオムレチの中へ顏を突つ込んで寢てしまつた』わたくし『ある親方が話したのだがね。君はそんなにうまくなくてもいゝ、兎に角普通に相



撲の一手を覺え込んだら相手に立つ敵は無いといつてたがどうだね。毎日あまり固くなり過ぎやしないか』『わしは仕切つてる時にのう。周圍で見物のわあといふ聲がするとどうしても立てんで。それに知つた人の顏が棧敷に見えるともういかんね。駄目だ』怪物案外氣が弱い。話の、間に同席の年配のある奥さんが怪物の帶に呆れて居ます。わたくし『君は巨きな身體の爲めにふだんの暮らし方に不自由な處は無いかね』怪物『無いよ』怪物はこゝで又話しを反らすやうに『牛肉の三枚肉を味淋と醬油と生姜に漬けてそれから生紙の上で燒いて食ふと美味いぞ』怪物は彼の身體の異常なる大食の事に觸れられる事は處女の恥を覺えるらしいのですからなる丈け人並の言行を努めたがるのでしよう。然し肉は段々煮て行つて鍋に山と積みそれからわたくしに『さあ、飯、食べろ』と申しましたのは世に所謂問ふに落ちず語るに落つの類ではないでしようか。怪物は部屋で食べて來たといつて四五杯でやめました。

歸りしなに玄關で怪物の草履を見て居る驚きの人々を認めました。

店を出て怪物はしよんべんをしました。わたくしも並んでしました。わたくしの肩の邊から逃り出る太い水流は砂利の山一つ彼方の大地へ落ちました。わたくしのは山の中腹です。

闇の横町で怪物は氣付いたやうにわたくしの肩を叩き『これ遣るよ子供に持つてけ』と大きな掌から胡桃を一つ呉れました。胡桃がわたしの掌に移るとそれは林檎でした。相撲場でS氏の奥さんがお腹に向つて言つた事が今彼の頭に利いたのでしよう。

怪物が電車に乘るといふから見て居ました。怪物は乘るや自分の定まつた居所のやうにさつさと車掌臺の右へ立ちました。

國技館寫意

初日

栃木山と大戸平ともつれて一しよに四本柱東檢査役中立の前へ落ちた、行司は栃木へ團扇を擧げる。見物不承知。みなみな手を長く出して『ヤイ栃木が手をついたぞ〳〵』と溜へ詰めかける。栃木あつけらかん。

二日目

源氏山曰く『これは眞田幸村の發明さ。相手を張つて張つて張拔き大砲にする氣さ』

紅葉山曰く『節季前の障子ぢやねえぞ。さう無闇に張られて堪るか』

三日目

阿久津川が兩國を負かして嬉しく花道を引上げて行く。

ひいき甲『俺れを關取の先へ歩かせろ』ひいき乙『うんにやあ、ならぬ俺が……』

四日目

土俵にて勝負酣なる最中館内へ蔦が一ぴき入つて來て天井へ止まつた、見物席の憲政會總裁加藤子爵と前々海相八代大將とが他の觀客同樣締りを忘れて仰向いてこの邊になると餘り人と賢愚の差別は無いやうだ。

五日目

小牛田山が前額の眞ン中に相撲膏を貼り登場、仕切つてやつと突つかける、膏藥は相手力士逆鉾の頭へ貼り附く、逆鉾待つたをして膏藥を剝し元の持主へ返した。『後日の爲めだ受取を貰つて置かう』まさかそんな事も云はぬが。

六日目

大潮が栃木山に對する仕切方か妙だ。苦心を重ね行くに從ひ段々斜に身體を持つて行く、仕舞ひに四本柱關ノ戸の前へ尻を持つて行つて仕舞つた、この儘で立會へば大潮は栃木の横ッ腹へ喰ひ付く事になる。栃木山も立にくがり固くなつたり怒つた顏をしたり苦笑したり、首を捻つたりお蔭で横綱の百面相が拜めた。待つた二十五分にして、立會へば何の事勝負はたつた二秒五分の四で片がついて仕舞つた。

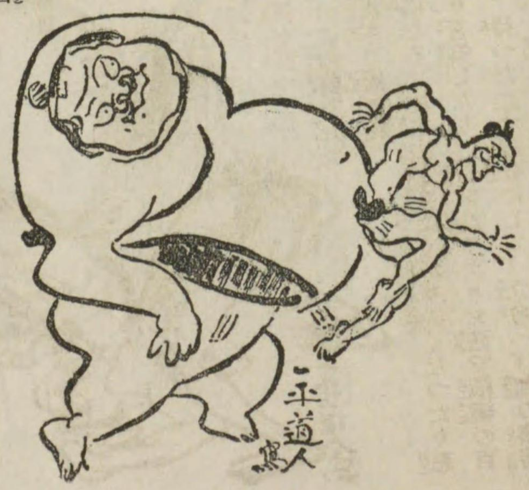
七日目

前の棧敷に藝者を連れて來てる客、後棧敷に藝者を連れて來てる客を横眼で睨み乍ら『今度の不景氣であいつの身代ももうふつ飛んで居る筈なのに痩我慢してあんな見榮を張つてやがる』後棧敷の客前棧敷の客を憫笑し乍ら『あいつも藝者でも連れて來て空景氣を張つてなきやいつ取付けに遇ふかもしれないからう、いはゞ藝者は信用維持の爲めの保護色さ』

國技館寫意

八日目

大潮大錦、立上るや右四つ大潮が下手投げを見せる刹那に大錦の例の太鼓腹がブーンと唸つた。コレ〳〵その邊を探して見て呉れ大潮が落ちては居ないか。



九日目

三杉磯に捻り氣味に突倒され大錦の太鼓腹が土俵に彈んだ。

臍に國技館の天井を見物させた。バウンドして行司溜へ落つこつた。それから苦笑し乍ら土俵へ轉び上つた。轉び上りといふ手は四十八手にない横綱發明の新手だ。

十日目

東方阿蘇ヶ嶽が成績優良とあつて優勝旗の旗手に選ばれた、相變らず難かしい顏付をしてる。優勝旗を貰つてそんなに迷惑かね。

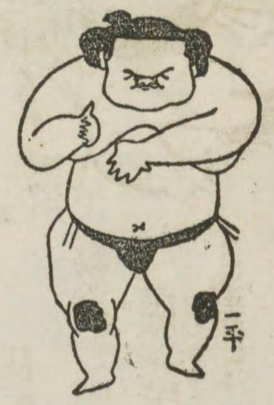
すまふ漫詩

一

福柳に勝つた白岩が
水をつけて居る前へ廻り
洋服姿のひいき一人
肩を叩いて褒めあげたり
尻へ廻つて
拜みけるかも

二

兩國に負けた鞍ヶ嶽
左四つ故
砂のつかぬ筈の手を
切りに打ち拂ひ
ついた腹の砂を
そのまゝに放つて
引上げけるかも



三

德川議長さんが
連れて來た孫さんに
やさしく
優勝嶽の説明を
してやつてる。
見物のいふ事にや
『人情に變りは
ないとみえるテ』

四

今日は賽日
お店ものらし三人
赤、黄、青三種の
大布を持つて來て
切りに振廻してる——目につく
不景氣このかた
お前のとこの旦那の顔も
丁度そのやうに
變つたろ

五

國技館
天井の丸窓から
岸精一さんに日が射せば
子供の帽子で遮つたり
法學博士が可愛らしい
小學生徒に
なりにけるかも

六

源氏山が土俵に上れば
やれ　やれ　又
待つたに時間がかゝるだろ
今のうちにと棧敷客
みんな、しつこに
立ちにけるかも

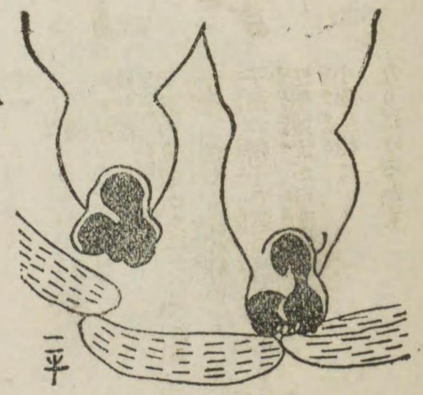
七

物言ひついた
清瀬の周圍へ
押寄せた東方
ひいきのひき倒し
雷檢査役が『わし等の話に
口を出して貰つては困る』
といへば
『批評する事は見物の自由だろ、エ
エ』
手にをへぬ。

すまう漫詩

八

紅葉に押された大錦
あわや、土俵を割らうとして
危く押し戻した時の
横綱の足の位置、
みなさん、子を持つても
相撲取りにだけは
させなさんな、
命がちぢむ。

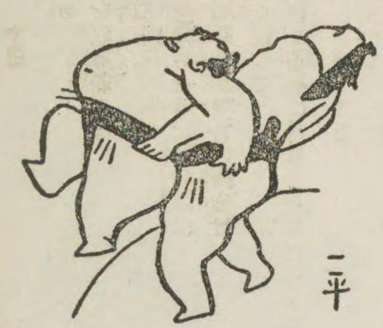


九

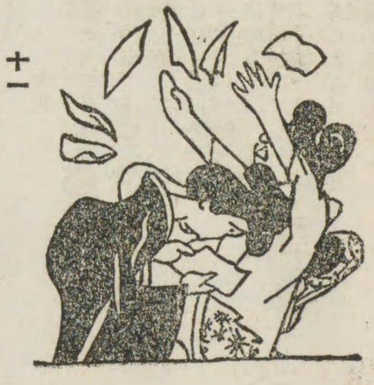
平福百穂畫伯と森田恒友畫伯と
その渴仰者に連れられて
來て見て居る
何れ歸りにはご飯を差上げて
序に一寸一筆
願はれるかも判らない
とも、知るや知らずや
二畫伯は無邪氣な顏をして
すまふを見て居る。

十

摩耶嵐を
捲き落さうとした
手が外れりや
若湊は
うしろ向き、
摩耶『若ちゃん、抱つこして
上げるから、土俵の外へお出なね』
若『あたい、嫌だい、嫌だい』



十一



○○○○會なるものが三階より澤山宣傳ビラをまいた
鳩の群の降りるやう
やつと一枚を手に入れたお雛妓
『姐さん、國賊○○主義
を殺せ、
と、書いてあつてよ、なあに？』
姐さん『やつぱし活動寫
眞の
廣告ぢやなくつて』

十二

人並の背丈で
長尺もの〻對馬をつれば
おつりが出る筈
それを敢てし乍ら
今更のやうに
おつりの仕末に困つてる
小松山かな

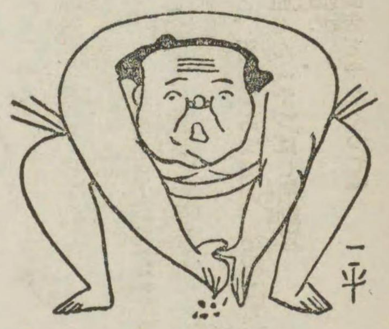
十三

兩國が
相撲を取る前には
神經質らしく
顏を痙攣させる。
自分の勝負が濟むと今度は
控力士として
次力士の爲めに
痙攣してやつてる

すまう漫詩

十四

鶴ケ濱の仕切り癖
相手の顏を見ては
砂を取つて手へ
こすりつける
三遍以上乾度やる
樣子が
『手前今に見ろかう團子に丸
めてやるから』と
云ふもの〻如し



十五

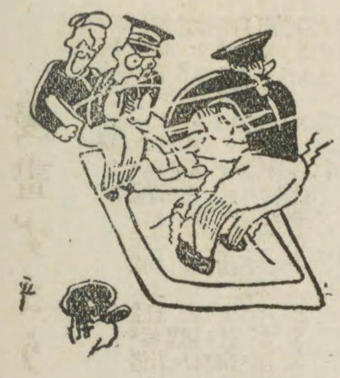
大錦と相撲ふべく
控部屋で支度してる
三杉磯
もう氣を逸らしてる樣子
外づした、ふんどしを
締込みを締めさせてる
取的の頭上に、振つて
『今日は潛航艇で一番
ぱん、と行く、信號の印ぢやい』と

十六

東方力士附の一車夫
酔って爐にあたって居たが
見て來た大ノ里、阿久津の
預についてまだ不平だ。

『あんなことつてねえなア、えい、
兄弟え』

友達の前へ進まうとして
炭火の上を歩いて行く
酔へる車夫さんは火渡りの
行者なるかも

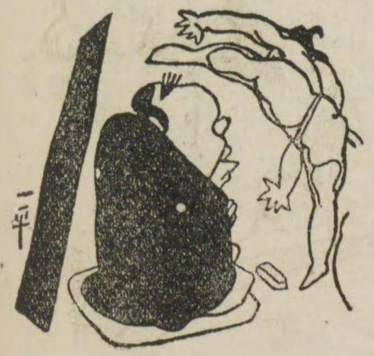


十七

常ノ花が清瀬に負けた
この一點は彼を近き將來に於て横綱
にさせるさせぬにも關する大事な點
であるのだ。
彼が泣顔になつたも
道理なるかも

十八

栃木山につきはなされた
小牛田山
勢餘つて
檢査役湊川の
頭の上へ足を廻し
三番叟を舞つた
千秋樂に三番叟は
お門違ひなるかも



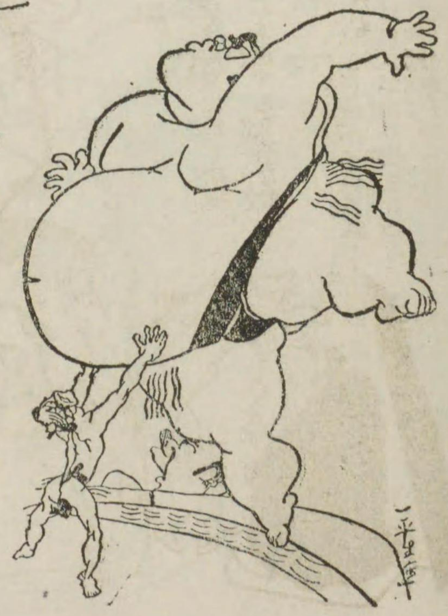
漫畫ずまう

(一)

六尺四寸の對馬洋に立向ふ紅葉川は小兵で半分位しかない。到底相撲になるまいと思ひの外立上るや息もつかせずばん〳〵突出して仕舞つた。土俵際にては紅葉川急に身體から五六本手が出て腋の下から羽根が生えた、天狗の化身かの、どうもさうらしい面だ。

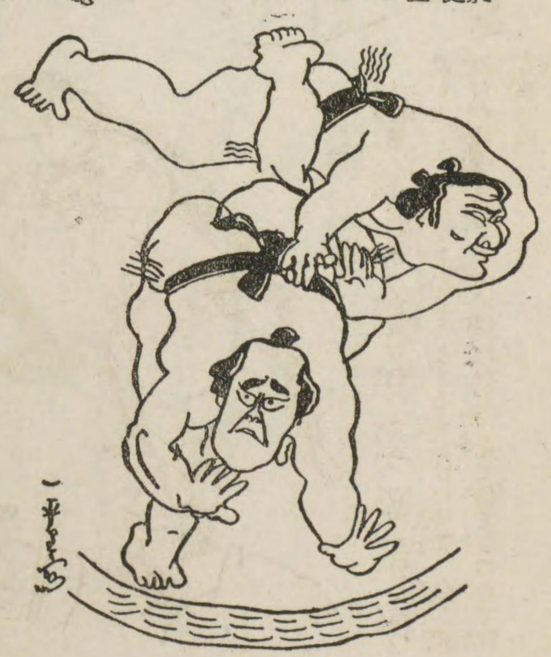
(二)

この畫を大福餅に小楊枝が刺さつたところと受取つては困る。紅葉川が横綱大錦をグングン押し立てとうく土俵際に押し切つたところだ。



（三）

鳳君が後じさりしつゝ大ノ里君の突張りを叩き込んだ、つんのめつた大ノ里君は何處かつかまへ處はないかと鳳君の身體へ手を遣る。鳳君の身體は電車でないから釣革は無かつた。つる〳〵滑つて腿から足へずつとこけて仕舞つた。大ノ里君はゆるんだ褌みたいな闘取さんだよ。

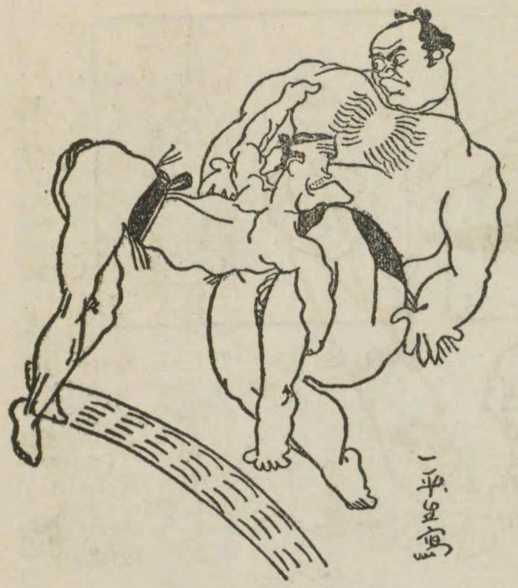


（四）

これは三杉磯がイナされて土俵を駈け出すところ。その上追駈け源氏が送り出すところ。この勢ひをどこまでも續けて行けば多分龜戸から船橋を抜けて今夜は千葉泊りといふ事になるだらう。

（五）

栃木君敗られた體勢を挽回する時大潮君の面前へ失禮な左の大足をニュッと出した。大潮君天より與ふるこの大足嚙ゝ付かずんばあるべからずと右手で嚙り付いた。それからカマキリが鰐を嚙む樣な顏をして外枠で渡し込んだ。



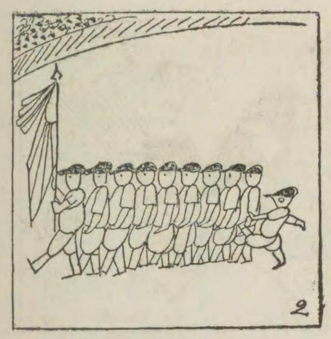
漫畫ずまう

（六）

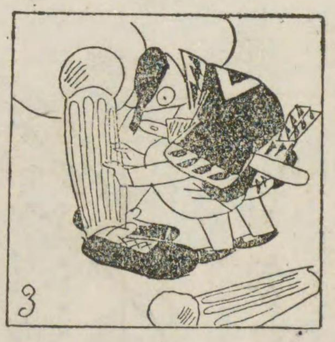
大潮常ノ花の一番、水入り前の光景。双方五分も隙のないところを隙を見出さうとする命がけの骨折、腹が波打ちの競爭をしてるので知れかし。見て居て氣の毒で物も言へぬ。

野球大會漫畫　補缺物語

一　補缺の三角頭は校長に談判した『僕をゼヒ大會へやつて下さい。若し行けないやうだつたらバットの棒飲みをして自殺します』

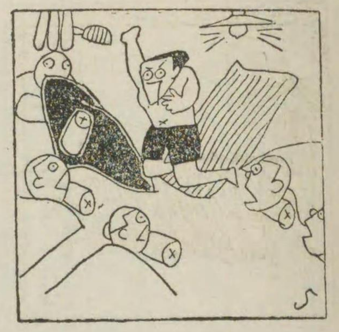


二　入場式、補缺の三角頭は一番尻についてゆく癖に一番威張つてる



三　補缺の役目は庶務の役目、捕手のすね當を『サアお穿かせいたしませう』

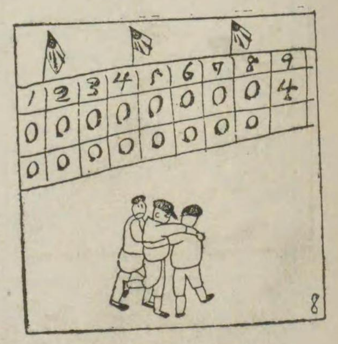
四　選手席より出場者への傳令役もする、あいたバットの片づけ役もする。當らぬバットには三角頭は一々拳固の褒美をやる。



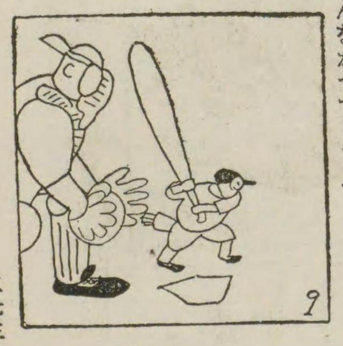
五　合宿所で三角頭、夜中に寢ぼけて飛び起き『ソラ、ランナー、サードへ行つた。ソラセコンドを盜むぞ』とうるさくてしやうがない、さるぐつわをはめて寢かされる。

六　西瓜を食ふ段になると補缺でもキツプテン以上に食ふ。

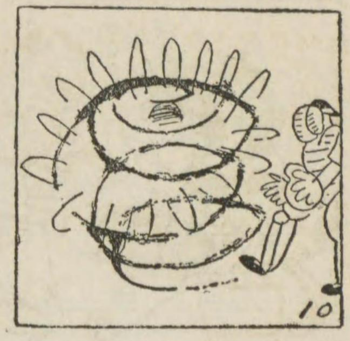
七　三角頭は腹くだしをした。キャプテン舌打ちして尻にせんをかつてしまふ。



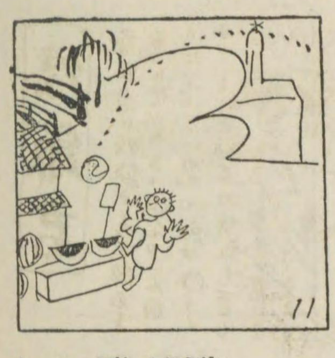
八　試合は互角で最後まで進んだ、かくて唯一の輻みの打手は筋をちがへて出場出來ない、點數は同點、同點で進んで來た。仕方がない三角頭にやらせろ。然し、今年の試合はこれでもう負けだ。



九　三角頭、勇氣りンくとして場に立つ。

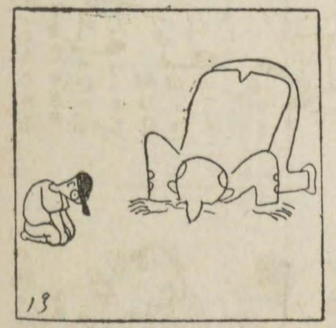
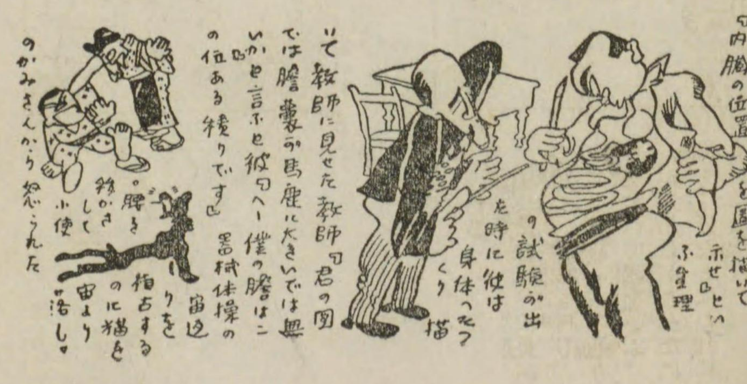


十　こりや何だい。



十一　三角頭の打つた球は甲子園から大阪へ飛び大阪見物して道頓堀の西瓜屋の店頭へ落ちたとはどこまで西瓜ずきな男だらう。

十二　みな〳〵『エヘ〳〵〳〵』



十三　國へ歸ると、校長が部屋へ三角頭を呼び、ドアを締め『この通り手をついて禮をいふ。だが、わしがこんなに頭を下げたとはたれにもいふな』